

Sun Server X3-2L (旧 Sun Fire X4270 M3)

設置ガイド

Copyright © 2013, Oracle and/or its affiliates. All rights reserved.

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複写、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。

ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクル社までご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントを、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供する場合は、次の通知が適用されます。

U.S. GOVERNMENT END USERS:

Oracle programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, delivered to U.S. Government end users are "commercial computer software" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, shall be subject to license terms and license restrictions applicable to the programs. No other rights are granted to the U.S. Government.

このソフトウェアもしくはハードウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアもしくはハードウェアは、危険が伴うアプリケーション(人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む)への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する場合、安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性(redundancy)、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用したことにより起因して損害が発生しても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

OracleおよびJavaはOracle Corporationおよびその関連企業の登録商標です。その他の名称は、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

Intel, Intel Xeonは、Intel Corporationの商標または登録商標です。すべてのSPARCの商標はライセンスをもとに使用し、SPARC International, Inc.の商標または登録商標です。AMD, Opteron, AMDロゴ, AMD Opteronロゴは、Advanced Micro Devices, Inc.の商標または登録商標です。UNIXは、The Open Groupの登録商標です。

このソフトウェアまたはハードウェア、そしてドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても一切の責任を負いかねます。

目次

はじめに	7
最新のソフトウェアとファームウェアの入手	7
このドキュメントについて	7
関連ドキュメント	8
フィードバック	8
サポートとアクセシビリティ	8
1. 設置手順について	9
設置手順の概要	9
2. サーバーの機能とコンポーネント	11
サーバーコンポーネント	11
UEFI BIOS	14
フロントパネルのステータスインジケータ、コネクタ、ドライブ	14
3.5 インチドライブ 12 基搭載のフロントパネル	14
2.5 インチドライブ 24 基搭載のフロントパネル	15
2.5 インチドライブ 8 基と DVD 搭載のフロントパネル	16
バックパネルのステータスインジケータ、コネクタ、ドライブ、PCIe スロット	17
サーバー管理ソフトウェアの概要	18
Oracle System Assistant	18
Oracle ILOM の概要	19
UEFI BIOS の概要	19
3. サーバーの設置準備	23
出荷梱包内容一覧	23
オプションのコンポーネントの取り付け	24
設置に必要な工具と装置	24
ESD と安全対策	25
4. サーバーのラックへの設置	27
設置の前提条件	27
ラックの要件	28
サーバーのラックマウント作業時の安全対策	28
ラックマウントキットの内容	30
▼ 取り付け用にラックを固定	30
▼ 固定部品の取り付け	31
▼ ラックの取り付け位置の決定	32
▼ 工具不要スライドレール構成部品の取り付け	33
▼ スライドレール構成部品へのサーバーの取り付け	35
▼ 第 2 世代のケーブル管理アームの取り付け	37
▼ 第 2 世代のケーブル管理アームの取り外し	46
▼ 第 1 世代のケーブル管理アームの取り付け	50
▼ スライドレールと CMA の動作の確認	53
5. サーバーの配線	57

背面のケーブル接続およびポート	57
Ethernet ポート	59
サーバーへのデータケーブルと電源コードの接続	59
▼ データケーブルの接続	60
▼ 電源コードの接続	60
6. Oracle ILOM への接続	63
Oracle ILOM のハードウェアとインタフェース	64
ネットワークのデフォルト設定	64
ローカルのシリアル接続を使用した Oracle ILOM へのログイン	65
▼ ローカルのシリアル接続を使用した Oracle ILOM へのログイン	65
リモート Ethernet 接続を使用した Oracle ILOM へのログイン	66
サーバー SP の IP アドレスの確認	66
▼ Web インタフェースを使用した Oracle ILOM へのリモートログイン	66
▼ コマンド行インタフェースを使用した Oracle ILOM へのリモートログイン	68
▼ SP IPv4 アドレスの表示と変更	69
▼ SP IPv6 アドレスの表示と変更	71
Oracle ILOM 経由でのホストコンソールへのアクセス	73
▼ マウスモード設定	73
▼ Oracle ILOM Web インタフェースを使用したホストコンソールへの接続	74
▼ Oracle ILOM コマンド行インタフェースを使用したホストのシリアルコンソールへの接続	76
サービスプロセッサ接続のトラブルシューティング	77
Oracle ILOM を使用したサービスプロセッサのリセット	77
▼ サーバーのバックパネルからのサービスプロセッサのリセット	77
▼ root アカウントのパスワードの復旧	78
7. Oracle System Assistant を使用したソフトウェアおよびファームウェアの設定	79
▼ ソフトウェアおよびファームウェアの設定	79
オペレーティングシステムおよびドライバの設定	81
8. OS インストール用のサーバードライブの構成	83
RAID 構成ツール	83
RAID 構成の要件	84
Oracle System Assistant を使用した複数のストレージドライブによる RAID ボリュームの構成	85
▼ Sun Storage 6 Gb SAS PCIe 内蔵 HBA を使用したストレージドライブ上での RAID の構成	86
▼ Sun Storage 6 Gb SAS PCIe RAID 内蔵 HBA を使用したストレージドライブ上での RAID の構成	91
BIOS RAID 構成ユーティリティを使用した RAID の構成	97
Sun Storage 6 Gb SAS PCIe 内蔵 HBA を使用した RAID の構成	97
Sun Storage 6 Gb SAS PCIe RAID 内蔵 HBA を使用した UEFI ブートモードでの RAID の構成	100
Sun Storage 6 Gb PCIe RAID 内蔵 HBA を使用したレガシー BIOS ブートモードでの RAID の構成	105

9. インストール済みの Oracle Solaris 11 オペレーティングシステムの構成	109
インストール済みのオペレーティングシステム上での RAID の制限	109
オペレーティングシステムのオプション	110
Oracle Solaris の構成ワークシート	110
▼ インストール済みの Oracle Solaris 11 オペレーティングシステムの構成	113
Oracle Solaris 11 オペレーティングシステムのドキュメント	115
10. インストール済みの Oracle Linux オペレーティングシステムの構成	117
Oracle Linux 構成ワークシート	117
▼ インストール済みの Oracle Linux オペレーティングシステムの構成	118
▼ Linux OS の登録と更新	120
Oracle Linux オペレーティングシステムのドキュメント	121
11. インストール済みの Oracle VM 3.x ソフトウェアの構成	123
インストール済みの Oracle VM Server と Oracle VM Manager の互換性要件 ...	123
Oracle VM Server 構成ワークシート	124
▼ インストール済み Oracle VM の構成	124
Oracle VM のドキュメント	128
12. システムの電源の制御とインストール問題のトラブルシューティング	129
サーバーの電源切断による正常停止	129
▼ 電源ボタンを使用した正常な停止	130
▼ Oracle ILOM コマンド行インタフェースを使用した正常な停止	130
▼ Oracle ILOM Web インタフェースを使用した正常な停止	130
サーバーの電源切断による即時停止	130
▼ 電源ボタンを使用した即時停止	131
▼ Oracle ILOM コマンド行インタフェースを使用した即時停止	131
▼ Oracle ILOM Web インタフェースを使用した即時停止	131
サーバーのリセット	132
▼ Oracle ILOM コマンド行インタフェースを使用したサーバーのリセット	132
▼ Oracle ILOM Web インタフェースを使用したサーバーのリセット	132
インストールのトラブルシューティング	132
技術サポート情報ワークシート	134
システムのシリアル番号の確認	134
13. サーバーファームウェアとソフトウェアの入手	137
ファームウェアとソフトウェアのアップデート	137
ファームウェアとソフトウェアへのアクセスオプション	138
ソフトウェアリリース	138
ファームウェアとソフトウェアへのアクセス	139
▼ My Oracle Support を使用したファームウェアとソフトウェアのダウンロード	139
物理メディアのリクエスト	140
物理メディアのリクエスト用の情報を収集する	140
その他の方法によるアップデートのインストール	142
索引	143

このドキュメントの使用法

この設置ガイドでは、Oracle の Sun Server X3-2L のハードウェアの設置手順と構成手順を説明します。



注記

Sun Server X3-2L は以前は Sun Fire X4270 M3 サーバーという名前でした。この以前の名前が、まだソフトウェアに表示されることがあります。新しい製品名は、システム機能の変更を示すものではありません。

このドキュメントは、技術者、システム管理者、承認サービスプロバイダ (ASP)、およびサーバーシステムについて理解しているユーザーを対象としています。

このセクションでは、最新のソフトウェアとファームウェア、ドキュメントとフィードバック、およびサポートとアクセシビリティ情報の入手方法を説明します。

- [7 ページの「最新のソフトウェアとファームウェアの入手」](#)
- [7 ページの「このドキュメントについて」](#)
- [8 ページの「関連ドキュメント」](#)
- [8 ページの「フィードバック」](#)
- [8 ページの「サポートとアクセシビリティ」](#)

最新のソフトウェアとファームウェアの入手

各 Oracle x86 サーバー、サーバーモジュール (ブレード)、およびブレードシャーシ用のファームウェア、ドライバ、その他のハードウェア関連ソフトウェアは定期的に更新されます。

最新バージョンは次の 3 つのうちいずれかの方法で入手できます。

- Oracle System Assistant – Oracle x86 サーバーの出荷時にインストール済みの新規オプションです。必要なすべてのツールとドライバが含まれており、サーバーに組み込まれています。
- My Oracle Support: <http://support.oracle.com>
- 物理メディアの申請

詳細については、[137 ページの「サーバーファームウェアとソフトウェアの入手」](#)を参照してください。

このドキュメントについて

このドキュメントセットは、PDF および HTML の両形式で利用できます。情報は (オンラインヘルプと同様の) トピック単位の形式で提供されるので、章、付録、セクション番号はありません。

特定のトピック (ハードウェア設置やプロダクトノートなど) に関するすべての情報が含まれる PDF バージョンを生成するには、HTML ページの左上にある PDF ボタンをクリックします。

関連ドキュメント

ドキュメント	リンク
すべての Oracle ドキュメント	http://www.oracle.com/documentation
Sun Server X3-2L	http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=SunServerX3-2L
Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.1	http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=ilom31
Oracle Hardware Management Pack 2.2	http://www.oracle.com/goto/OHMP/docs

フィードバック

次でこのドキュメントについてのフィードバックをお送りください

<http://www.oracle.com/goto/docfeedback>

サポートとアクセシビリティ

説明	リンク
My Oracle Support を通じた電子的なサポートへのアクセス	http://support.oracle.com
	聴覚障害の方へ: http://www.oracle.com/accessibility/support.html
アクセシビリティに対する Oracle のコミットメントについて	http://www.oracle.com/us/corporate/accessibility/index.html

1

・・・ 第 1 章

設置手順について



注記

Sun Server X3-2L は以前は Sun Fire X4270 M3 サーバーという名前でした。この以前の名前が、まだソフトウェアに表示されることがあります。新しい製品名は、システム機能の変更を示すものではありません。

このセクションでは、設置手順の概要について説明します。

説明

リンク

設置手順全体を確認し、各手順の詳細情報へのリンクを [9 ページの「設置手順の概要」](#) 示します。

関連情報

- ・ [11 ページの「サーバーの機能とコンポーネント」](#)
- ・ [23 ページの「サーバーの設置準備」](#)
- ・ [27 ページの「サーバーのラックへの設置」](#)
- ・ [57 ページの「サーバーの配線」](#)
- ・ [79 ページの「Oracle System Assistant を使用したソフトウェアおよびファームウェアの設定」](#)
- ・ [63 ページの「Oracle ILOM への接続」](#)
- ・ [109 ページの「インストール済みの Oracle Solaris 11 オペレーティングシステムの構成」](#)
- ・ [117 ページの「インストール済みの Oracle Linux オペレーティングシステムの構成」](#)
- ・ [123 ページの「インストール済みの Oracle VM 3.x ソフトウェアの構成」](#)
- ・ [129 ページの「システムの電源の制御とインストール問題のトラブルシューティング」](#)

設置手順の概要

次の表に、Sun Server X3-2L の設置に必要なタスクを示します。

手順	説明	リンク
1	『プロダクトノート』でサーバーの最新の情報について確認します。	『Sun Server X3-2L プロダクトノート』 (http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=SunServerX3-2L)

手順	説明	リンク
2	サーバーの設置場所の要件、仕様、コンポーネント、およびディスク管理オプションを確認します。	<ul style="list-style-type: none"> 『サイト計画』の「設置場所の準備」 11 ページの「サーバーの機能とコンポーネント」
3	サーバーの機能を確認します。	11 ページの「 サーバーの機能とコンポーネント 」
4	注文したすべてのアイテムを受け取ったことを確認し、静電放電および安全性に関する注意事項について確認し、必要な工具類および装置を組み立てます。	23 ページの「 サーバーの設置準備 」
5	別途出荷されたオプションのコンポーネントを取り付けます。	『 サービス 』の「 システムコンポーネントについて 」
6	サーバーをラックに取り付けます。	27 ページの「 サーバーのラックへの設置 」
7	データ管理およびサーバー管理用ケーブルをサーバーに接続します。	57 ページの「 サーバーの配線 」
8	Oracle System Assistant を使用してシステムのソフトウェアとファームウェアを設定します。	79 ページの「 Oracle System Assistant を使用したソフトウェアおよびファームウェアの設定 」
9	Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) に接続します。	63 ページの「 Oracle ILOM への接続 」
10	該当する場合は、インストール済みのオペレーティングシステムを構成します。	<ul style="list-style-type: none"> 109 ページの「インストール済みの Oracle Solaris 11 オペレーティングシステムの構成」 117 ページの「インストール済みの Oracle Linux オペレーティングシステムの構成」 123 ページの「インストール済みの Oracle VM 3.x ソフトウェアの構成」
11	<p>該当する場合は、次のいずれかのオペレーティングシステムまたは仮想マシンをインストールします。</p> <ul style="list-style-type: none"> Oracle Solaris Linux Windows Oracle VM VMware ESXi 	<ul style="list-style-type: none"> 『Oracle Solaris インストール』の「Oracle Solaris オペレーティングシステムのインストール」 『Linux インストール』の「Linux オペレーティングシステムのインストール」 『Windows インストール』の「Windows Server 2008 のインストール」 『Oracle VM インストール』の「Oracle VM のインストール」 『VMware ESXi インストール』の「VMware ESXi のインストール」
12	インストールの問題をトラブルシューティングします。	129 ページの「 システムの電源の制御とインストール問題のトラブルシューティング 」

・・・第 2 章

サーバーの機能とコンポーネント

このセクションでは、サーバーの各種コンポーネント、インジケータ、コネクタ、およびディスク管理オプションについて説明します。

説明	リンク
サーバーの機能とコンポーネントを確認します。	11 ページの「サーバーコンポーネント」
UEFI BIOS とレガシー BIOS の機能を確認します。	14 ページの「UEFI BIOS」
サーバーのフロントパネルおよびバックパネルにあるステータスインジケータ、コネクタ、およびストレージドライブの場所を確認します。	14 ページの「フロントパネルのステータスインジケータ、コネクタ、ドライブ」 17 ページの「バックパネルのステータスインジケータ、コネクタ、ドライブ、PCIe スロット」

関連情報

- [57 ページの「サーバーの配線」](#)

サーバーコンポーネント

表2.1 Sun Server X3-2L コンポーネント

機能	説明
プロセッサ	それぞれ 4 つの組み込み DDR3 メモリーコントローラを搭載した 1 基または 2 基のプロセッサ。次の機能を備えたプロセッサがサポートされています。 <ul style="list-style-type: none">2.4 GHz、4 コア、80W プロセッサ2.5 GHz、6 コア、95W プロセッサ2.2 GHz、8 コア、95W プロセッサ2.9 GHz、8 コア、135W プロセッサ
メモリー	プロセッサごとに最大 8 個の DIMM を搭載可能。デュアルプロセッサシステムでは、最大 16 個の 32G バイト DDR3 DIMM で 512G バイトの最大メモリー容量がサポートされています。 シングルプロセッサシステムでは、最大 8 個の 32G バイト DDR3 DIMM で 256G バイトの最大メモリー容量がサポートされています。

機能	説明
ストレージ (フロント)	<p>ストレージデバイスは、ハードディスクドライブ (HDD) と半導体ディスク (SSD) ドライブの両方で構成できます。構成の内容:</p> <ul style="list-style-type: none"> • ホットプラグ対応 3.5 インチ SAS HDD (12 台まで) • ホットプラグ対応 2.5 インチ SAS/SATA HDD/SSD (24 台まで) • ホットプラグ対応 2.5 インチ SAS/SATA HDD/SSD (8 台まで) と DVD <p>注記</p> <p>12 台の 3.5 インチストレージドライブと 24 台の 2.5 インチストレージドライブが含まれるストレージドライブ構成には、内蔵 SAS エクспанダが必要です。</p>
ストレージ (背面)	<p>2.5 インチ SAS/SATA ストレージドライブ (2 台まで)。これらのストレージドライブは、12 台の 3.5 インチストレージドライブ構成と 24 台の 2.5 インチストレージドライブ構成でのみサポートされます。</p> <p>注記</p> <p>背面にマウントされた 2.5 インチ SAS/SATA ストレージドライブには、内蔵 SAS エクспанダが必要です。</p> <p>注意</p> <p>Oracle Engineered Systems では、背面ストレージドライブ 1 に、ホストバスアダプタ (HBA) カード用のリモートバッテリーモジュールが装着されている場合があります。バッテリーモジュールは顧客交換可能ユニットではなく、顧客が取り外したり交換したりすることはできません。詳細については、<i>Service, Battery Module</i>を参照してください。</p>
PCI Express (PCIe) I/O スロット	<p>ロープロファイル PCIe カード装着可能な PCIe Gen3 スロット 6 基:</p> <ul style="list-style-type: none"> • スロット 1: x16 電気インタフェース • スロット 2 - 6: x8 電気インタフェース <p>注記</p> <p>シングルプロセッサシステムでは、PCIe スロット 1、2、および 3 は機能しません。</p>
内蔵 HBA	<p>ストレージドライブの制御および管理用に内蔵ホストバスアダプタ (HBA) カードが 1 枚サポートされています。</p> <p>注記</p> <p>PCIe スロット 6 はプライマリ HBA カードスロットです。</p>
Ethernet ポート	<p>背面パネルに 10GBASE-T RJ-45 ギガビット Ethernet (GbE) ポート 4 基。</p>

機能	説明
	<p>注記</p> <p>シングルプロセッサシステムでは、Ethernet ポート NET2 および NET3 は機能しません。</p>
USB 2.0 ポート	<p>前面 2 基、背面 2 基、内蔵 2 基。</p> <p>注記</p> <p>内蔵 USB ポートのうち 1 基は、Oracle System Assistant が格納された USB ドライブに事前に組み込まれていることがあります。詳細は、79 ページの「Oracle System Assistant を使用したソフトウェアおよびファームウェアの設定」を参照してください。</p>
VGA ポート	<p>高密度 DB-15 ビデオポートが背面に 1 基。</p>
サービスプロセッサ (SP)	<p>サーバーは、AST2300 サービスプロセッサ (SP) を搭載しています。SP は、IPMI 2.0 準拠のリモート管理機能を提供します。SP の機能:</p> <ul style="list-style-type: none"> • Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.1 • シリアル接続を使用したローカル Oracle ILOM コマンド行アクセス • 専用の 10/100BASE-T 管理ポート (NET MGT) およびオプションでホストの Ethernet ポート (サイドバンド管理) のいずれかを使用して、SP への Ethernet アクセスをサポート • IP 経由のリモートのキーボード、ビデオ、マウス、およびストレージ (KVMS) をサポート
電源装置	<p>2 台のホットスワップ対応の 1000W 冗長電源装置。</p>
冷却ファン	<p>4 つの 80mm、ホットスワップ対応ファンモジュール。各ファンモジュールは 2 枚の逆回転ファンペアを備えています。各電源装置はそれぞれ個別に冷却ファンを備えています。</p>
オペレーティングシステム	<ul style="list-style-type: none"> • オプションで、Oracle Solaris および Oracle Linux オペレーティングシステムをサーバーにプリインストールできます。 • Oracle Solaris、Linux、および Windows がサポートされています。サーバーでサポートされている OS バージョンの完全な一覧については、http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=SunServerX3-2L にある『<i>Sun Server X3-2L プロダクトノート</i>』を参照してください。
仮想化ソフトウェア	<ul style="list-style-type: none"> • サーバーに Oracle VM ソフトウェアをオプションでプリインストールできます。 • Oracle VM と VMware ESXi がサポートされています。

関連情報

- 14 ページの「[フロントパネルのステータスインジケータ、コネクタ、ドライブ](#)」
- 17 ページの「[バックパネルのステータスインジケータ、コネクタ、ドライブ、PCIe スロット](#)」

UEFI BIOS

Sun Server X3-2L には、Unified Extensible Firmware Interface (UEFI) 準拠の BIOS が組み込まれており、旧バージョンの BIOS に比べて豊富なブートオプションとアダプタカードの構成機能を備えています。

また、UEFI ドライバが用意されていないソフトウェアやアダプタ用にレガシーバージョンの BIOS もサポートしています。デフォルトの設定では、レガシーバージョンが使用されます。

UEFI BIOS の詳細は、『*管理*』の「BIOS 構成パラメータの設定」を参照してください。

フロントパネルのステータスインジケータ、コネクタ、ドライブ

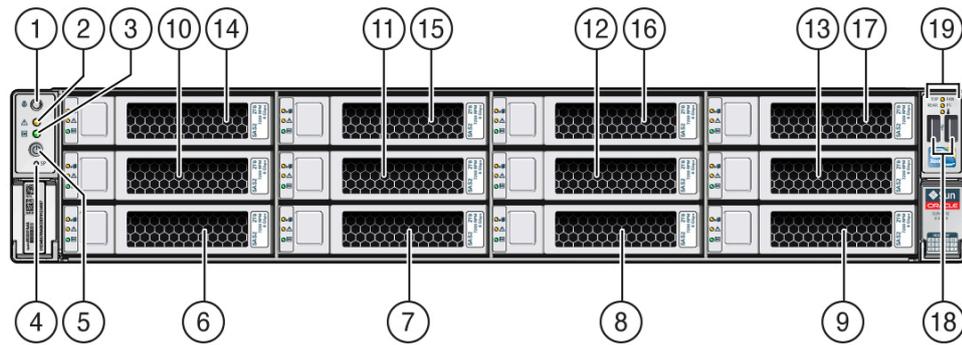
これらのセクションでは、Sun Server X3-2L で使用可能な 3 つのドライブ構成のフロントパネルにあるステータスインジケータ (LED)、コネクタ、およびドライブについて説明します。

- [14 ページの「3.5 インチドライブ 12 基搭載のフロントパネル」](#)
- [15 ページの「2.5 インチドライブ 24 基搭載のフロントパネル」](#)
- [16 ページの「2.5 インチドライブ 8 基と DVD 搭載のフロントパネル」](#)

3.5 インチドライブ 12 基搭載のフロントパネル

次の図は、3.5 インチのストレージドライブ 12 台で構成された Sun Server X3-2L のフロントパネルに配置されたステータスインジケータ (LED)、コネクタ、およびドライブを示しています。

図2.1 3.5 インチドライブ 12 基搭載のフロントパネル



図の説明

- 1** ロケータ LED/ロケータボタン: 白色
- 2** 保守要求 LED: オレンジ色
- 3** 電源/OK LED: 緑色
- 4** SP OK LED: 緑色
- 5** 電源ボタン
- 6** ストレージドライブ 0
- 7** ストレージドライブ 1
- 8** ストレージドライブ 2
- 9** ストレージドライブ 3
- 10** ストレージドライブ 4
- 11** ストレージドライブ 5
- 12** ストレージドライブ 6
- 13** ストレージドライブ 7
- 14** ストレージドライブ 8
- 15** ストレージドライブ 9
- 16** ストレージドライブ 10
- 17** ストレージドライブ 11
- 18** USB 2.0 コネクタ (2)
- 19** 保守要求 LED (3): 上部: ファンモジュール (オレンジ色)、背面: 電源装置 (オレンジ色)、温度超過アイコン: システム温度超過警告 (オレンジ色)

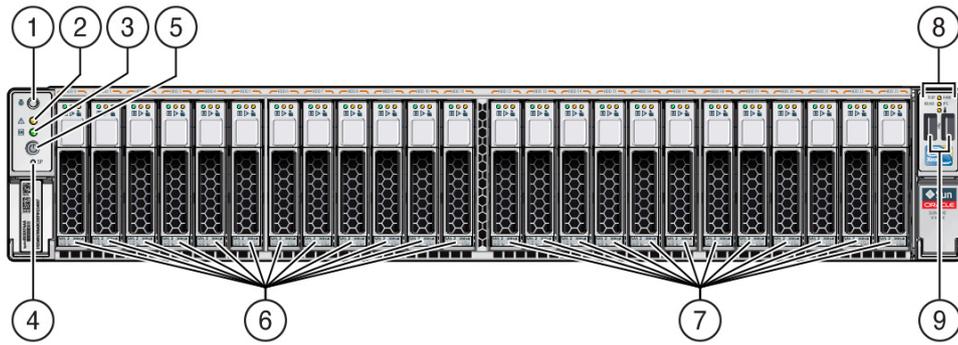
関連情報

- [15 ページの「2.5 インチドライブ 24 基搭載のフロントパネル」](#)
- [16 ページの「2.5 インチドライブ 8 基と DVD 搭載のフロントパネル」](#)
- [17 ページの「バックパネルのステータスインジケータ、コネクタ、ドライブ、PCIe スロット」](#)

2.5 インチドライブ 24 基搭載のフロントパネル

次の図は、2.5 インチのストレージドライブ 24 基搭載の Sun Server X3-2L のフロントパネルに配置されたステータスインジケータ (LED)、コネクタ、およびドライブを示しています。

図2.2 2.5 インチドライブ 24 基搭載のフロントパネル



図の説明

- 1 ロケータ LED/ロケータボタン: 白色
- 2 保守要求 LED: オレンジ色
- 3 電源/OK LED: 緑色
- 4 SP OK LED: 緑色
- 5 電源ボタン
- 6 ストレージドライブ 0 - 11
- 7 ストレージドライブ 12 - 23
- 8 保守要求 LED (3): 上部: ファンモジュール (オレンジ色)、背面: 電源装置 (オレンジ色)、温度超過アイコン: システム温度超過警告 (オレンジ色)
- 9 USB 2.0 コネクタ (2)

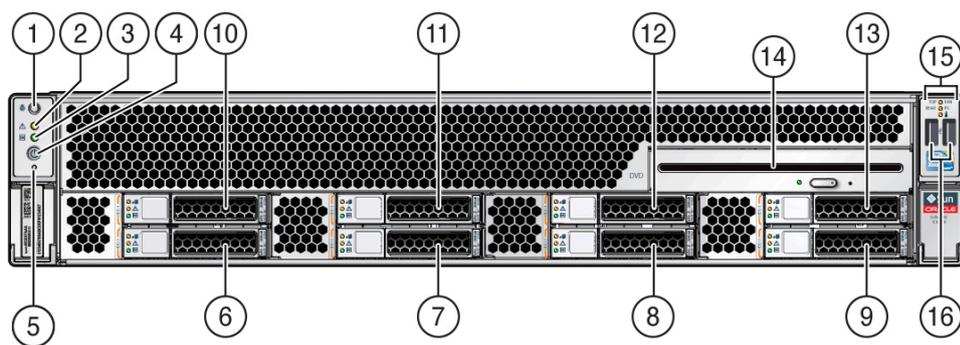
関連情報

- ・ [14 ページの「3.5 インチドライブ 12 基搭載のフロントパネル」](#)
- ・ [16 ページの「2.5 インチドライブ 8 基と DVD 搭載のフロントパネル」](#)
- ・ [17 ページの「バックパネルのステータスインジケータ、コネクタ、ドライブ、PCIe スロット」](#)

2.5 インチドライブ 8 基と DVD 搭載のフロントパネル

次の図は、2.5 インチのストレージドライブ 8 基と DVD ドライブ 1 基搭載の Sun Server X3-2L のフロントパネルに配置されたステータスインジケータ (LED)、コネクタ、およびドライブを示しています。

図2.3 2.5 インチドライブ 8 基と DVD 搭載のフロントパネル



図の説明

- 1** ロケータ LED/ロケータボタン: 白色
- 2** 保守要求 LED: オレンジ色
- 3** 電源/OK LED: 緑色
- 4** 電源ボタン
- 5** SP OK LED: 緑色
- 6** ストレージドライブ 0
- 7** ストレージドライブ 1
- 8** ストレージドライブ 2
- 9** ストレージドライブ 3
- 10** ストレージドライブ 4
- 11** ストレージドライブ 5
- 12** ストレージドライブ 6
- 13** ストレージドライブ 7
- 14** SATA DVD ドライブ
- 15** 保守要求 LED (3): 上部: ファンモジュール (オレンジ色)、背面: 電源装置 (オレンジ色)、温度超過アイコン: システム温度超過警告 (オレンジ色)
- 16** USB 2.0 コネクタ (2)

関連情報

- [14 ページの「3.5 インチドライブ 12 基搭載のフロントパネル」](#)
- [15 ページの「2.5 インチドライブ 24 基搭載のフロントパネル」](#)
- [17 ページの「バックパネルのステータスインジケータ、コネクタ、ドライブ、PCIe スロット」](#)

バックパネルのステータスインジケータ、コネクタ、ドライブ、PCIe スロット

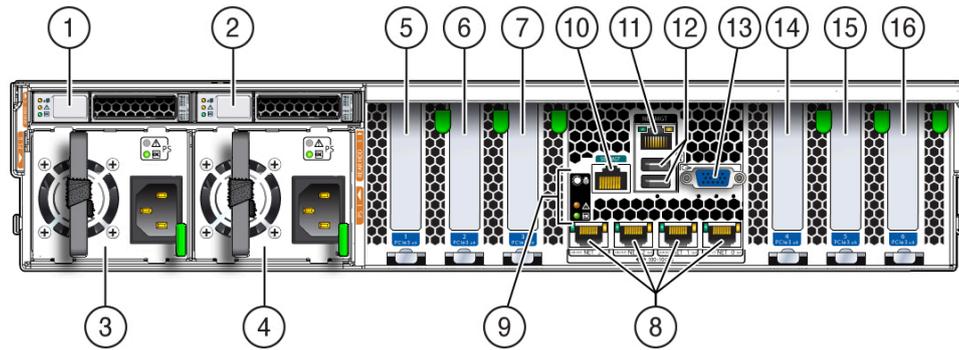
このセクションでは、Sun Server X3-2L のバックパネルを示し、そのコントロール、コネクタ、およびステータスインジケータ (LED) について説明します。



注記

12 および 24 基のフロントパネルストレージドライブで構成されているシステムには、背面にマウントされたストレージドライブ 2 基も搭載されています。8 基のフロントパネルストレージドライブで構成されているシステムには、背面にマウントされたストレージドライブは搭載されていません。

図2.4 Sun Server X3-2L バックパネル



図の説明

- 1 背面ストレージドライブ 0
- 2 背面ストレージドライブ 1 (Oracle Engineered Systems では、背面ストレージドライブ 1 に、HBA カード用のリモートバッテリーモジュールが装着されている場合があります。)
- 3 電源ユニット 0 (PSU0)
- 4 電源ユニット 1 (PSU1)
- 5 PCIe スロット 1 (シングルプロセッサシステムでは機能しません。)
- 6 PCIe スロット 2 (シングルプロセッサシステムでは機能しません。)
- 7 PCIe スロット 3 (シングルプロセッサシステムでは機能しません。)
- 8 ネットワーク (NET) 100/1000/10000 ポート (NET3-NET0) (NET2 および NET3 はシングルプロセッサシステムでは機能しません。)
- 9 システムステータス LED: ロケータ/ボタン: 白色、保守要求: オレンジ色、電源/OK: 緑色
- 10 シリアル管理 (SER MGT)/RJ-45 シリアルポート
- 11 Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) サービスプロセッサ (SP) ネットワーク管理 10/100BASE-T ポート (NET MGT)
- 12 USB 2.0 ポート (2)
- 13 DB-15 ビデオコネクタ
- 14 PCIe スロット 4
- 15 PCIe スロット 5
- 16 PCIe スロット 6

関連情報

- [14 ページの「フロントパネルのステータスインジケータ、コネクタ、ドライブ」](#)
- [11 ページの「サーバーコンポーネント」](#)

サーバー管理ソフトウェアの概要

次の各セクションでは、サーバー管理ソフトウェアについて説明します。

- [18 ページの「Oracle System Assistant」](#)
- [19 ページの「Oracle ILOM の概要」](#)
- [19 ページの「UEFI BIOS の概要」](#)

Oracle System Assistant

Oracle System Assistant では、Sun Server X3-2L を設定および管理できます。Oracle System Assistant アプリケーションは、Oracle x86 サーバーの初期サーバーセットアップおよび保守作業を行うためのタスクベースのサーバープロビジョニングツールです。Oracle System Assistant を使用すると、サポートされている Oracle Solaris、Oracle VM、Linux、または

Windows オペレーティングシステムのインストール、サーバーの最新ソフトウェアリリースへの更新、サーバーハードウェアの構成を行うことができます。

Sun Server X3-2L には、Oracle System Assistant を含んだ内蔵 USB フラッシュドライブが含まれている場合があります。

Oracle ILOM の概要

Oracle ILOM を使用すると、Sun Server X3-2L を管理できます。Oracle ILOM を使用して、サーバーのサービスプロセッサ (SP) に接続します。サーバーは、Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) バージョン 3.1 をサポートしています。

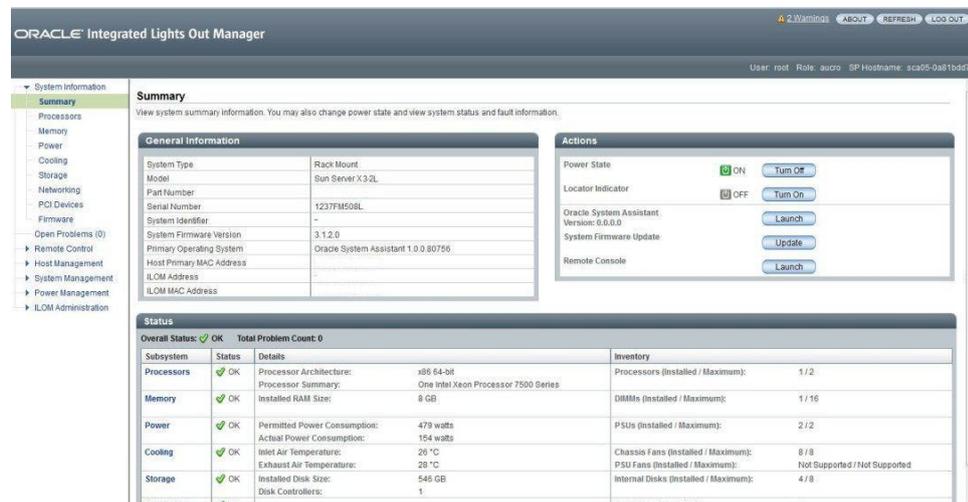
Oracle ILOM ソフトウェアはサーバーのサービスプロセッサ上に存在します。Oracle ILOM ソフトウェアを使用して、サーバーモジュールコンポーネントをモニターおよび管理します。Oracle ILOM には次のようなソフトウェア機能があります。

- ネットワーク情報の構成
- SP のハードウェア構成の表示と編集
- 重要なシステム情報のモニターと記録されたイベントの表示
- Oracle ILOM ユーザーアカウントの管理

次のいずれかの方法でサーバーの SP にアクセスできます。

- [66 ページの「Web インタフェースを使用した Oracle ILOM へのリモートログイン」](#)
- [65 ページの「ローカルのシリアル接続を使用した Oracle ILOM へのログイン」](#)

Oracle ILOM にログインしたときの Web インタフェースの例を次の図に示します。



UEFI BIOS の概要

Sun Server X3-2L には、Unified Extensible Firmware Interface (UEFI) 準拠の BIOS が組み込まれており、旧バージョンの BIOS に比べて豊富なブートオプションとアダプタカードの構成機能を備えています。

また、UEFI ドライバが用意されていないソフトウェアやアダプタ用にレガシーバージョンの BIOS もサポートしています。デフォルトの設定では、レガシーバージョンが使用されます。

次の各セクションでは、UEFI BIOS モードの詳細について説明します。

- [20 ページの「ブートモードの選択」](#)
- [20 ページの「レガシー BIOS ブートモード」](#)
- [20 ページの「UEFI BIOS ブートモード」](#)

UEFI BIOS の詳細については、『[管理](#)』、「[Legacy BIOS または UEFI BIOS の使用](#)」を参照してください。

ブートモードの選択

レガシー BIOS と UEFI BIOS の 2 つのブートモードを BIOS に使用できます。UEFI BIOS で、UEFI とレガシー BIOS のどちらのブートモードをサポートするかを構成できます。ただし、デバイスおよびオペレーティングシステムによっては、UEFI BIOS をまだサポートしておらず、レガシー BIOS ブートモードからしかブートできないものもあります。

ブートモードを変更すると、以前のモードのブート候補は表示されなくなります。新しいモードのブート候補は、BIOS コマンド「Save Changes and Reset」を発行したあとに表示されます。スイッチバックする場合、Oracle ILOM BIOS のバックアップおよびリストア機能を使用して、構成を保存します。Oracle ILOM の詳細は、Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.1 ドキュメントライブラリ (<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=ilom31>) を参照してください。

レガシー BIOS ブートモード

ホストバスアダプタ (HBA) によるオプション ROM の使用を許可するには、レガシー BIOS ブートモードを選択します。ソフトウェアまたはアダプタに UEFI ドライバが付属していない場合、またはシステムがオプション ROM を使用している場合は、レガシー BIOS ブートモードを選択します。レガシー BIOS ブートモードはデフォルトのブートモードです。レガシー BIOS ブートモードでは、レガシー BIOS ブートモードをサポートするブート候補のみが、BIOS 設定ユーティリティー画面の「Boot Options Priority」リストに表示されます。

UEFI BIOS ブートモード

ソフトウェアおよびアダプタに UEFI ドライバが付属している場合、UEFI ドライバを使用する UEFI BIOS ブートモードを選択します。UEFI BIOS ブートモードは設定中に手動で選択します。選択方法については、『[管理](#)』、「[Legacy BIOS または UEFI BIOS の使用](#)」を参照してください。

UEFI BIOS ブートモードでは、UEFI BIOS ブートモードをサポートするブート候補のみが BIOS 設定ユーティリティーの画面の「Boot Options Priority」リストに一覧表示されます。

現在、次のオペレーティングシステムが UEFI BIOS ブートモードをサポートしています。このリストの最新情報については、Sun Server X3-2L プロダクトノート (<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=SunServerX3-2L>) を参照してください。

- Oracle Solaris 11.1
- Oracle Linux 6.x
- Red Hat Enterprise Linux 6.x

- SUSE Linux Enterprise Server 11 SP2
- Microsoft Windows Server 2008
- VMware ESXi 5.x

これらのオペレーティングシステムは、UEFI BIOS ブートモードもレガシー BIOS ブートモードも使用できます。その他のオペレーティングシステムはすべて、レガシー BIOS ブートモードを使用する必要があります。ただし、ブートモードを選択し、オペレーティングシステムをインストールしたあとは、サーバーをリブートして、別のブートモードを選択しても、インストールしたイメージはアクセスすることも使用することもできません。

3

サーバーの設置準備

このセクションでは、サーバーの設置準備に必要な情報を提供します。

説明	リンク
サーバーの梱包を解き、アクセサリキットの内容を確認します。	23 ページの「出荷梱包内容一覧」
オプションのコンポーネントがあれば、それらをサーバーに取り付けます。	24 ページの「オプションのコンポーネントの取り付け」
設置に必要な道具を組み立てます。	24 ページの「設置に必要な工具と装置」
ESD に関する要件を確認し、安全対策を施します。	25 ページの「ESD と安全対策」

関連情報

- ・ [9 ページの「設置手順の概要」](#)
- ・ 『[サイト計画](#)』の「[設置場所の準備](#)」
- ・ [11 ページの「サーバーの機能とコンポーネント」](#)

出荷梱包内容一覧

出荷用梱包箱に物理的な損傷がないか確認します。出荷用梱包箱に損傷がある場合は、開梱の際に運送業者の立ち会いをリクエストしてください。業者が検査できるように、箱の中身と梱包材はすべて保管しておいてください。

Sun Server X3-2L はアクセサリキットとともに出荷され、それには次が含まれています:

- ・ 電源コード (カントリーキットに別途パッケージ化)
- ・ ラックレールと設置指示書を含むラックマウントキット
- ・ その他のハードウェア、ケーブル、コネクタなど
- ・ *Sun Server X3-2L Getting Started Guide*
- ・ 使用条件と安全性に関するドキュメント

関連情報

- ・ [24 ページの「オプションのコンポーネントの取り付け」](#)

オプションのコンポーネントの取り付け

標準のシステムコンポーネントは工場に取り付けられています。標準構成とは別に購入したオプションのコンポーネントは、個別に出荷され、ほとんどの場合、サーバーをラックに設置する前に取り付ける必要があります。

次のオプションのコンポーネントを注文および別途購入できます。

- PCIe カード
- DDR3 DIMM メモリーキット
- ストレージドライブ
- ソフトウェアメディア

工場出荷時に取り付けられていないオプションを注文した場合は、『サービス』の「システムコンポーネントについて」を参照してください。

サポートされるコンポーネントとそのパーツ番号は、将来通知なしに変更される可能性があります。最新の一覧については、次を参照してください。

https://support.oracle.com/handbook_private/



注記

このサイトにアクセスするには、Oracle Web アカウントが必要です。

サーバーの名前とモデルをクリックします。表示されたサーバーの製品ページで、「Full Components List」をクリックしてコンポーネントの一覧を表示します。

オプションの現場交換可能ユニット (FRU) または顧客交換可能ユニット (CRU) を注文した場合は、上部のカバーにある保守ラベルまたは『サービス』、「システムコンポーネントについて」のコンポーネントの取り外しおよび交換手順に記載されている取り付け手順を参照してください。

関連情報

- 『サービス』の「システムコンポーネントについて」

設置に必要な工具と装置

システムを設置するには、次の工具を用意する必要があります:

- プラスのねじ回し (Phillips の 2 番)
- ESD マットおよびアースストラップ

さらに、次に示すようなシステムコンソールデバイスを用意する必要があります。

- ASCII 端末
- ワークステーション
- 端末サーバー
- 端末サーバーに接続されたパッチパネル

関連情報

- ・ [27 ページの「サーバーのラックへの設置」](#)

ESD と安全対策

電子機器は、静電気により損傷を受けやすくなっています。サーバーの設置または保守時には、接地された静電気防止リストストラップ、フットストラップ、または同様の安全器具を使用して、静電放電 (ESD) を防止します。



注意

電子コンポーネントを静電気による損傷から保護するために (システムが永続的に使用できなくなるか、保守技術者による修復が必要になる可能性があります)、静電気防止用マット、静電気防止袋、使い捨て静電気防止用マットなどの静電気防止面にコンポーネントを置いてください。システムコンポーネントを取り扱うときは、シャーシの金属面に接続された静電防止用アースストラップを着用してください。

サーバーを設置する前に、*Sun Server X3-2L* の安全性およびコンプライアンスに関するガイドおよび Oracle ハードウェアシステムの重要な安全性に関する情報に記載された安全性に関する情報をお読みください。



注意

取り付け作業を開始する前に、装置ラックに転倒防止バーまたは転倒防止脚を設置してください。



注意

サーバーの重量は約 31.75 kg (70 ポンド) です。このドキュメントの手順に従って、2 ラックユニット (2U) のサーバーを持ち上げてラック格納装置に取り付けるには、2 人の作業員が必要です。



注意

2 人で行う手順を実行する際には、各手順の開始前後および作業中に常に意思の疎通を図り、混乱が起こらないようにしてください。

関連情報

- ・ [28 ページの「サーバーのラックマウント作業時の安全対策」](#)

4

・・・第 4 章

サーバーのラックへの設置

このセクションでは、ラックマウントキットに含まれているレール構成部品を使用してサーバーをラックに設置する方法を説明します。レール構成部品を購入したら、これらの手順を実行します。

説明	リンク
設置の前提条件タスクをすべて完了します。	27 ページの「設置の前提条件」
ラックがサーバーの設置要件を満たしていることを確認します。	28 ページの「ラックの要件」
安全上の注意事項を確認します。	28 ページの「サーバーのラックマウント作業時の安全対策」
ラックマウントキットのコンポーネントがすべて届いていることを確認します。	30 ページの「ラックマウントキットの内容」
ラックを安定させます。	30 ページの「取り付け用にラックを固定」
サーバーに固定部品を取り付けます。	31 ページの「固定部品の取り付け」
ラックマウントの位置にマークを付けます。	32 ページの「ラックの取り付け位置の決定」
工具不要のスライドレール構成部品をラックに取り付けます。	33 ページの「工具不要スライドレール構成部品の取り付け」
サーバーをスライドレール構成部品に取り付けます。	35 ページの「スライドレール構成部品へのサーバーの取り付け」
(オプション) サーバーケーブルを引き回すためのケーブル管理アームを装着します。	<ul style="list-style-type: none">37 ページの「第 2 世代のケーブル管理アームの取り付け」46 ページの「第 2 世代のケーブル管理アームの取り外し」50 ページの「第 1 世代のケーブル管理アームの取り付け」
スライドレールとケーブル管理アームが正しく機能することを確認します。	53 ページの「スライドレールと CMA の動作の確認」

関連情報

- [9 ページの「設置手順について」](#)
- [23 ページの「サーバーの設置準備」](#)
- 『[サイト計画](#)』の「設置場所の準備」

設置の前提条件

ラックマウント手順を開始する前に次のタスクが完了していることを確認します。

- サーバー用に購入したオプションのコンポーネントを取り付けます。[24 ページの「オプションのコンポーネントの取り付け」](#)を参照してください。

- ・ 設置サイトが、電気および環境に関する必須の要件を満たしていることを確認します。『[サイト計画](#)』の「[設置場所の準備](#)」を参照してください。

ラックの要件

Sun Server X3-2L を設置するラックは、次の表に示す要件を満たしている必要があります。

表4.1 ラックの要件

項目	要件
構造	前後左右で固定する形式の 4 ポストラック。サポートされるラックタイプ: 四角穴 (9.5 mm) および丸穴 (M6 または 1/4-20 ネジのみ)。 2 ポストのラックとは互換性がありません。
ラック水平方向の開口部とユニットの縦方向のピッチ	ANSI/EIA 310-D-1992 または IEC 60927 規格に準拠していること。
前側取り付け面と後ろ側取り付け面の距離	610 から 915 mm (24 から 36 インチ)。
前側取り付け面の前面のスペース	キャビネット前面ドアまでの距離が 25.4 mm (1 インチ) 以上あること。
前側取り付け面の背後のスペースの奥行	ケーブル管理アームを使用する場合は、キャビネット背面ドアまで 900 mm (35.43 インチ) 以上、ケーブル管理アームを使用しない場合は 800 mm (31.49 インチ) 以上の間隔があること。
前側取り付け面と後ろ側取り付け面のスペースの幅	構造的支柱とケーブルの溝の距離が 456 mm (18 インチ) 以上であること。
保守用最小スペース	スペース、サーバー前面: 123.2 cm (48.5 インチ) スペース、サーバー背面: 91 cm (36 インチ)
サーバーの寸法	奥行き: (PSU ハンドルを含まない長さ): 737.0 mm (29 .0 インチ)。 幅: (耳を含まない長さ): 445.0 mm (17.52 インチ)。 高さ: 87.6 mm (3.45 インチ)

関連情報

- ・ [23 ページの「サーバーの設置準備」](#)
- ・ 『[サイト計画](#)』の「[設置場所の準備](#)」

サーバーのラックマウント作業時の安全対策

このセクションでは、サーバーをラックに設置する際に従う必要のある安全上の注意事項について説明します。



注意

取り付け作業を開始する前に、装置ラックに転倒防止バーまたは転倒防止脚を設置してください。



注意

上方が重くなり転倒することがないように、装置は必ずラックの最下段から上へ順次搭載してください。装置の取り付け時にラックが転倒しないように、ラックの転倒防止バーを伸ばします。



注意

動作時周辺温度の上昇: 密閉されたラック構成部品またはマルチユニットのラック構成部品にサーバーを設置している場合、ラック環境の動作時周辺温度が室内温度より高くなる場合があります。したがって、サーバーに対して指定されている最大周辺温度 (Tma) に適した環境に装置を設置することを検討するようにしてください。サーバー環境要件については、『*サイト計画*』の「環境仕様」を参照してください。



注意

通気の減少: 装置をラック内に設置する際に、装置の安全な動作に必要な通気が妨げられないようにしてください。



注意

装置の配置: 装置をラック内に取り付ける際に、不均等な機械荷重によって危険な状態が発生しないようにしてください。



注意

回路の過負荷: 電源回路への装置の接続、および回路の過負荷を想定した過電流保護や電源配線についても考慮するようにしてください。この問題に対処するときは、装置のネームプレートに表示された定格電力を十分に配慮する必要があります。



注意

確実なアース: ラックマウント型装置にアースを確実に取り付けてください。直接接続以外の分岐回路への電源接続 (テーブルタップの使用など) の場合は、特に注意を払うようにしてください。



注意

スライドレールに搭載した機器を柵または作業スペースとして使用しないでください。

関連情報

- ・ [25 ページの「ESD と安全対策」](#)

ラックマウントキットの内容

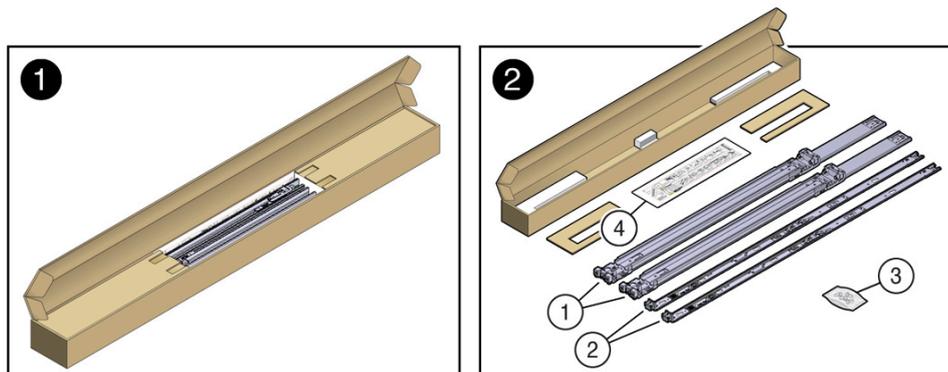
ラックマウントキットは、2 つのスライドレール、2 つの固定部品、オプションの取り付け用ネジで構成されます。



注記

オプションのスライドレールとケーブル管理アームを使用して、サーバーを 4 ポストラックに取り付ける簡単な手順については、ラックマウントキットの取り付け手順カードを参照してください。

図4.1 工具不要ラックマウントキットの内容



図の説明

- 1 スライドレール
- 2 固定部品
- 3 4 つの M4 x 5 細目固定部品取り付けネジ (使用しません)
- 4 取り付け手順カード

関連情報

- ・ [28 ページの「ラックの要件」](#)

▼ 取り付け用にラックを固定



注意

作業員が負傷する危険性を低減するために、ラックキャビネットを固定し、すべての転倒防止装置を伸ばしてから、サーバーを取り付けます。

次のステップの詳細手順については、ラックのドキュメントを参照してください。

1. ラックキャビネットの前面ドアと背面ドアを開いて取り外します。



注記

前面ドアと背面ドアは取り付け用ベイに当たる場合のみ取り外す必要があります。

2. 設置作業中にキャビネットが転倒しないように、ラックキャビネット前面の下部にある、ラックキャビネットの転倒防止脚または転倒防止バーをいっぱいに伸ばします。
3. 横転を防ぐための平行調整脚がラックの下部にある場合は、それらの調整脚を床まで完全に伸ばします。

関連情報

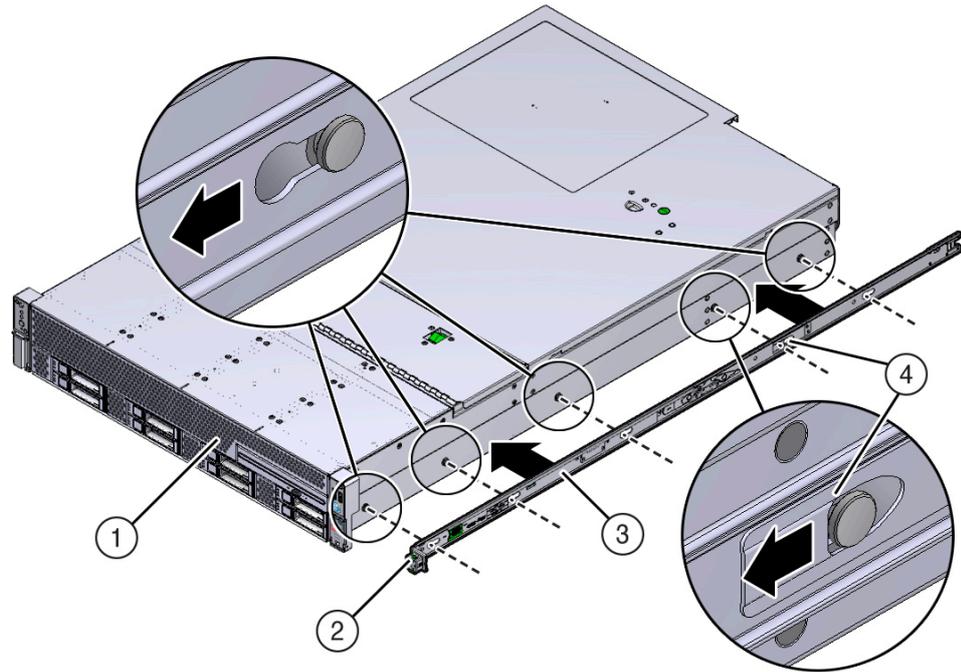
- [28 ページの「サーバーのラックマウント作業時の安全対策」](#)
- ラックキャビネットに関するドキュメント
- 『*Sun Server X3-2L Safety and Compliance Guide*』
- 『*サイト計画*』の「設置場所の準備」

▼ 固定部品の取り付け

固定部品をサーバーの側面に取り付けるには:

1. スライドレールロックがサーバーの前面に来て、固定部品の 5 つの鍵穴の開口部がシャーシの側面にある 5 つの位置決め用ピンとちょうど合うように、シャーシに対して固定部品を位置合わせします。

図4.2 固定部品とサーバーシャーシの位置合わせ



図の説明

- 1 シャーシ前面
- 2 スライドレールロック
- 3 固定部品
- 4 固定部品クリップ

2. 5つのシャーシ位置決め用ピンの頭を固定部品の5つの鍵穴の開口部に挿入し、固定部品を、クリップがカチッと音がして固定されるまで、シャーシの前面に向けて引っ張ります。
3. 背面の位置決め用ピンが固定部品のクリップにかみ合っていることを確認します。
4. [31 ページのステップ 1](#) から [32 ページのステップ 3](#) を繰り返して、サーバーの反対側の側面に残りの固定部品を取り付けます。

関連情報

- [32 ページの「ラックの取り付け位置の決定」](#)
- [33 ページの「工具不要スライドレール構成部品の取り付け」](#)

▼ ラックの取り付け位置の決定

ラックマウント取り付けカードを使用して、スライドレールの正しい取り付け穴を特定します。



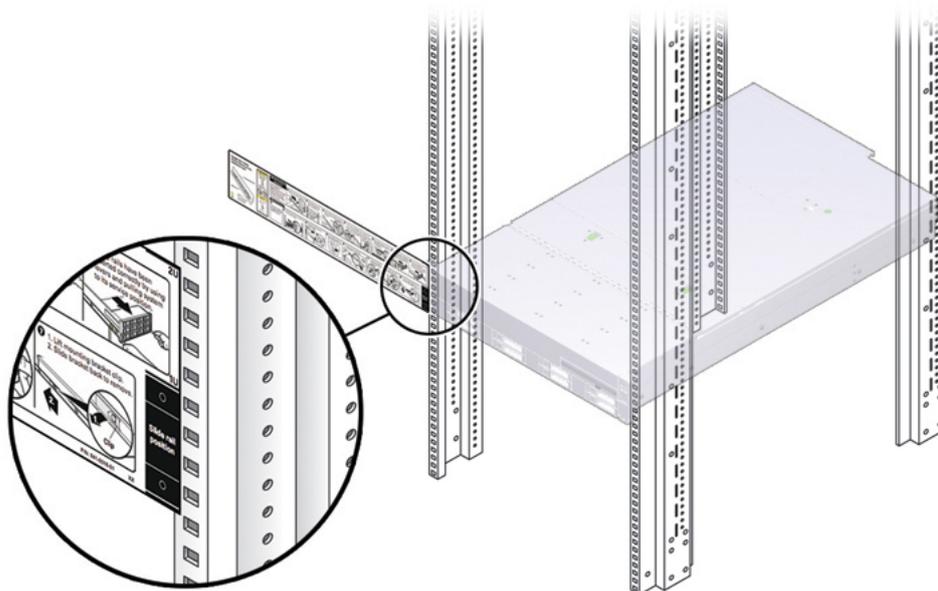
注記

ラックには下から上に搭載してください。

1. ラックキャビネットに、サーバーを取り付けるために十分な高さがあることを確認します。
[28 ページの「ラックの要件」](#)を参照してください。

2. ラックマウント取り付けカードを前面レールに差し込みます。
カード下端がサーバーの底に当たります。取り付けカードの下端から上向きに測ってください。

図4.3 ラックマウント取り付けカードテンプレート



3. 前面のスライドレールの取り付け穴にマークを付けます。
4. 背面のスライドレールの取り付け穴にマークを付けます。

関連情報

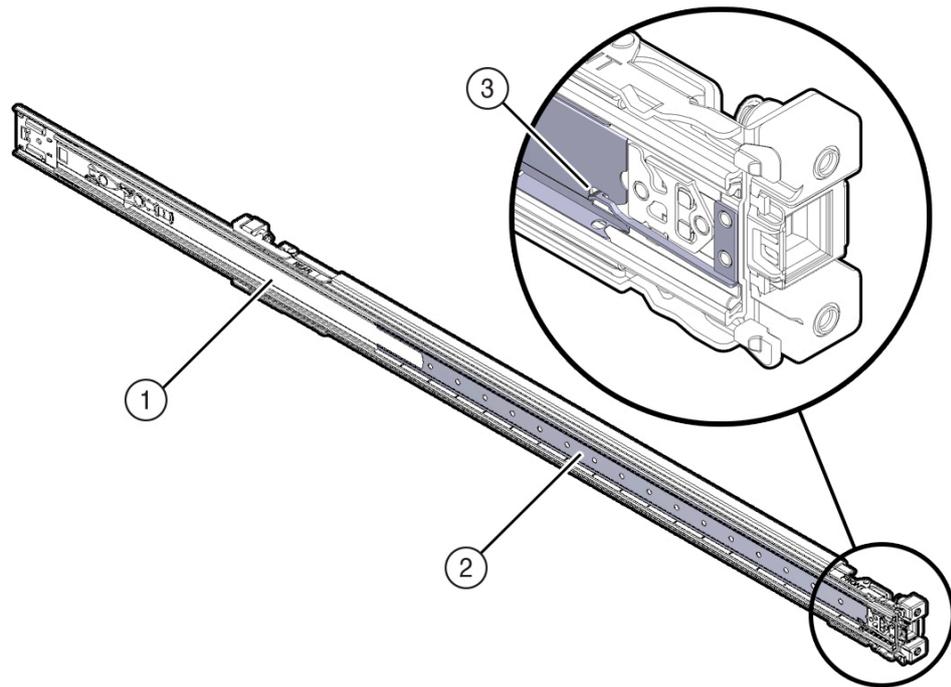
- [28 ページの「ラックの要件」](#)
- [31 ページの「固定部品の取り付け」](#)
- [33 ページの「工具不要スライドレール構成部品の取り付け」](#)

▼ 工具不要スライドレール構成部品の取り付け

工具不要スライドレール構成部品をラックに取り付けるには、次の手順を使用します。

1. 玉軸受けトラックが前方になり所定の位置にロックされるように、スライドレール構成部品の向きを合わせます。

図4.4 スライドレールと玉軸受けトラックの向き合わせ

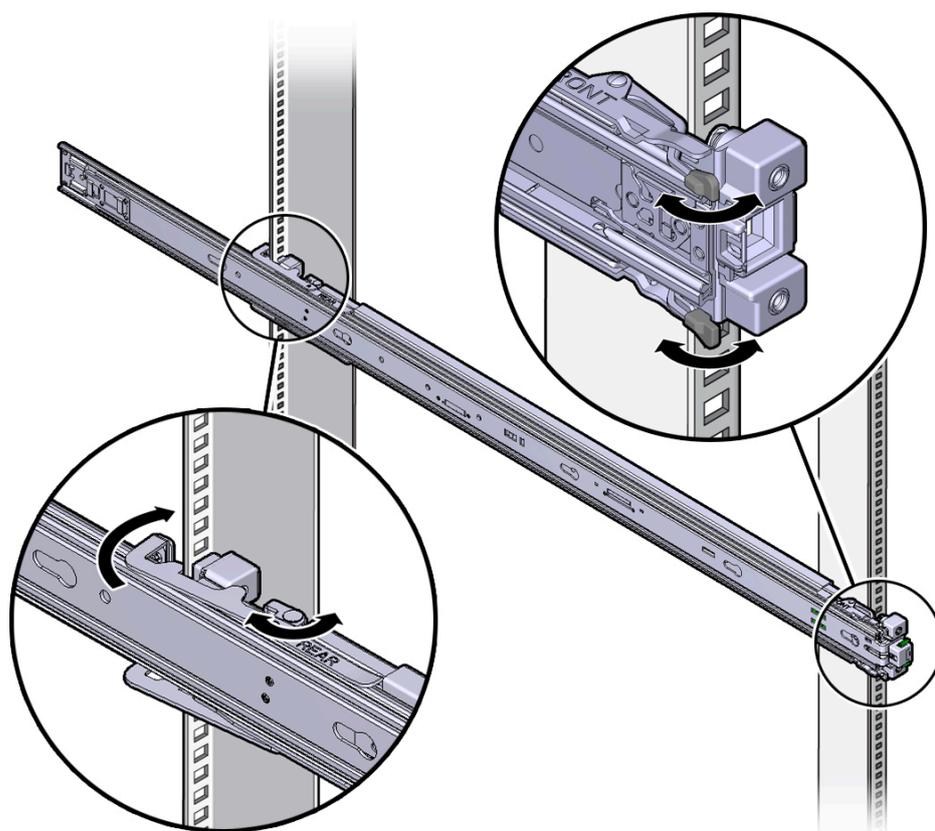


図の説明

- 1 スライドレール
- 2 玉軸受けトラック
- 3 ロックメカニズム

2. スライドレール構成部品の背面を背面ラックレールの内側に合わせ、カチッと音がして構成部品が固定されるまで押し込みます (トラックの左右のどちらの側から行ってもかまいません)。

図4.5 スライドレール構成部品とラックの位置合わせ



3. スライドレール構成部品の前面を前面ラックレールの外側に合わせ、カチッと音がして構成部品が固定されるまで押し込みます。
4. [33 ページのステップ 1](#) から [35 ページのステップ 3](#) を繰り返して、スライドレール構成部品をラックの反対側にも取り付けます。

関連情報

- [31 ページの「固定部品の取り付け」](#)
- [32 ページの「ラックの取り付け位置の決定」](#)
- [35 ページの「スライドレール構成部品へのサーバーの取り付け」](#)

▼ スライドレール構成部品へのサーバーの取り付け

この手順を使用して、固定部品を取り付けたサーバーシャーシを、ラックに取り付けられているスライドレールアセンブリに装着します。



注意

サーバーは重いので、この手順では少なくとも 2 名の作業者がが必要です。この手順を 1 人で実行すると、機器が損傷したり、けがをする可能性があります。

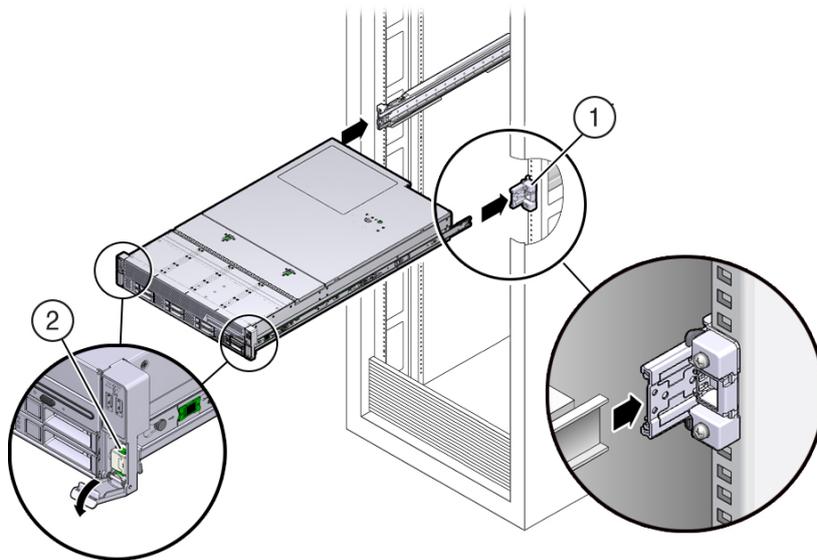


注意

上方が重くなり転倒することがないように、装置は必ずラックの最下段から上へ順次搭載してください。装置の取り付け時にラックが転倒しないように、ラックの転倒防止バーを伸ばします。

1. スライドレールをラックのスライドレール構成部品に可能なかぎり奥まで押し込みます。
2. 固定部品の後端が、ラックに取り付けられているスライドレール構成部品と合うようにサーバーを持ち上げます。
3. 固定部品をスライドレールに挿入し、固定部品がスライドレールの止め具に接触するまでサーバーをラック内に押し込みます (約 30 cm (12 インチ))。

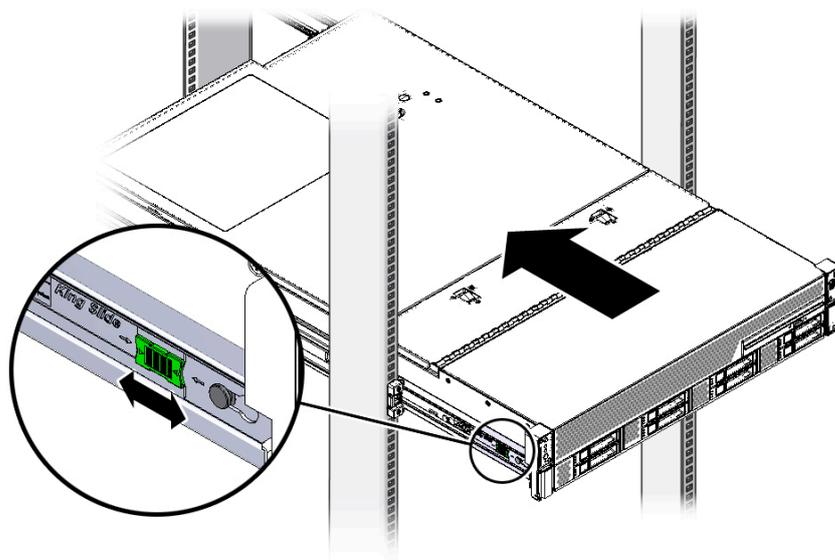
図4.6 固定部品を取り付けたサーバーのスライドレールへの挿入



図の説明

- 1 固定部品をスライドレールに挿入
 - 2 スライドレールリリースレバー
4. 各固定部品のスライドレールリリースレバーを同時に引き下げた状態で、サーバーをラック内に押し込みます。固定部品の前面にあるスライドレールのロックがスライドレール構成部品とかみ合うまで、サーバーをラックに押し込みます。
かみ合うと、カチッと音がします。

図4.7 ラックへのサーバーのスライド



注意

サーバーがラックに確実に固定されており、スライドレールのロックが固定部品とかみ合っていることを確認してから、オプションのケーブル管理アームを取り付けてください。

関連情報

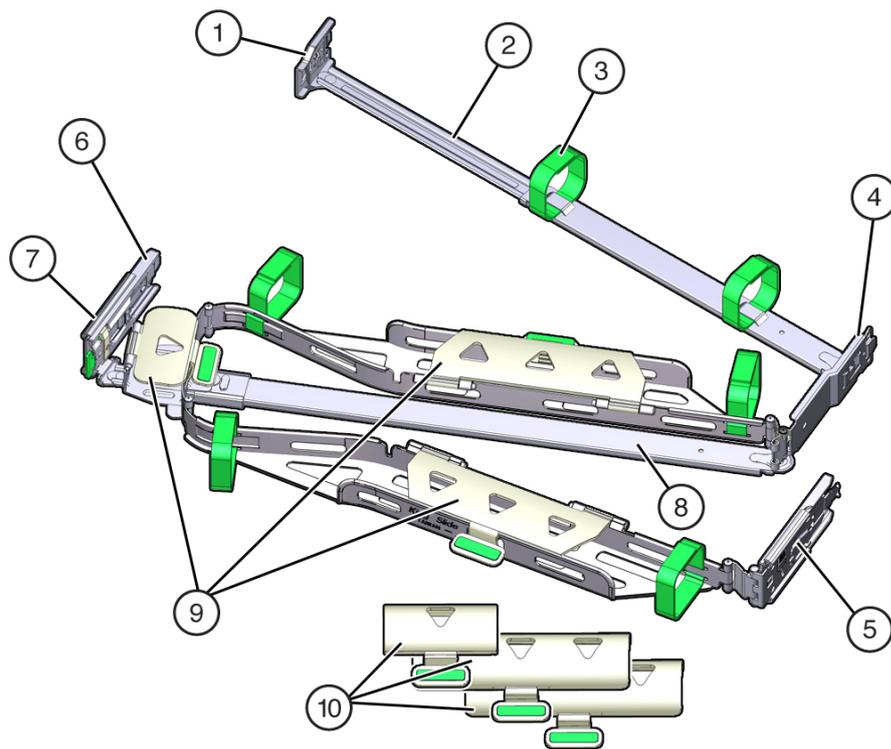
- [37 ページの「第 2 世代のケーブル管理アームの取り付け」](#)
- [50 ページの「第 1 世代のケーブル管理アームの取り付け」](#)
- [53 ページの「スライドレールと CMA の動作の確認」](#)

▼ 第 2 世代のケーブル管理アームの取り付け

この手順に従って、サーバーの背面に接続するケーブルの管理に使用する第 2 世代のケーブル管理アーム (CMA) を取り付けます。

1. CMA の梱包を解きます。
次の図は第 2 世代の CMA コンポーネントを示しています。

図4.8 第 2 世代の CMA コンポーネント



図の説明

- 1 コネクタ A
- 2 前部のスライドバー
- 3 ベルクロストラップ (6)
- 4 コネクタ B
- 5 コネクタ C
- 6 コネクタ D
- 7 スライドレールのラッチ部品 (コネクタ D で使用します)
- 8 後部のスライドバー
- 9 Sun Server X3-2 ケーブルカバー
- 10 Sun Server X3-2L ケーブルカバー

2. CMA にサーバーの正しいケーブルカバーが取り付けられていることを確認します。

- Sun Server X3-2 (1U システム) はフラットケーブルカバーを使用します。
- Sun Server X3-2L (2U システム) はラウンドケーブルカバーを使用します。



注記

CMA は 3 つのフラットケーブルカバーが取り付けられた状態で出荷されます。CMA を Sun Server X3-2L に取り付ける場合は、フラットケーブルカバーを取り外してラウンドケーブルカバーを取り付ける必要があります。

3. CMA を Sun Server X3-2 に取り付ける場合は、フラットケーブルカバーを取り外してラウンドケーブルカバーを取り付けてください。それ以外の場合は次の手順に進みます。

フラットケーブルカバーを取り外してラウンドケーブルカバーを取り付けるには、次の手順を実行します。

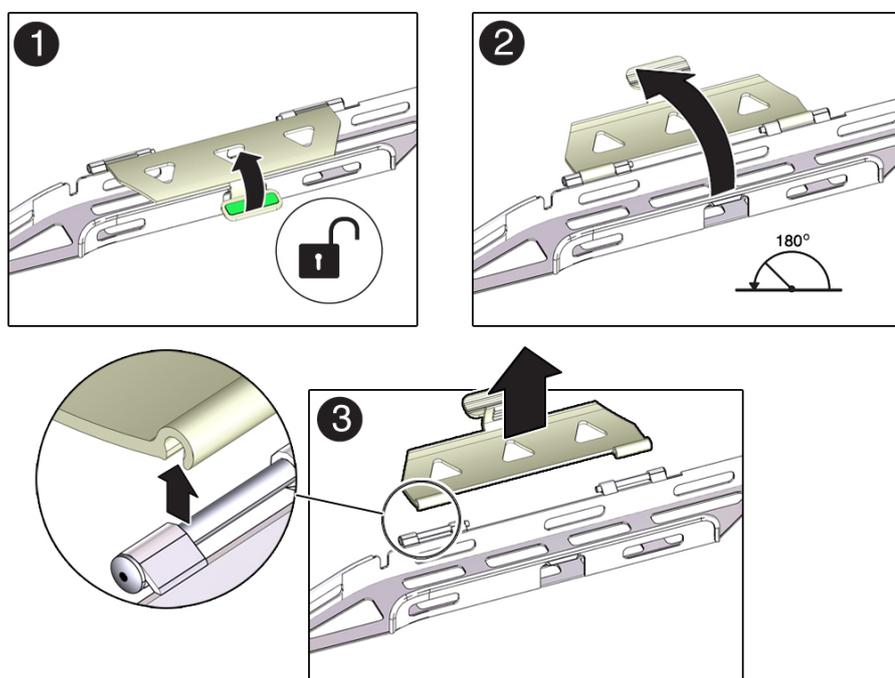
- a. 次の図 [図枠 1 および 2] に示すように、ケーブルカバーのハンドル (ハンドルには緑の色が付いています) を持ち上げて、水平位置まで 180 度開きます。



注記

CMA には 3 つのケーブルカバーがあり、2 つのヒンジが付いたものが 2 つ (そのうち 1 つが次の図に示されています)、1 つのヒンジが付いたものが 1 つあります。38 ページの図 4.8 に 3 つのケーブルカバーがすべて示されています。

図4.9 CMA フラットケーブルカバーの取り外し



- b. それぞれのヒンジコネクタの外側を、ヒンジコネクタがヒンジから外れるまで押し上げます [図枠 3]。
 - c. 39 ページのステップ 3.a から 39 ページのステップ 3.b を繰り返して、3 つのケーブルカバーをすべて取り外します。
 - d. それぞれのラウンドケーブルカバーを一度に 1 つずつヒンジの上に水平に置き、ヒンジコネクタをヒンジに合わせます。
 - e. それぞれのヒンジコネクタを親指で押し下げて、ヒンジコネクタを所定の位置にパチンと閉めます。
 - f. ケーブルカバーを下にぶら下げて、ケーブルカバーのハンドルを押し下げて閉じた位置に固定します。
4. 6 つのベルクロストラップが、38 ページの図 4.8 に示されているように CMA に通されていることを確認します。



注記

前部のスライドバーにある 2 つのベルクロストラップが、38 ページの図 4.8 に示されているようにスライドバーの上部の開口部に通されていることを確認してください。これにより、サーバーをラックから引き出したりラックに戻したりするときに、ベルクロストラップがスライドバーの伸縮を妨げなくなります。

5. CMA を取り付けやすくするため、サーバーをラックの前面から約 13 cm (5 インチ) 伸ばします。
6. CMA を機器ラックの背面に移動し、サーバーの背後に十分な作業スペースがあることを確認します。



注記

この手順の「左」と「右」は、装置ラックの背面から見たときの左と右を示します。

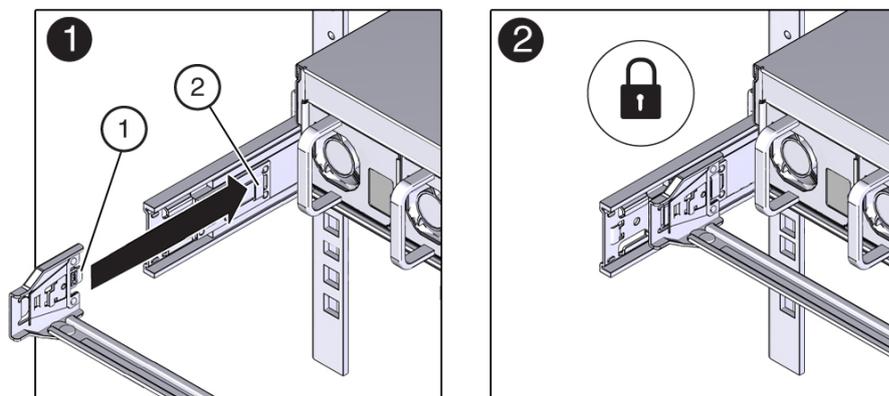


注記

この取り付け手順の全体を通して CMA を支えて、4 つのすべての接着点で固定されるまではそれ自体の重さで垂れ下がることがないようにしてください。

7. CMA のコネクタ A を、カチッと音がして固定されるまで、左側スライドレールの前面スロットに差し込みます [図 4.10 および 2]。
コネクタ A の爪 (吹き出し番号 1 を参照) がスライドレールの前面スロット (吹き出し番号 2) に入ります。
前部のスライドバーの左側を静かに力を入れて引っ張り、コネクタ A が適切に固定されていることを確認します。

図4.10 左側スライドレールへのコネクタ A の取り付け

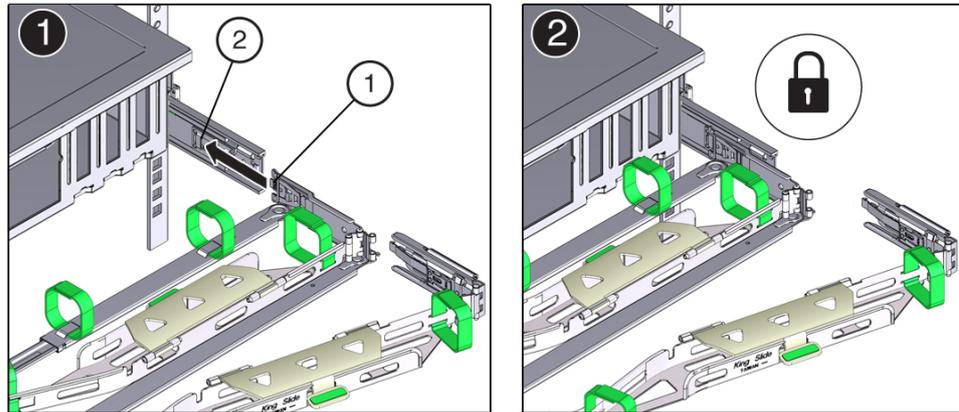


図の説明

- 1 コネクタ A の爪
- 2 左側スライドレールの前面スロット

8. CMA のコネクタ B を、カチッと音がして固定されるまで、右側スライドレールの前面スロットに差し込みます [図枠 1 および 2]。
コネクタ B の爪 (吹き出し番号 1) がスライドレールの前面スロット (吹き出し番号 2) に入ります。
前部のスライドバーの右側を静かに力を入れて引っ張り、コネクタ B が適切に固定されていることを確認します。

図4.11 右側スライドレールへのコネクタ B の取り付け

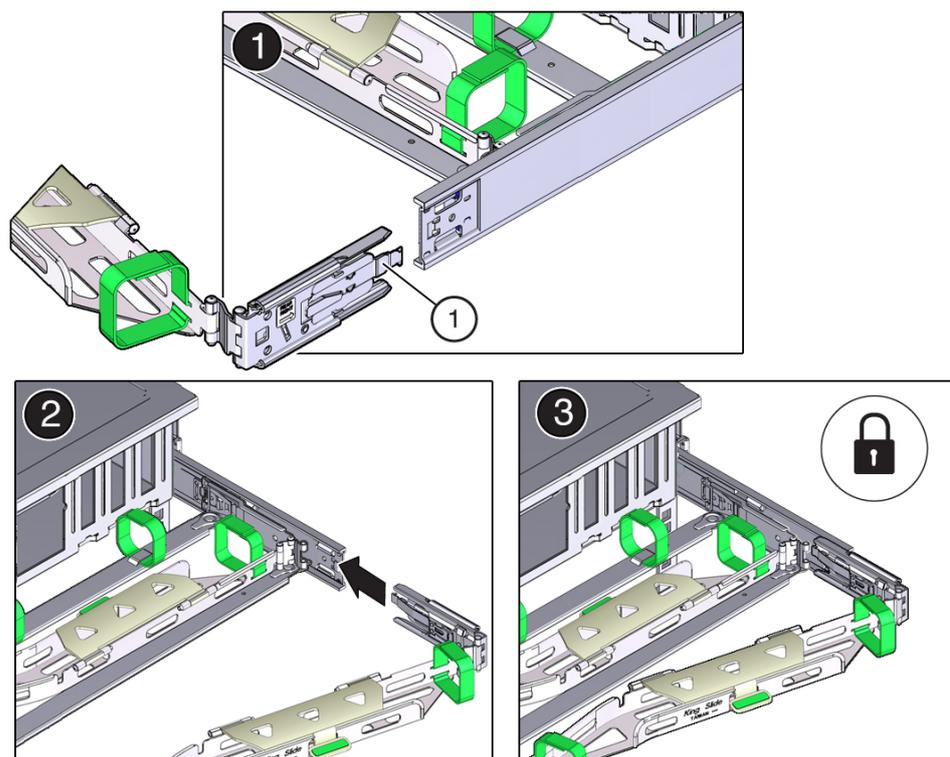


図の説明

- 1 コネクタ B の爪
- 2 右側スライドレールの前面スロット

9. CMA のコネクタ C を右側スライドレールに取り付けるには、次の手順を実行します。
 - a. 固定スプリング (吹き出し番号 1) が右側スライドレールの内側 (サーバー側) になるように、コネクタ C をスライドレールの位置に合わせます [図枠 1]。

図4.12 右側スライドレールへのコネクタ C の取り付け



図の説明

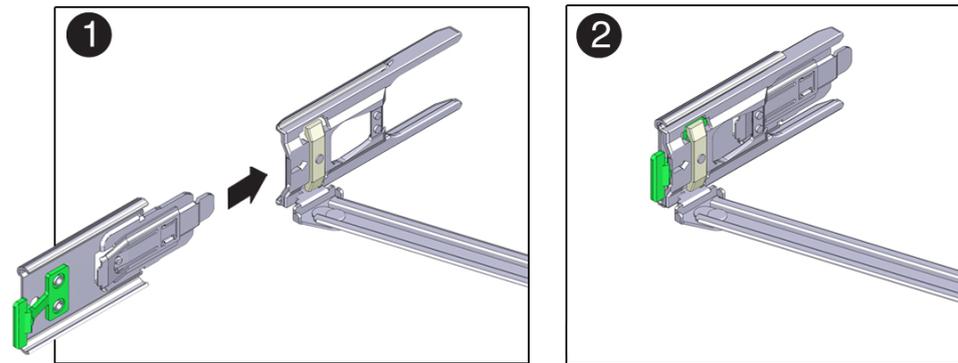
- 1** コネクタ C の固定スプリング
- b. CMA のコネクタ C を、カチッと音がして固定されるまで、右側スライドレールに差し込みます [図枠 2 および 3]。
 - c. CMA の後部のスライドバーの右側を静かに力を入れて引っ張り、コネクタ C が適切に固定されていることを確認します。
10. CMA のコネクタ D を取り付ける準備をするため、スライドレールのラッチ部品をコネクタ D に固定するテープを取り外して、ラッチ部品とコネクタ D の位置が合うことを確認します [図枠 1 および 2]。



注記

CMA はスライドレールのラッチ部品がコネクタ D にテープで貼られた状態で出荷されます。このコネクタを取り付ける前に、テープを取り外す必要があります。

図4.13 CMA スライドレールのラッチ部品とコネクタ D の位置合わせ



11. スライドレールのラッチ部品を適切な位置で支えながら、コネクタ D と対応するスライドレールのラッチ部品を、カチッと音がして固定されるまで、左側スライドレールに差し込みます [図枠 1 および 2]。

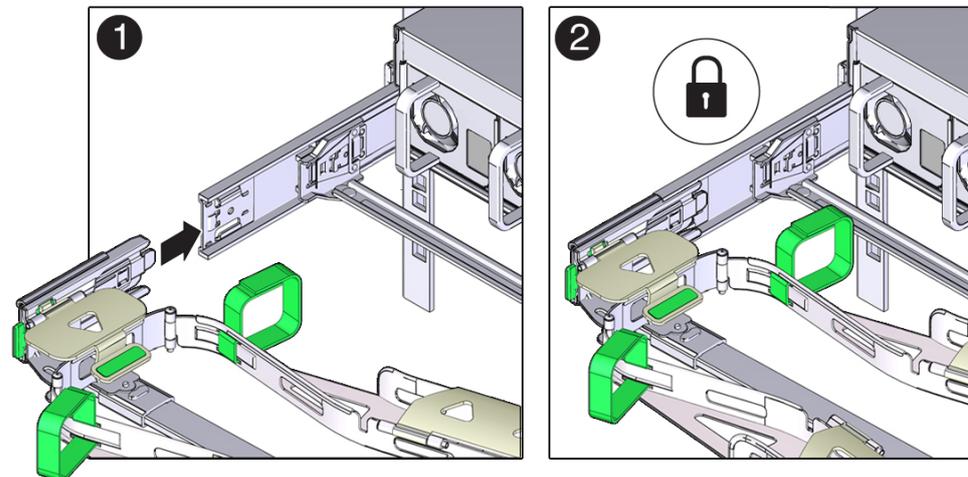


注記

コネクタ D をスライドレールに差し込む際の推奨される簡単な方法は、コネクタ D とラッチ部品を 1 つの構成部品としてスライドレールに取り付けることです。

CMA の後部のスライドバーの左側を静かに力を入れて引っ張り、コネクタ D が適切に固定されていることを確認します。

図4.14 左側スライドレールへのコネクタ D の取り付け



注記

スライドレールのラッチ部品には緑色のリリース爪が付いています。このタブを使用してラッチ部品を解除し取り外して、コネクタ D を取り外すことができます。

12. 4 つの CMA 接続ポイントを静かに力を入れて引っ張り、CMA コネクタがしっかりと固定されていることを確認してから、CMA がそれ自体の重さで垂れ下がるようにします。

13. CMA にケーブルを通す前にスライドレールと CMA が適切に動作することを確認するには、次の手順を実行します。

- a. サーバーを引き出すときにラックが前に傾かないように、すべての転倒防止装置を伸ばします。



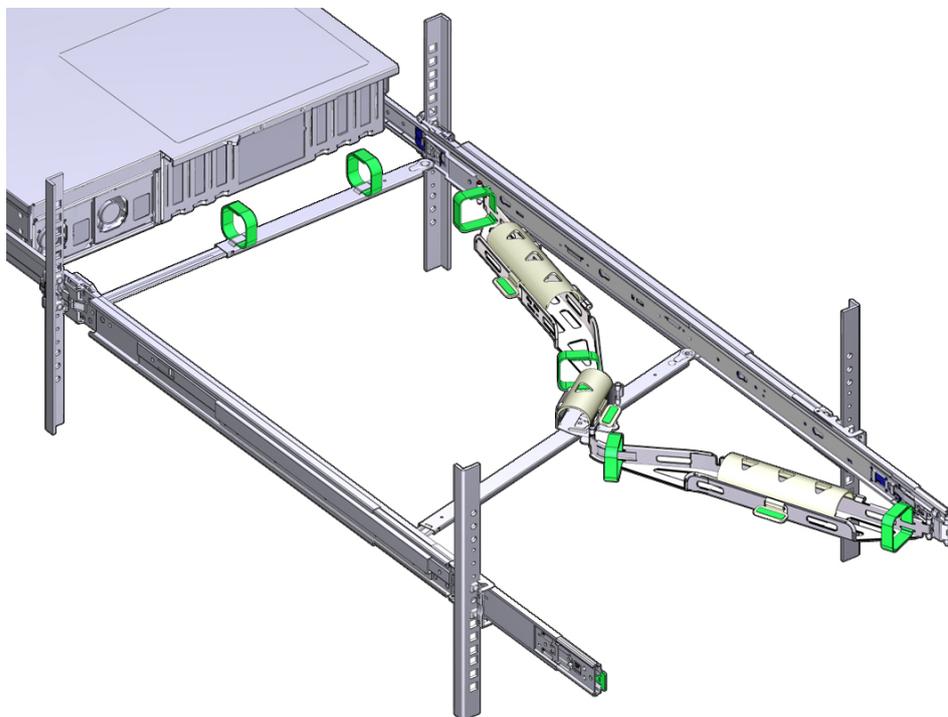
注意

作業員が負傷する危険性を低減するため、ラックからサーバーを引き出す前に、ラックキャビネットを固定し、すべての転倒防止装置を伸ばします。

ラックを固定する手順については、30 ページの「取り付け用にラックを固定」を参照してください。

- b. CMA がいっぱいまで伸びるまで、ラックの前面からサーバーを引き出します。

図4.15 いっぱいまで伸びた CMA



14. サーバーをラックに戻すには、次の手順を実行します。

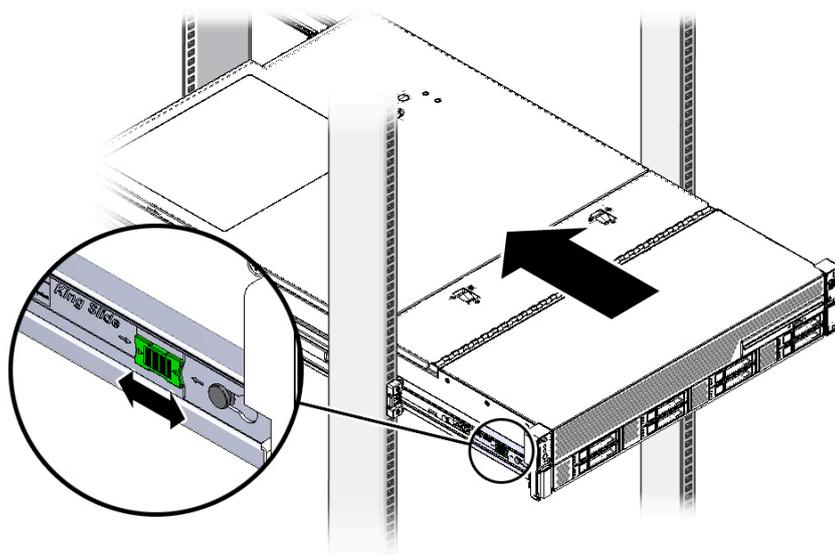
- a. 緑色の 2 つのリリース爪 (サーバーの両側に 1 つずつ) をサーバーの前面に向かって同時に引きながら、サーバーをラック内に押し込みます。サーバーをラック内に押し込むときに、CMA が固着することなく元に戻ることを確認してください。



注記

緑色のリリース爪を引っ張るには、それぞれの爪の端ではなく中央に指を置いて、サーバーの前面に向けて爪を引っ張るように圧力をかけます。

図4.16 スライドレールのリリース爪の位置



- b. サーバーの前面にあるスライドレールのロックがスライドレール構成部品とかみ合うまで、サーバーをラックに押し込みます。

サーバーが通常のラック位置に戻ると、カチッと音がします。

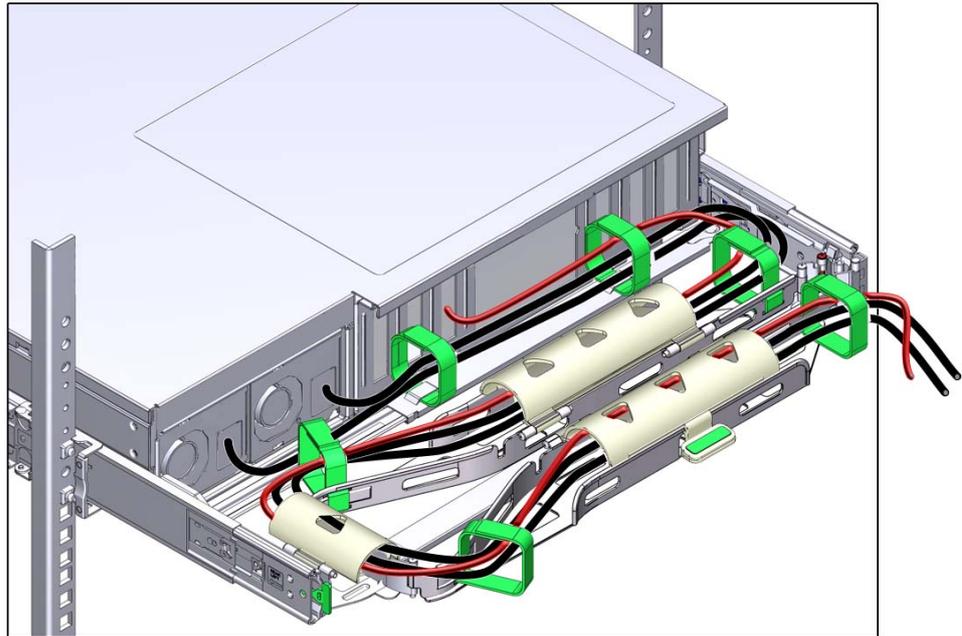
15. 必要に応じて、ケーブルをサーバーに接続します。
サーバーケーブルの接続方法については、[57 ページの「サーバーの配線」](#)を参照してください。
16. CMA ケーブルカバーを開いて、CMA のケーブル通し口にサーバーケーブルを通し、6 つのベルクロストラップでケーブルを固定します。
次の順番で、ケーブル通し口にケーブルを通します。
 - a. 最初に最前面のケーブル通し口に通します。
 - b. 次に小さいケーブル通し口に通します。
 - c. 次に最背面のケーブル通し口に通します。



注記

前部のスライドバーにあるベルクロストラップでケーブルを固定するときは、ベルクロストラップがスライドバーの底部に巻き付いていないことを確認してください。そうしないと、ラックからサーバーを引き出したりラックに戻したりするときにスライドバーの伸縮が妨げられる場合があります。

図4.17 ケーブルが取り付けられ、ケーブルカバーが閉じていて、ケーブルがベルクロストラップで固定されている CMA



17. 固定されたケーブルが、接続されているサーバーの上部の上や底面の下に伸びていないことを確認します。そうしないと、ラックからサーバーを引き出したりラックに戻したりしたときに、ケーブルがラックに取り付けられたほかの装置の邪魔になる場合があります。



注記

必要に応じて、ほかの装置に接近しないように、追加のベルクロストラップを使ってケーブルを束ねてください。追加のベルクロストラップを取り付ける必要がある場合は、CMA コンポーネントではなく、ケーブルだけをストラップで巻いてください。そうしないと、サーバーをラックから引き出したりラックに戻したりするときにスライドバーの伸縮が妨げられる場合があります。

18. [53 ページの「スライドレールと CMA の動作の確認」](#)に進んで、スライドレールと CMA の動作を確認します。

関連情報

- [53 ページの「スライドレールと CMA の動作の確認」](#)
- [46 ページの「第 2 世代のケーブル管理アームの取り外し」](#)

▼ 第 2 世代のケーブル管理アームの取り外し

この手順に従って、第 2 世代のケーブル管理アーム (CMA) を取り外します。

この手順を始める前に、[38 ページの図 4.8](#)を参照して、CMA コネクタ A、B、C、および D を確認します。CMA コネクタは取り付けるときと逆の順番で、つまり、最初にコネクタ D、次に C、次に B、最後に A を取り外してください。



注記

この手順の「左」と「右」は、装置ラックの背面から見たときの左と右を示します。



注記

この手順の全体を通して、CMA の 4 つのコネクタのいずれかを取り外したあとに、CMA がそれ自体の重さで垂れ下がらないようにしてください。

1. サーバーを引き出すときにラックが前に傾かないように、すべての転倒防止装置を伸ばします。



注意

作業員が負傷する危険性を低減するため、ラックからサーバーを引き出す前に、ラックキャビネットを固定し、すべての転倒防止装置を伸ばします。

ラックを固定する手順については、[30 ページの「取り付け用にラックを固定」](#)を参照してください。

2. CMA を取り外しやすくするため、サーバーをラックの前面から約 13 cm (5 インチ) 引き出します。
3. CMA からケーブルを取り外すには、次を実行します。
 - a. サーバーの背面からすべてのケーブルを外します。
 - b. 該当する場合は、ケーブルを束ねるために取り付けした追加のベルクロストラップを取り外します。
 - c. ケーブルを固定している 6 つのベルクロストラップを外します。
 - d. 3 つのケーブルカバーを完全に開いた位置まで開きます。
 - e. CMA からケーブルを取り外して横に置きます。
4. コネクタ D を取り外すには、次の手順を実行します。
 - a. スライドレールのラッチ部品の緑色のリリース爪 (吹き出し番号 1) を左側に押し、コネクタ D をスライドさせて左側スライドレールから外します [図 1 および 2]。



注記

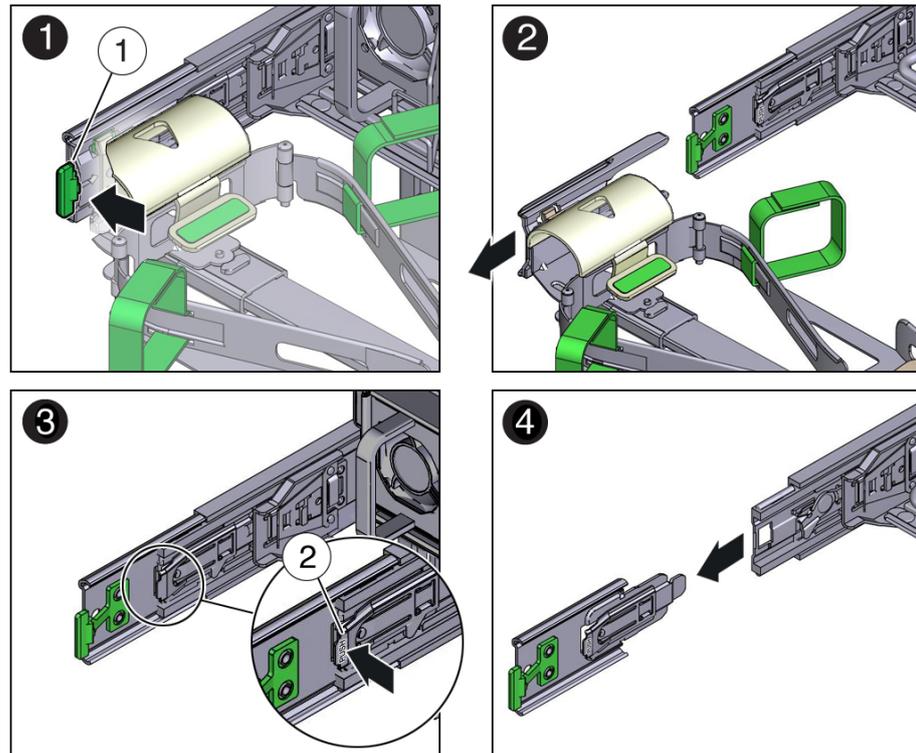
コネクタ D をスライドさせて左側スライドレールから外したとき、コネクタのスライドレールラッチ部品の位置はそのままです。次の手順で外します。



注記

コネクタ D を外したあと、決して CMA がそれ自体の重さで垂れ下がらないようにしてください。この手順の残りの部分では、残りのすべてのコネクタを外して CMA を平らな面に置くことができるようになるまで、CMA を支えておく必要があります。

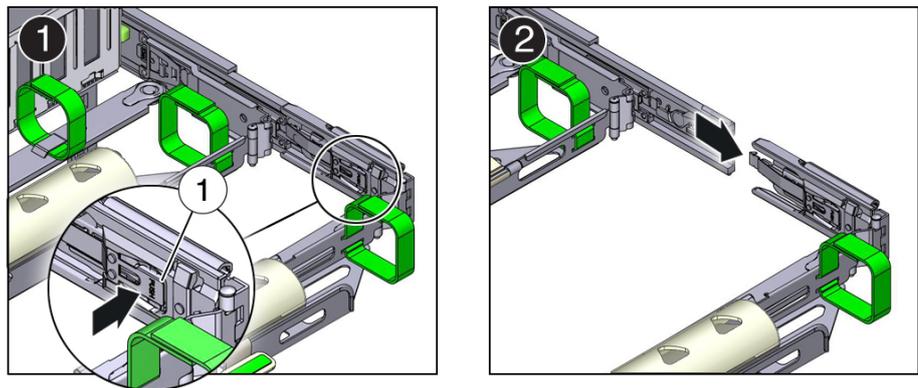
図4.18 コネクタ D の取り外し



図の説明

- 1 コネクタ D のリリース爪 (緑色)
 - 2 スライドレールのラッチ部品のリリース爪 (PUSH というラベル付き)
- b. 右手で CMA を支えて、左手の親指でコネクタ D のラッチ部品の PUSH というラベルの付いたリリース爪 (吹き出し番号 2) を左側に押し、左側スライドレールからラッチ部品を引き出して、横に置いておきます [図枠 3 および 4]。
5. コネクタ C を外すには、次の手順を実行します。
- a. 左腕を CMA の下に置いて CMA を支えます。
 - b. 右手の親指で PUSH (吹き出し番号 1) のラベルの付いたコネクタ C のリリース爪を (右に) 押し、コネクタ C を右側スライドレール [図枠 1 および 2] から引き出します。

図4.19 コネクタ C の取り外し

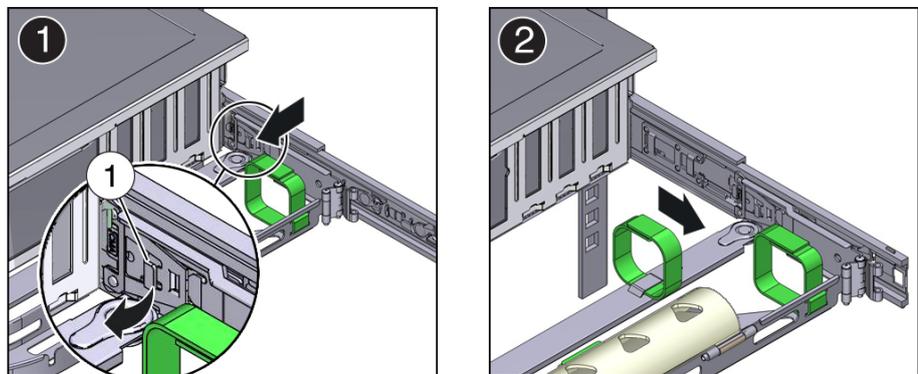


図の説明

1 コネクタ C のリリース爪 (PUSH というラベル付き)

6. コネクタ B を外すには、次の手順を実行します。
 - a. 右腕を CMA の下に置いて CMA を支え、右手でコネクタ B の後端をつかみます。
 - b. 左手の親指で、コネクタ B のリリースレバーを左側に引っ張って右側スライドレールから外し (吹き出し番号 1)、右手でコネクタをスライドレールから引き出します [図枠 1 および 2]。

図4.20 コネクタ B の取り外し

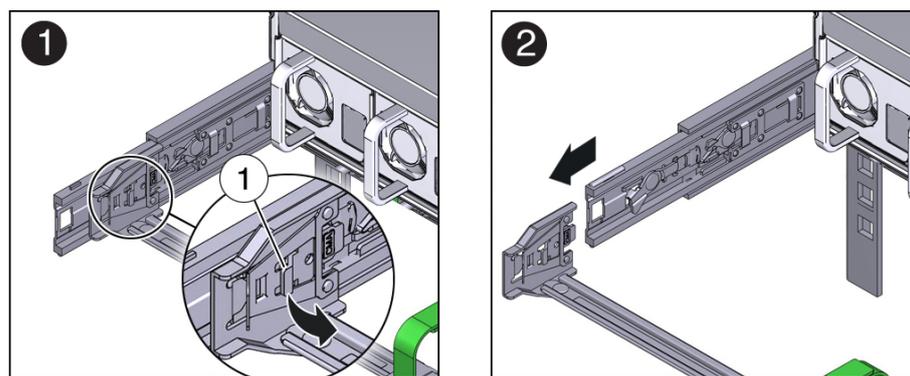


図の説明

1 コネクタ B のリリースレバー

7. コネクタ A を外すには、次の手順を実行します。
 - a. 左腕を CMA の下に置いて CMA を支え、左手でコネクタ A の後端をつかみます。
 - b. 右手の親指で、コネクタ A のリリースレバーを右側に引っ張って左側スライドレールから外し (吹き出し番号 1)、左手でコネクタをスライドレールから引き出します [図枠 1 および 2]。

図4.21 コネクタ A の取り外し



図の説明

1 コネクタ A のリリースレバー

8. CMA をラックから取り外して平らな面の上に置きます。
9. サーバーの前面に移動して、サーバーをラックに押し込みます。

関連情報

[37 ページの「第 2 世代のケーブル管理アームの取り付け」](#)

▼ 第 1 世代のケーブル管理アームの取り付け

この手順では、ラック内でのケーブルの引き回しに使用するオプションのケーブル管理アーム (CMA) を取り付けます。

1. CMA 部品の梱包を解きます。
2. CMA を機器ラックの背面に移動し、サーバーの背後に十分な作業スペースがあることを確認します。

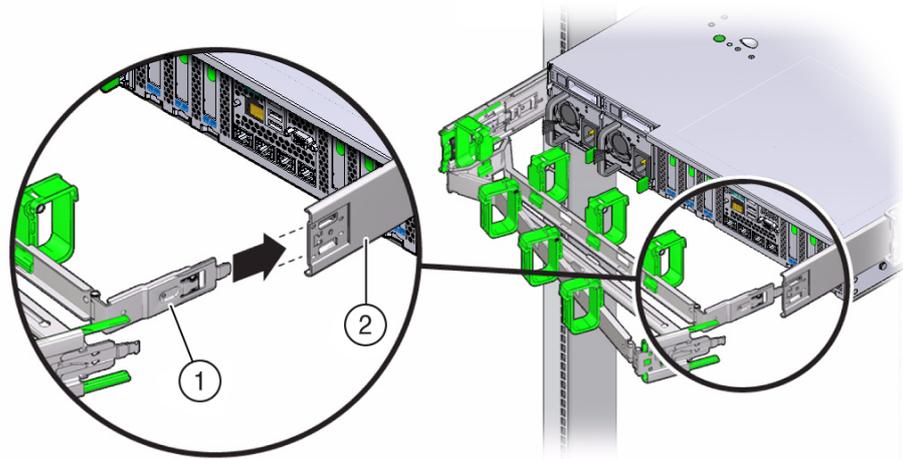


注記

この手順の「左」と「右」は、装置ラックの背面から見たときの左と右を示します。

3. テープを剥がして CMA の部品を分けます。
4. CMA の固定部品コネクタを、カチッと音がして固定されるまで、右側のスライドレールに差し込みます。

図4.22 右側スライドレール後部への CMA 固定部品の挿入

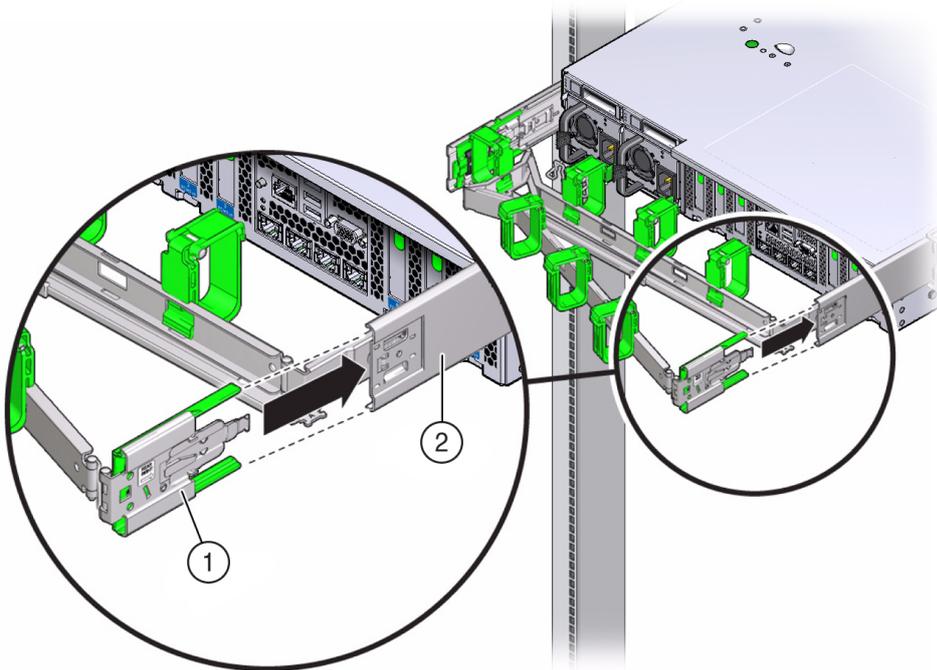


図の説明

- 1 CMA 固定部品
- 2 右側スライドレール

5. 右側の CMA スライドレールコネクタを、「カチッ」と音がして固定されるまで、右側スライドレール構成部品に差し込みます。

図4.23 右側スライドレール後部への CMA スライドレールコネクタの挿入

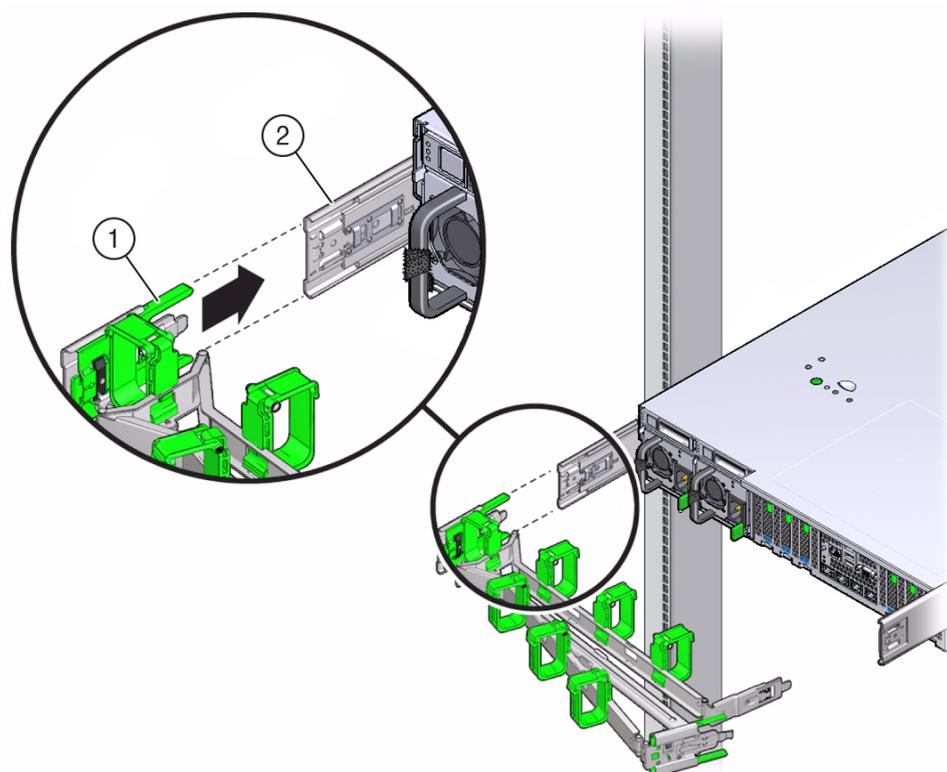


図の説明

- 1 CMA スライドレールコネクタ
- 2 右側スライドレール

6. 左側の CMA スライドレールコネクタを、「カチッ」と音がして固定されるまで、左側のスライドレール構成部品に差し込みます。

図4.24 左側スライドレール後部への CMA スライドレールコネクタの挿入



図の説明

- 1 CMA スライドレールコネクタ
- 2 左側スライドレール

7. 必要に応じて、サーバーまでケーブルを引き回して取り付けます。
サーバーケーブルの取り付け方法については、57 ページの「サーバーの配線」を参照してください。
8. 必要に応じて、ケーブルフックとループストラップを CMA に取り付け、所定の位置に押し込んでケーブルを固定します。

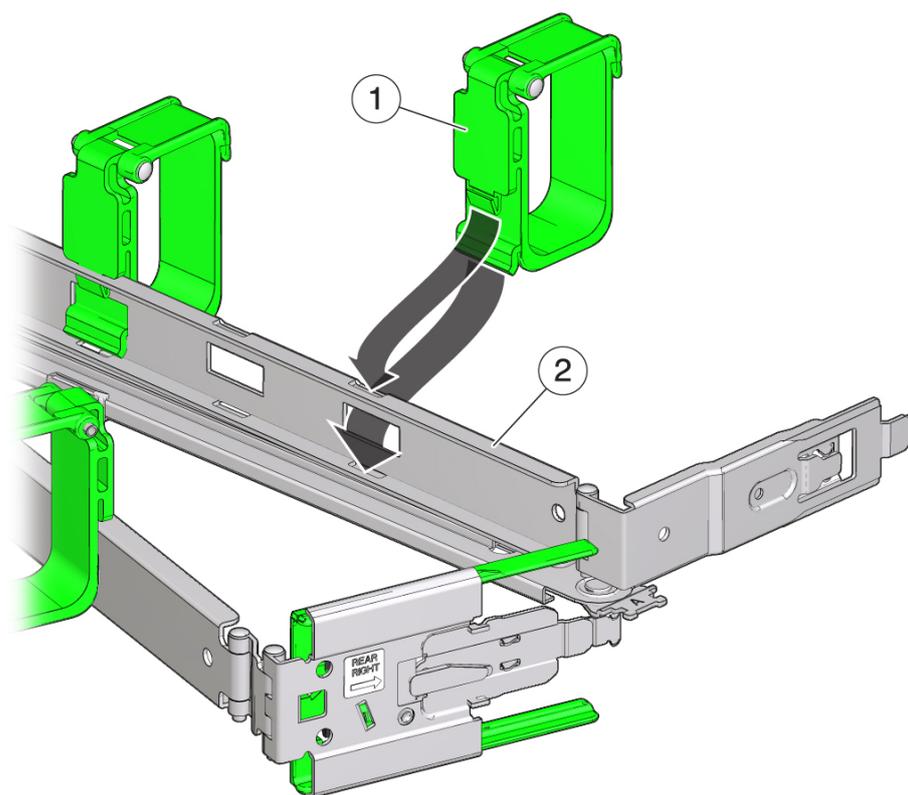


注記

ケーブルフックとループストラップは、CMA にあらかじめ取り付けられています。ケーブルフックとループストラップを CMA に取り付け直す必要がある場合は、この手順を実行してください。

最善の結果を得るには、3 つのケーブルストラップを CMA の背面側に等間隔に配置し、3 つのケーブルストラップをサーバーにもっとも近い CMA の側面に配置します。

図4.25 CMA ケーブルストラップの取り付け



図の説明

- 1 CMA ケーブルストラップ
- 2 CMA アーム

9. [53 ページの「スライドレールと CMA の動作の確認」](#)に進んで、スライドレールと CMA の動作を確認します。

関連情報

- ・ [53 ページの「スライドレールと CMA の動作の確認」](#)

▼ スライドレールと CMA の動作の確認

スライドレールと CMA が正しく動作することを確認するには、次の手順を使用します。



注記

この手順には 2 人の作業員が必要です。1 人がラックからサーバーを出し入れし、もう 1 人はケーブルおよび CMA を監視します。

1. サーバーを引き出すときにラックが前に傾かないように、すべての転倒防止装置を伸ばします。



注意

作業員が負傷する危険性を低減するため、ラックからサーバーを引き出す前に、ラックキャビネットを固定し、すべての転倒防止装置を伸ばします。

ラックを固定する手順については、30 ページの「取り付け用にラックを固定」を参照してください。

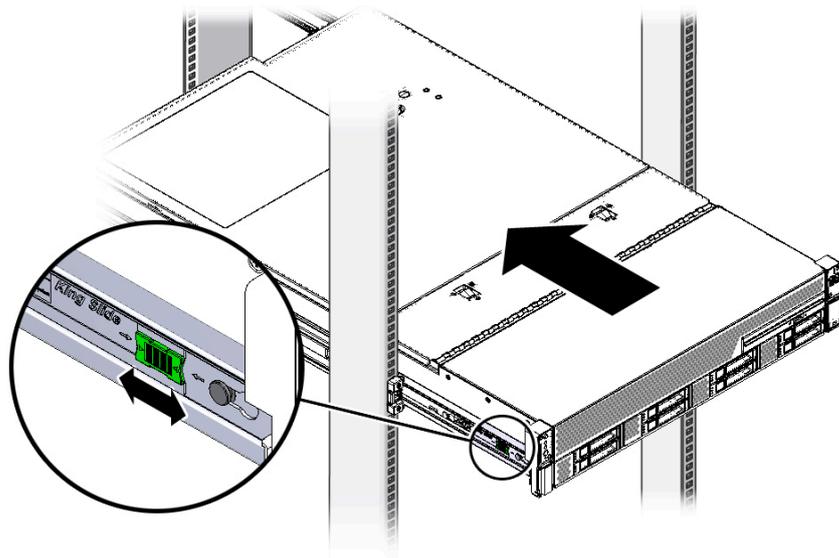
2. スライドレールがストップに達するまで、ラックからサーバーをゆっくりと引き出します。
3. 接続されたケーブルが巻き付いたりねじれたりしていないかを確認します。
4. CMA がスライドレールでいっぱいまで伸びることを確認します。
5. 次の手順に従って、サーバーをラック内に押し戻します。
 - a. 緑色の 2 つのリリース爪 (サーバーの両側に 1 つずつ) をサーバーの前面に向かって同時に引きながら、サーバーをラック内に押し込みます。サーバーをラック内に押し込むときに、CMA が固着することなく元に戻ることを確認してください。



注記

緑色のリリース爪を引っ張るには、爪の端ではなく中央に指を置いて、サーバーの前面に向けて爪を引っ張るように圧力をかけます。

図4.26 スライドレールのリリース爪の位置



- b. サーバーの前面にあるスライドレールのロックがスライドレール構成部品とかみ合うまで、サーバーをラックに押し込みます。

サーバーが通常のラック位置に戻ると、カチッと音がします。

6. 必要に応じて、ケーブルストラップと CMA を調整します。

関連情報

- [35 ページの「スライドレール構成部品へのサーバーの取り付け」](#)
- [37 ページの「第 2 世代のケーブル管理アームの取り付け」](#)
- [50 ページの「第 1 世代のケーブル管理アームの取り付け」](#)

5

・・・ 第 5 章

サーバーの配線

このセクションでは、データおよびサーバー管理用のケーブルと電源コードをサーバーに接続する手順について説明します。

説明	リンク
コネクタポートの場所を確認します。	57 ページの「背面のケーブル接続およびポート」
サーバーの Ethernet ポートについて学習します。	59 ページの「Ethernet ポート」
サーバーにケーブルを接続します。	59 ページの「サーバーへのデータケーブルと電源コードの接続」

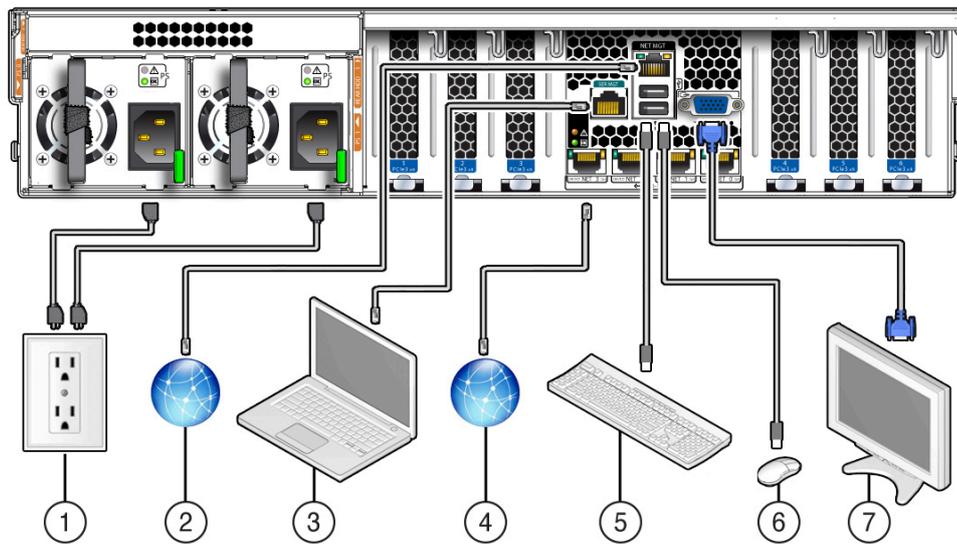
関連情報

- ・ [9 ページの「設置手順の概要」](#)
- ・ [50 ページの「第 1 世代のケーブル管理アームの取り付け」](#)
- ・ [79 ページの「Oracle System Assistant を使用したソフトウェアおよびファームウェアの設定」](#)
- ・ [63 ページの「Oracle ILOM への接続」](#)

背面のケーブル接続およびポート

次の図に、Sun Server X3-2L の背面のケーブルコネクタとポートの位置、およびそれらに接続する主なケーブルとデバイスを示します。

図5.1 背面パネルのケーブル接続



No.	ケーブルポートまたは拡張スロット	説明
1	電源装置 0 の入力電源 電源装置 1 の入力電源	<p>サーバーには、各電源装置に 1 つずつ、計 2 つの電源装置コネクタがあります。</p> <p>データケーブルの接続が完了し、サーバーをシリアル端末または端末エミュレータ (PC またはワークステーション) に接続するまでは、電源ケーブルを電源装置に接続しないでください。サーバーがスタンバイ電源モードになり、AC 電源ケーブルを電源に接続すると、Oracle ILOM サービスプロセッサが初期化されます。サーバーが端末、PC、またはワークステーションに接続されていないと、60 秒後にシステムメッセージが失われる場合があります。</p> <p>注記</p> <p>設置済み電源装置の中に AC 電源に接続されていないものがあると冗長性が失われる可能性があるため、Oracle ILOM は障害を示すシグナルを送信します。</p>
2	ネットワーク管理ポート (NET MGT)	<p>サービスプロセッサの NET MGT ポートは、Oracle ILOM サービスプロセッサへのオプションの接続です。NET MGT ポートは、デフォルトでは、動的ホスト構成プロトコル (DHCP) を使用するように構成されています。サービスプロセッサの NET MGT ポートでは、10/100 BASE-T 接続用に RJ-45 ケーブルを使用します。</p>
3	シリアル管理ポート (SER MGT)	<p>サービスプロセッサの SER MGT ポートは、RJ-45 ケーブルを使用しており、Oracle ILOM サービスプロセッサへのデフォルトの接続です。このポートはサーバーへのローカル接続を行い、Oracle ILOM コマンド行インタフェース (CLI) コマンドだけを認識します。端末または端末エミュレータは通常、このポートに接続します。</p> <p>注記</p> <p>このポートは、ネットワークへの接続をサポートしていません。</p>
4	Ethernet ポート (NET 3、NET 2、NET 1、NET 0)	<p>4 つの 10 ギガビット Ethernet ポートにより、システムをネットワークに接続できます。詳細は、59 ページの「Ethernet ポート」を参照してください。</p> <p>注記</p> <p>シングルプロセッサシステムでは、Ethernet ポート NET2 および NET3 は機能しません。</p>

No.	ケーブルポートまたは拡張スロット	説明
5, 6	USB ポート (USB 0, USB 1)	2 つの USB ポートはホットプラグ対応です。サーバーの実行中に、システムの動作に影響を与えることなく、USB ケーブルや周辺デバイスを接続したり切り離したりできます。
7	ビデオポート (VGA)	15 ピンのビデオケーブルを使用して VGA ビデオデバイスをサーバーに接続できます。オプションで、オペレーティングシステムのインストール時に VGA ポートに接続することもできます。

関連情報

- [59 ページの「Ethernet ポート」](#)
- [59 ページの「サーバーへのデータケーブルと電源コードの接続」](#)

Ethernet ポート

サーバーには、サーバーの背面パネルの左から右に、NET 3、NET 2、NET 1、および NET 0 のラベルの付いた、4 つの RJ-45 10 ギガビット Ethernet (10GbE) ネットワークコネクタがあります。これらのポートを使用して、サーバーをネットワークに接続できます。



注記

シングルプロセッサシステムでは、Ethernet ポート NET2 および NET3 は機能しません。

各 NET ポートの上にある LED は、ポートごとに、左側がリンク/動作状態インジケータ、右側が速度インジケータです。次の表に、Ethernet の転送速度と速度 LED の色の一覧を示します。

接続タイプ	IEEE 用語	速度 LED の色	転送速度
Fast Ethernet	100BASE-TX	消灯	100M ビット/秒
ギガビット Ethernet	1000BASE-T	オレンジ色	1,000M ビット/秒
10 ギガビット Ethernet	10GBASE-T	緑色	10,000M ビット/秒

関連情報

- [57 ページの「背面のケーブル接続およびポート」](#)
- [59 ページの「サーバーへのデータケーブルと電源コードの接続」](#)

サーバーへのデータケーブルと電源コードの接続

このセクションでは、データケーブルと電源ケーブルをサーバーに接続する方法およびサーバーの電源を初めて投入する方法について説明します。

- [60 ページの「データケーブルの接続」](#)
- [60 ページの「電源コードの接続」](#)

関連情報

- [57 ページの「背面のケーブル接続およびポート」](#)
- [59 ページの「Ethernet ポート」](#)

▼ データケーブルの接続

サーバーのケーブル接続を探すには、[58 ページの図 5.1](#)を参照してください。

1. (推奨方法) ローカル接続用のサーバーを Oracle System Assistant にケーブル接続するには、次の手順を実行します。
 - a. VGA モニターをサーバーの VGA ポートに接続します。
 - b. USB キーボードとマウスを、サーバーの USB コネクタに接続します。
2. (代替方法) 接続用のサーバーを Oracle ILOM にケーブル接続するには、次の手順を実行します。
 - **ローカルシリアル接続の場合**– サーバーのシリアル管理ポート (SER MGT) と端末デバイスとをシリアルケーブルで接続します。

この接続で、SP との最初の通信が行われます。9600 ボー、8 ビット、パリティなし、1 ストップビットを使用して通信するようにサーバーを設定します。DTE 間の通信の場合、付属の RJ-45 クロスオーバーアダプタと標準 RJ-45 ケーブルを使用して、ヌルモデム接続を設定します (クロスオーバーして信号を送信および受信)。

- **リモート Ethernet 接続の場合**– サーバーのネットワーク管理 (NET MGT) ポートと、SP およびホストに将来接続されるネットワークとを、Ethernet ケーブルで接続します。

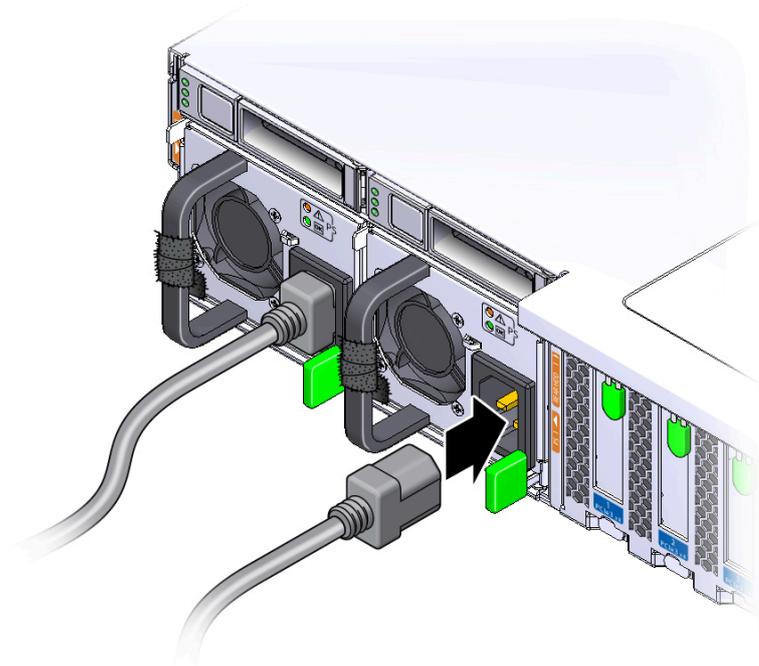
Oracle ILOM を使用する場合は、はじめてシステムを構成するときには SER MGT ポートから行います。初期構成のあと、リモート Ethernet インタフェースを介して SP とホストの間の通信を設定できます。

3. ネットワークアクセスの場合、サーバーの NET ポート (NET3-0) と、サーバーが通信するネットワークとを、Ethernet ケーブルで接続します。

▼ 電源コードの接続

1. 設置された各電源装置について、アースされた 1 本のサーバー電源コードをアースされたコンセントに接続します。
2. サーバー電源コードをサーバーのバックパネルの電源装置 AC コネクタに接続し、ベルクロスストラップで固定します。

電源コードをシステムに接続すると、電源装置の LED が点灯し、サービスプロセッサ (SP) のブート中に SP OK LED が急速に点滅します。サービスプロセッサのブートが正常に完了すると、SP OK LED が緑色で点灯します。サービスプロセッサのブート後、フロントパネル上の電源/OK LED がゆっくり点滅し、ホストがスタンバイ電源モードになっていることを示します。スタンバイ電源モードでは、まだ初期化されておらず、電源も入っていません。



注意

すべてのファン、コンポーネントヒートシンク、エアバッフル、および上部カバーを取り付けないかぎり、サーバーを稼働させないでください。十分な冷却メカニズムが機能していない状態でサーバーを動作させた場合、サーバーコンポーネントに損傷が生じる可能性があります。



注記

インストール済みのオペレーティングシステムを構成する準備、またはオペレーティングシステムの新規インストールを実行する準備が整うまで、主電源をサーバー全体に供給しないようにしてください。この時点では、電源は SP と電源装置のファンにのみ供給されます。

・・・第 6 章

Oracle ILOM への接続

Oracle Integrated Lights Out Manager (Oracle ILOM) は、Sun Server X3-2L のファームウェアに組み込まれています。本サーバーは、Oracle ILOM Version 3.1 をサポートしています。Oracle ILOM は、次の機能を備えています。

- Oracle System Assistant への接続とサーバーのリモート設定を可能にするリモートコンソール機能。
- 拡張されたサーバーの管理および監視機能。

Oracle ILOM の詳細は、Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.1 ドキュメントライブラリ (<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=ilom31>) を参照してください。

このセクションでは、使用しているサーバーで Oracle ILOM にアクセスし起動する方法を説明します。

説明	リンク
Oracle ILOM のハードウェアとインタフェースについて学習します。	64 ページの「Oracle ILOM のハードウェアとインタフェース」
ネットワークポートについて学習します。	64 ページの「ネットワークのデフォルト設定」
シリアルポートに接続された端末を使用して Oracle ILOM に直接ログインします。	65 ページの「ローカルのシリアル接続を使用した Oracle ILOM へのログイン」
Ethernet 接続を使用してネットワーク経由で Oracle ILOM にログインします。	66 ページの「リモート Ethernet 接続を使用した Oracle ILOM へのログイン」
Oracle ILOM 経由でホストコンソールにアクセスします。	73 ページの「Oracle ILOM 経由でのホストコンソールへのアクセス」
サービスプロセッサ接続をトラブルシューティングし、root アカウントパスワードを復旧します。	77 ページの「サービスプロセッサ接続のトラブルシューティング」

関連情報

- [9 ページの「設置手順の概要」](#)
- [59 ページの「サーバーへのデータケーブルと電源コードの接続」](#)
- Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.1 ドキュメントライブラリ: <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=ilom31>

Oracle ILOM のハードウェアとインタフェース

次の表に、Oracle ILOM のコンポーネントと機能を示します。Oracle ILOM の詳細は、Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.1 ドキュメントライブラリ (<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=ilom31>) を参照してください。

コンポーネント	機能
ハードウェア	<ul style="list-style-type: none"> ファン、ストレージドライブ、電源装置など、各コンポーネントのステータスと構成を監視する組み込みのサービスプロセッサ (SP) チップセット。 背面パネルの 2 つの外部接続: NET MGT ポート Ethernet 接続、SER MGT ポート RJ-45 シリアル管理ポート。
インタフェース	<ul style="list-style-type: none"> Web ブラウザインタフェース SSH コマンド行インタフェース (CLI) IPMI v2.0 CLI SNMP v3 インタフェース

Oracle ILOM では、サーバー SP を使用して、サーバーコンポーネントの監視と管理を行うことができます。Oracle ILOM では次が可能です。

- ネットワーク情報の構成
- SP のハードウェア構成の表示と編集
- 重要なシステム情報の監視と記録されたイベントの表示
- Oracle ILOM ユーザーアカウントの管理

関連情報

- Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.1 ドキュメントライブラリ: <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=ilom31>

ネットワークのデフォルト設定

Sun Server X3-2L は、Oracle ILOM が IPv4 および IPv6 ネットワーク環境で完全に動作することを可能にする IPv4 と IPv6 のデュアルスタック設定をサポートしています。IPv4 構成の場合、DHCP がデフォルトで有効になっているので、ネットワーク上の DHCP サーバーがネットワーク設定をサーバーに自動的に割り当てます。IPv6 構成の場合、IPv6 ステートレス自動設定がデフォルトで有効になっているので、ネットワーク上の IPv6 ルーターがネットワーク設定を割り当てます。通常の構成では、DHCP サーバーまたは IPv6 ルーターによって割り当てられたこれらの設定を受け入れます。



注記

DHCP サーバーによって割り当てられた IP アドレスまたはホスト名を確認するには、DHCP サーバーまたは IPv6 ルーターに付属しているネットワークツールを使用してください。

次の手順に従って、割り当てられた設定が正しく動作していることをテストし、Oracle ILOM への接続をローカルおよびリモートで確立することができます。

- ローカルでログインするには、[65 ページの「ローカルのシリアル接続を使用した Oracle ILOM へのログイン」](#)を参照してください。

- ・ リモートでログインするには、サーバー SP に割り当てられた IP アドレス、ホスト名、または IPv6 ローカルリンク名を使用し、[68 ページの「コマンド行インタフェースを使用した Oracle ILOM へのリモートログイン」](#)の手順に従います。

ローカルのシリアル接続を使用した Oracle ILOM へのログイン

シリアル接続を使用して Oracle ILOM にローカルでログインする場合は、シリアルヌルモデムケーブルを SER MGT とラベル付けされた RJ-45 シリアルポート、および端末または端末エミュレータに接続する必要があります。次のシリアル通信設定が使用されていることを確認します。

- ・ 8N1: データビット 8、パリティなし、ストップビット 1
- ・ 9600 ボー
- ・ ハードウェアフロー制御を無効化 (CTS/RTS)
- ・ ソフトウェアフロー制御を無効化 (XON/XOFF)

このセクションでは、次のトピックを取り上げます:

- ・ [65 ページの「ローカルのシリアル接続を使用した Oracle ILOM へのログイン」](#)

関連情報

- ・ [66 ページの「リモート Ethernet 接続を使用した Oracle ILOM へのログイン」](#)

▼ ローカルのシリアル接続を使用した Oracle ILOM へのログイン

この手順では、サーバー SP の IP アドレスを知っている必要はありません。ただし、Oracle ILOM 管理者アカウントを持っている必要があります。この手順を実行する際にはサーバーから離れないでいる必要があります。



注記

Oracle ILOM への初回ログインおよびアクセスを有効にするために、デフォルトの管理者アカウントとそのパスワードがシステムに用意されています。セキュアな環境を構築するため、Oracle ILOM への初回ログイン後、デフォルトの管理者アカウント (root) のデフォルトのパスワード (changeme) を変更する必要があります。このデフォルトの管理者アカウントが変更されている場合は、システム管理者に連絡して、管理者特権を持つ Oracle ILOM ユーザーアカウントを確認してください。

1. 使用しているサーバーで Oracle ILOM にローカルにアクセスするために必要な接続が完了していることを確認するために、[59 ページの「サーバーへのデータケーブルと電源コードの接続」](#)の手順に従います。
2. 端末の Enter キーを押して、使用しているシリアルコンソールと Oracle ILOM の間に接続を確立します。
Oracle ILOM へのログインプロンプトが表示されます。
3. 管理者アカウントを使用して、Oracle ILOM のコマンド行インタフェース (CLI) にログインします。
Oracle ILOM に正常にログインしたことを示すデフォルトのコマンドプロンプト (->) が表示されます。

関連情報

- [66 ページの「Web インタフェースを使用した Oracle ILOM へのリモートログイン」](#)
- [68 ページの「コマンド行インタフェースを使用した Oracle ILOM へのリモートログイン」](#)

リモート Ethernet 接続を使用した Oracle ILOM へのログイン

コマンド行インタフェース (CLI) または Web インタフェースを使用してリモートから Oracle ILOM にログインするには、サーバー SP の IP アドレスを知っている必要があります。以下の各セクションでは、IP アドレスを知らない場合の確認方法、Oracle ILOM へのログイン方法、および SP の IP アドレスの表示および変更方法を説明します。

- [66 ページの「サーバー SP の IP アドレスの確認」](#)
- [66 ページの「Web インタフェースを使用した Oracle ILOM へのリモートログイン」](#)
- [68 ページの「コマンド行インタフェースを使用した Oracle ILOM へのリモートログイン」](#)
- [69 ページの「SP IPv4 アドレスの表示と変更」](#)
- [71 ページの「SP IPv6 アドレスの表示と変更」](#)

サーバー SP の IP アドレスの確認

10 秒以内に DHCP サーバーまたは IPv6 ルーターに到達できない場合、SP 要求はタイムアウトになります。タイムアウト発生後は、DHCP サーバーまたは IPv6 ルーターが SP によって定期的にチェックされます。

ネットワーク上に DHCP サーバーまたは IPv6 ルーターが存在しない場合、または SP の IP アドレスの表示または割り当てを行う必要がある場合は、次の各セクションの手順に従ってください。

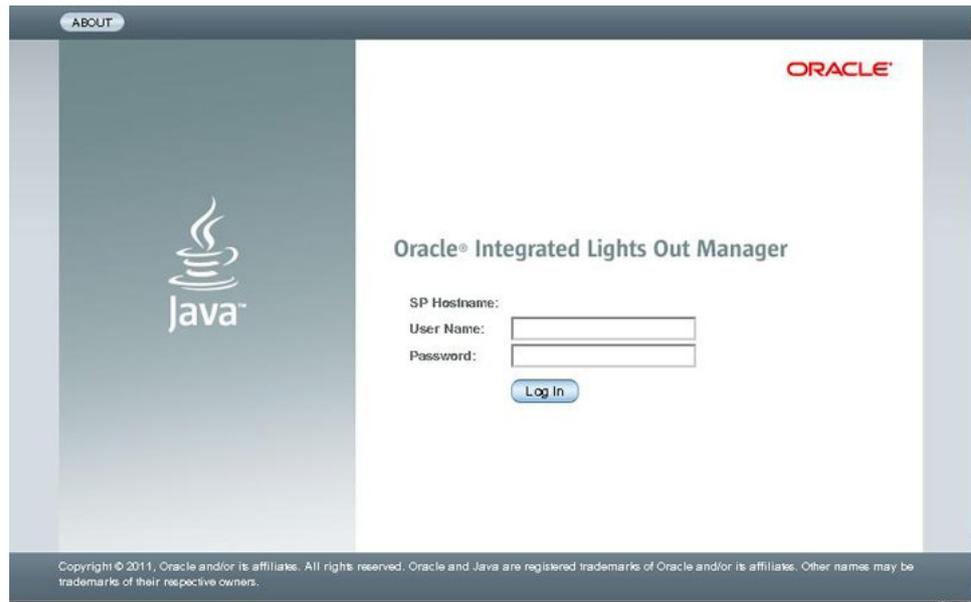
- [69 ページの「SP IPv4 アドレスの表示と変更」](#)
- [71 ページの「SP IPv6 アドレスの表示と変更」](#)

▼ Web インタフェースを使用した Oracle ILOM へのリモートログイン

この手順では、Oracle ILOM 管理者アカウントを持っていることと、サーバー SP の IP アドレスまたはホスト名を知っていることが必要です。

応答時間を短縮するため、Web ブラウザのプロキシサーバーを使用している場合は無効にしてください。

1. 使用しているサーバーで Oracle ILOM にリモートからアクセスするために必要な接続が完了していることを確認するために、[59 ページの「サーバーへのデータケーブルと電源コードの接続」](#)の手順に従います。
2. Web ブラウザのアドレスフィールドにサーバー SP の IP アドレスを入力します。
例: **https://172.16.82.26**
Oracle ILOM の Web インタフェースログインページが表示されます。



3. ユーザー名とパスワードを入力します。



注記

Oracle ILOM への初回ログインおよびアクセスを有効にするために、デフォルトの管理者アカウントとそのパスワードがシステムに用意されています。セキュアな環境を構築するため、Oracle ILOM への初回ログイン後、デフォルトの管理者アカウント (root) のデフォルトのパスワード (changeme) を変更する必要があります。このデフォルトの管理者アカウントが変更されている場合は、システム管理者に連絡して、管理者特権を持つ Oracle ILOM ユーザーアカウントを確認してください。

4. 「Log In」をクリックします。
「System Summary」ページが表示されます。

General Information	
Model	Nashua
Serial Number	223444555
System Type	Rack Mount
System Identifier	-
System Firmware Version	ILOM: 3.1.0.0 BIOS: 17010510
Primary Operating System	-
Host Primary MAC Address	00:21:28:af:bc:38
ILOM Address	10.153.57.35

Actions

Power State: OFF

Locator Indicator: OFF

System Firmware Update:

Remote Console:

これで、サーバーの Oracle ILOM にログインしました。Oracle ILOM の使用方法については、<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=ilom31> にある Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.1 のドキュメントライブラリを参照してください。

関連情報

- [65 ページの「ローカルのシリアル接続を使用した Oracle ILOM へのログイン」](#)
- [69 ページの「SP IPv4 アドレスの表示と変更」](#)
- [71 ページの「SP IPv6 アドレスの表示と変更」](#)

▼ コマンド行インタフェースを使用した Oracle ILOM へのリモートログイン

この手順では、Oracle ILOM 管理者アカウントを持っていることと、サーバー SP の IP アドレスまたはホスト名を知っていることが必要です。

1. 使用しているサーバーで Oracle ILOM にリモートからアクセスするために必要な接続が完了していることを確認するために、[59 ページの「サーバーへのデータケーブルと電源コードの接続」](#)の手順に従います。
2. Secure Shell (SSH) セッションで、管理者アカウントのユーザー名と、サーバー SP の IP アドレスまたはホスト名を指定して、Oracle ILOM にログインします。



注記

Oracle ILOM への初回ログインおよびアクセスを有効にするために、デフォルトの管理者アカウントとそのパスワードがシステムに用意されています。セキュアな環境を構築するため、Oracle ILOM への初回ログイン後、デフォルトの管理者アカウント (root) のデフォルトのパスワード (changeme) を変更する必要があります。このデフォルトの管理者アカウントが変更されている場合は、システム管理者に連絡して、管理者特権を持つ Oracle ILOM ユーザーアカウントを確認してください。

ログインコマンドの構文には、次のどちらかを使用できます。

```
ssh -l username host
```

または

```
ssh username@host
```

ここで、host はサーバー SP の IP アドレスまたはホスト名 (DNS を使用している場合) です。

例:

```
ssh root@192.168.25.25
```

パスワードの入力を求める Oracle ILOM のプロンプトが表示されます。

3. 管理者アカウントのパスワードを入力します。

例:

```
root@192.168.25.25's password: changeme
```

Oracle ILOM に正常にログインしたことを示すデフォルトのコマンドプロンプト (->) が表示されます。Oracle ILOM の使用方法については、<http://www.oracle.com/pls/topic/>

[lookup?ctx=ilom31](#) にある Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.1 のドキュメントライブラリを参照してください。

関連情報

- [65 ページの「ローカルのシリアル接続を使用した Oracle ILOM へのログイン」](#)
- [69 ページの「SP IPv4 アドレスの表示と変更」](#)
- [71 ページの「SP IPv6 アドレスの表示と変更」](#)

▼ SP IPv4 アドレスの表示と変更

SP に現在割り当てられている IPv4 アドレスを表示または変更するには:



注記

BIOS 設定ユーティリティを使用して、ネットワーク設定を変更することもできます。BIOS 設定ユーティリティの詳細は、『*管理*』の「BIOS 構成パラメータの設定」を参照してください。

1. 次のいずれかの手順に従って、Oracle ILOM にログインします。
 - [65 ページの「ローカルのシリアル接続を使用した Oracle ILOM へのログイン」](#)
 - [68 ページの「コマンド行インタフェースを使用した Oracle ILOM へのリモートログイン」](#)



注記

Ethernet 接続を使用して Oracle ILOM にログインした場合、ネットワーク設定を変更すると、接続が切断されるので、この新しい設定を使用してログインし直す必要があります。

2. **cd** コマンドを使用して、`/SP/network` ディレクトリに移動します。
-> **cd /SP/network**
3. 次のいずれかを実行します。
 - ネットワーク上に DHCP サーバーがある場合、次のコマンドを入力して、DHCP サーバーによってサーバーに割り当てられた設定を表示します。

-> **show /SP/network**
 - DHCP サーバーがない場合、または自分で設定を割り当てる場合は、**set** コマンドを使用して、[70 ページのステップ 4](#) の表にあるプロパティの値を割り当てます。例:

-> **set /SP/network/pendingipdiscovery=static**

-> **set /SP/network/pendingipaddress=10.8.183.106**

-> **set /SP/network/pendingipnetmask=10.255.255.255**

-> **set /SP/network/pendingipgateway=10.8.183.254**

-> **set /SP/network/commitpending=true**



注記

Ethernet 接続を使用して Oracle ILOM にログインした場合、**commitpending** を **true** に設定してネットワーク設定の変更をコミットすると、Oracle ILOM 接続が切断されるので、この新しい設定を使用してログインし直す必要があります。

4. サイドバンド管理を有効にする場合は、次のコマンドを入力します。

```
-> set /SP/network/pendingmanagementport=/System/MB/NETn
```

ここで、n は 0、1、2、または 3 です。

```
-> set /SP/network/commitpending=true
```



注記

シングルプロセッサシステムでは、Ethernet ポート NET2 および NET3 は機能しません。

次の表で、各種ネットワーク設定について説明します。

プロパティ	プロパティ値の設定	説明
state	set state=enabled	ネットワークの状態はデフォルトで enabled に設定されています。
pendingipdiscovery	set pendingipdiscovery=static	静的ネットワーク構成を有効にするには、 pendingipdiscovery を static に設定します。 デフォルトでは、 pendingipdiscovery は dhcp に設定されています。
pendingmanagement port	set pendingmanagementport= /System/SP/NET0	デフォルトでは、 pendingmanagementport は NET MGT ポート (/System/SP/NET0) に設定されています。 サイドバンド管理を有効にするには、 pendingmanagementport を使用可能なギガビット Ethernet ポートに設定します。 pendingmanagement port を / System/MB/NETn に設定します。ここで、n は 3、2、1、または 0 です。
pendingipaddress	set pendingipaddress=	複数の静的ネットワーク設定を割り当てるには、各プロパティ値 (IP アドレス、ネットマスク、およびゲートウェイ) に対して、 set コマンドに続けて pending コマンドを入力した後、割り当てる静的な値を入力します。
pendingipnetmask	<ip_address>	
pendingipgateway	pendingipnetmask =<netmask> pendingipgateway =<gateway>	

注記

シングルプロセッサシステムでは、Ethernet ポート NET2 および NET3 は機能しません。

プロパティ	プロパティ値の設定	説明
commitpending	set commitpending=true	set commitpending=true と入力し、変更をコミットします。

関連情報

- ・ [66 ページの「サーバー SP の IP アドレスの確認」](#)
- ・ [71 ページの「SP IPv6 アドレスの表示と変更」](#)

▼ SP IPv6 アドレスの表示と変更

Oracle ILOM SP に現在割り当てられている IPv6 アドレスを表示または変更するには:



注記

BIOS 設定ユーティリティを使用して、ネットワーク設定を変更することもできます。手順については、『*管理*』の「BIOS 構成パラメータの設定」を参照してください。

1. 次のいずれかの手順に従って、Oracle ILOM にログインします。
 - ・ [65 ページの「ローカルのシリアル接続を使用した Oracle ILOM へのログイン」](#)
 - ・ [68 ページの「コマンド行インターフェースを使用した Oracle ILOM へのリモートログイン」](#)



注記

Ethernet 接続を使用して Oracle ILOM にログインした場合、ネットワーク設定を変更すると、接続が切断されるので、この新しい設定を使用してログインし直す必要があります。

2. **cd** コマンドを使用して、/SP/network/ipv6 ディレクトリに移動します
-> **cd /SP/network/ipv6.**
3. **show** コマンドを入力して、デバイスで構成されている IPv6 ネットワーク設定を表示します。
次の例は、サーバーの SP デバイス上の各 IPv6 プロパティのサンプル出力の値です。

```
-> show
/SP/network/ipv6
Targets:

Properties:
state = enabled
autoconfig = stateless
dhcpv6_server_duid = (none)
link_local_ipaddress = 2001:DB8:n:n
static_ipaddress = ::/128
ipgateway = 2001:DB8:n:n
pending_static_ipaddress = ::/128
dynamic_ipaddress_1 2001:DB8:n:n

Commands:
cd
show
```

set

- IPv6 自動構成オプションを構成するには、**set** コマンドを使用して、次の自動構成プロパティの値を指定します。

プロパティ	プロパティ値の設定	説明
state	set state=enabled	IPv6 ネットワークの状態は、デフォルトで enabled になっています。IPv6 の自動構成オプションを有効にするには、この状態を enabled に設定する必要があります。
autoconfig	set autoconfig=<value>	このコマンドには、設定する autoconfig の値を指定します。 次のオプションがあります。 <ul style="list-style-type: none">• stateless (デフォルト設定) IPv6 ネットワークルーターから学習した IP アドレスを自動的に割り当てます。• dhcpv6_stateless DHCPv6 サーバーから学習した DNS 情報を自動的に割り当てます。• dhcpv6_stateful DHCPv6 サーバーから学習した IPv6 アドレスを自動的に割り当てます。• disabled 自動構成プロパティの値をすべて無効にし、リンクローカルアドレスの読み取り専用プロパティの値を設定します。



注記

上の表に示した IPv6 構成オプションは設定後に有効になります。**/network** ターゲットで変更内容をコミットする必要はありません。



注記

dhcpv6_stateless オプションまたは **dhcpv6_stateful** オプションが有効になっている場合、それと同時に **stateless** 自動構成オプションを有効にすることができます。ただし、**dhcpv6_stateless** 自動構成オプションと **dhcpv6_stateful** 自動構成オプションを同時に有効にはなりません。

- 静的 IPv6 アドレスを設定するには、次のプロパティタイプを指定します。

プロパティ	プロパティ値の設定	説明
state	set state=enabled	IPv6 ネットワークの状態は、デフォルトで enabled になっています。静的 IP アドレスを有効にするには、この状態を enabled に設定します。

プロパティ	プロパティ値の設定	説明
<code>pending_static_ipaddress</code>	<code>set pending_static_ipaddress=<ipv6_address>/<subnetmask length_in_bits></code>	このコマンドには、プロパティ値として、デバイスに割り当てる静的 IPv6 アドレスおよびサブネットのネットマスクを指定します。IPv6 アドレスの例: 2001:DB8:n:n
<code>commitpending</code>	<code>set commitpending=true</code>	set commitpending=true と入力し、変更をコミットします。



注記

デバイスに新しい静的 IP アドレスを割り当てると、デバイスとのアクティブな Oracle ILOM セッションがすべて終了します。Oracle ILOM にログインし直すには、新しく割り当てられた IP アドレスを使用して、新しいセッションを作成する必要があります。

関連情報

- [66 ページの「サーバー SP の IP アドレスの確認」](#)
- [69 ページの「SP IPv4 アドレスの表示と変更」](#)

Oracle ILOM 経由でのホストコンソールへのアクセス

Oracle ILOM 経由でホストコンソールに接続すると、実際にホストで行なっているように操作を実行できます。これは、サーバーの BIOS 設定ユーティリティーにリモートからアクセスする必要があるとき、オペレーティングシステムやその他のソフトウェアをサーバー上で構成またはインストールするとき、または Oracle ILOM 経由で Oracle System Assistant にアクセスするときに役立つことがあります。

詳細については、次の各セクションを参照してください。

- [73 ページの「マウスモード設定」](#)
- [74 ページの「Oracle ILOM Web インタフェースを使用したホストコンソールへの接続」](#)
- [76 ページの「Oracle ILOM コマンド行インタフェースを使用したホストのシリアルコンソールへの接続」](#)

▼ マウスモード設定

Oracle ILOM のマウスモード設定は、ホストコンソールへの接続に使用するオペレーティングシステムの要件に応じて、「Absolute」または「Relative」に設定する必要があります。そうしないと、画面のマウスポインタがマウスの動きに追従しません。

- Windows および Oracle Solaris オペレーティングシステムでは、マウスモードを Absolute に設定します。
- Linux オペレーティングシステムの新しいバージョン (Oracle Linux 6.x, Red Hat Enterprise Linux (RHEL) 6.x, および SUSE Linux Enterprise Server (SLES) 11 以降) では、マウスモードを Absolute に設定します。

-
- Linux オペレーティングシステムの古いバージョン (Oracle Linux 5.x, RHEL 5.x, および SLES 10) では、マウスモードを Relative に設定し、マウスが正常に動作しない場合に Absolute に切り替えます。
 - Oracle VM および VMware ESXi では、マウスモードの設定は適用されません。

1. Oracle ILOM Web インタフェースにログインします。
2. 「Remote Control」 > 「Mouse Mode」を選択し、ホストコンソールへの接続に使用するオペレーティングシステムに応じて適切なモードを選択します。



注記

Oracle ILOM の一部のバージョンでは、変更内容を有効にするために、サービスプロセッサ (SP) をリセットする必要があります。SP をリセットする必要がある場合は、Oracle ILOM のメッセージによってその旨が通知されます。

▼ Oracle ILOM Web インタフェースを使用したホストコンソールへの接続

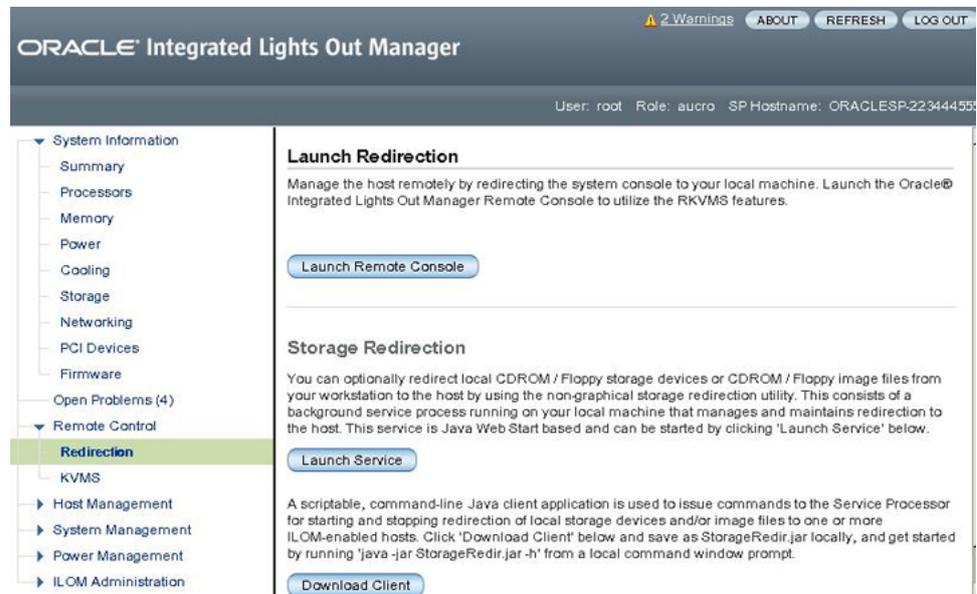
リモートシステムからホストコンソールに接続するには、リモートシステムで次の要件が満たされている必要があります。

- Oracle Solaris, Linux, または Windows などのオペレーティングシステムがインストールされています。
 - Ethernet 管理ポートの 1 つにアクセスできるネットワークにシステムが接続されている必要があります。
 - Java Runtime Environment (JRE) 1.5 以降がインストールされています。CD-ROM リダイレクションの場合は、32 ビット Java を使用する必要があります。
 - リモートコンソールシステムが Oracle Solaris オペレーティングシステムを実行している場合は、リモートコンソールが物理フロッピードライブと CD/DVD-ROM ドライブにアクセスできるように、ボリューム管理を無効にすること。
 - リモートコンソールシステムが Windows を実行している場合は、Internet Explorer の拡張セキュリティ機能が無効にしなければなりません。
 - リモートコンソールシステムと Oracle ILOM のサービスプロセッサが Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.1 ドキュメントライブラリ (<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=ilom31>) に記載されている手順に従って設定されています。
1. 管理者権限のあるアカウントを使用して、サーバーの Oracle ILOM にログインします。
[66 ページの「Web インタフェースを使用した Oracle ILOM へのリモートログイン」](#)を参照してください。
 2. 「System Information」メニューの左側のメニューツリーで「Remote Control」タブを展開して、「Redirection」をクリックします。
「Launch Redirection」ページが表示されます。



注記

Oracle ILOM のマウスモード設定は、ホストコンソールへの接続に使用するオペレーティングシステムの要件に応じて、「Absolute」または「Relative」のどちらかに設定する必要があります。マウスモードを設定する手順については、73 ページの「マウスモード設定」を参照してください。

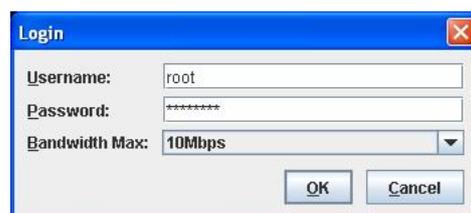


3. 「Launch Redirection」ページで「Launch Remote Console」をクリックします。
次の点に注意してください。

- ・ リモートコンソールのリダイレクションに Windows システムを使用している場合、「Launch Remote Console」をクリックしたあとに、「Hostname Mismatch」警告ダイアログボックスが表示される場合があります。このダイアログボックスが表示された場合は、「Yes」ボタンをクリックして消去します。



- ・ 「Remote Control」ログインダイアログボックスが表示されることがあります。このダイアログボックスが表示された場合は、ユーザー名とパスワードを再入力して「OK」をクリックします。



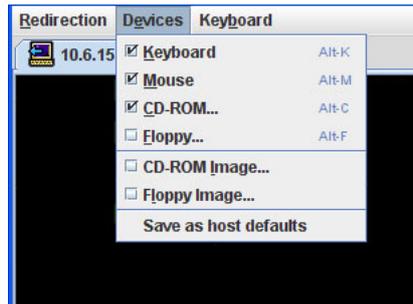


注記

シングルサインオン (SSO) が無効になっているか、サポートされていない場合を除き、「Login」ダイアログボックスは表示されないはずです。

「Oracle ILOM Remote Console」画面が表示されます。

4. リモートシステム上の 1 つ以上のデバイスをホストコンソールにリダイレクトするために、「Devices」メニューから適切な項目を選択します。



- ・ リモートの物理フロッピーディスク – 「Floppy」を選択すると、リモートシステムに接続された物理フロッピードライブにサーバーがリダイレクトされます。
- ・ リモートの物理 CD/DVD – 「CD-ROM」を選択すると、リモートシステムに接続された CD/DVD ドライブ内の CD/DVD にサーバーがリダイレクトされます。
- ・ リモートの CD/DVD イメージ – 「CD-ROM Image」を選択すると、リモートシステム上の ISO イメージファイルにサーバーがリダイレクトされます。



注記

CD/DVD オプションのどちらかを使用してサーバー上にソフトウェアをインストールすると、ネットワーク経由でコンテンツにアクセスするため、インストールの所要時間が増加することがあります。インストールの所要時間は、ネットワークの接続状態とトラフィックによって異なります。

▼ Oracle ILOM コマンド行インタフェースを使用したホストのシリアルコンソールへの接続

1. 管理者権限のあるアカウントを使用して、サーバーの Oracle ILOM にログインします。次のいずれかの方法を使用します。
 - ・ [65 ページの「ローカルのシリアル接続を使用した Oracle ILOM へのログイン」](#)で説明したとおり、シリアル管理ポートを使用します。
 - ・ [68 ページの「コマンド行インタフェースを使用した Oracle ILOM へのリモートログイン」](#)で説明したとおり、クライアントシステムを使用してネットワーク経由で SSH セッションを確立します。
2. ホストシリアルコンソールにアクセスするには、次のコマンドを入力します。
-> **start /HOST/console**

シリアルコンソールの出力が画面上に表示されます。



注記

シリアルコンソールが使用中の場合は、**stop /HOST/console** コマンドに続いて **start /HOST/console** コマンドを入力することで、シリアルコンソールを停止してから再起動します。

- ESC キーを押してから "(" 文字 (Shift キー + 9) を入力して、Oracle ILOM コンソールに戻ります。

サービスプロセッサ接続のトラブルシューティング

このセクションでは、Oracle ILOM サービスプロセッサ (SP) に関して発生する可能性のある次の 2 つの問題の対処方法を示します。

- Oracle ILOM SP がハングアップしたためリセットする必要があります。
- システム管理者が **root** アカウントのパスワードを忘れてしまったため、回復する必要があります。

これらの問題の対処手順については、次の各セクションを参照してください。

- 77 ページの「Oracle ILOM を使用したサービスプロセッサのリセット」
- 77 ページの「サーバーのバックパネルからのサービスプロセッサのリセット」
- 78 ページの「root アカウントのパスワードの復旧」

Oracle ILOM を使用したサービスプロセッサのリセット

Oracle ILOM サービスプロセッサ (SP) がハングアップした場合、Oracle ILOM をリセットするには、次の 2 つの方法があります：

- Oracle ILOM コマンド行インタフェース (CLI) で、「**reset /SP**」と入力します。
- Oracle ILOM Web インタフェースで、「Administration」 > 「Maintenance」 > 「Reset SP」の順にクリックします。



注記

Oracle ILOM SP をリセットすると、現在の Oracle ILOM セッションが切断されます。Oracle ILOM での作業を続けるには、再度ログインする必要があります。

Oracle ILOM の CLI または Web インタフェースから SP をリセットする方法の詳細については、<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=ilom31> にある『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.1 構成および保守ガイド』を参照してください。

▼ サーバーのバックパネルからのサービスプロセッサのリセット

Oracle ILOM SP がハングアップして、Oracle ILOM Web インタフェースまたは Oracle ILOM CLI コマンドを使用してリセットできない場合は、次の手順に従ってサーバーのバックパネルから Oracle ILOM SP をリセットします。

-
- サーバーのバックパネルにある SP リセット用のピンホールボタンをスタイラスで押します。SP がリブートされます。Oracle ILOM での作業を続けるには、再度ログインする必要があります。



注記

Sun Server X3-2L では、SP リセット用ボタンはサーバーのバックパネルの USB ポートの下にあります。このボタンには SP というラベルが付いています。

▼ root アカウントのパスワードの復旧

システム管理者は、必要に応じて、構成済みの Oracle ILOM デフォルトパスワードを使用して、構成済みの Oracle ILOM ローカル **root** アカウントまたはローカル **root** アカウントのパスワードを回復できます。

root アカウントのパスワードを回復するには、Oracle ILOM に対するローカルのシリアル管理ポート (SER MGT) 接続が必要です。また、Oracle ILOM で Physical Presence State が有効になっている場合 (デフォルト)、ユーザーは自分がサーバーの前にいることを証明する必要があります。

root アカウントのパスワードを回復するには、次の手順を実行します。

1. Oracle ILOM へのローカルのシリアル管理接続を確立し、デフォルトのユーザーアカウントを使用して Oracle ILOM にログインします。
例:
`SUNSP-0000000000 login: default`
Press and release the physical presence button
Press return when this is completed...
2. サーバーの前に自分がいることを証明します。
サーバーの前に自分がいることを証明するには、サーバー前面のロケータボタンを押します。ロケータボタンの正確な位置については、14 ページの「フロントパネルのステータスインジケータ、コネクタ、ドライブ」を参照してください。
3. シリアルコンソールに戻って、Enter キーを押します。
パスワードの入力を求めるプロンプトが表示されます。
4. デフォルトユーザーアカウントのパスワード **defaultpassword** を入力します
5. アカウントのパスワードをリセットするか、または **root** アカウントを作成し直します。
詳細は、<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=ilom31> にある『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.1 構成および保守ガイド』の「ローカルユーザーアカウントの構成」のセクションを参照してください。

Oracle System Assistant を使用したソフトウェアおよびファームウェアの設定

Oracle System Assistant はシステムのソフトウェアとファームウェアの設定に適したアプリケーションです。Oracle System Assistant は、Oracle x86 サーバーの初期サーバーセットアップおよび保守作業を行うための組み込みのタスクベースのサーバープロビジョニングツールです。

Oracle System Assistant を使用すると、サポートされている Linux、Windows、または Oracle VM オペレーティングシステムのインストール、サーバーの最新リリースへのアップグレード、サーバーハードウェアの構成を行うことができます。

このセクションでは、Oracle System Assistant を使用して、サーバーのソフトウェアおよびファームウェアを設定する方法について説明します。次の手順について説明します。

説明	リンク
Oracle System Assistant を使用してソフトウェアとファームウェアを設定します。	79 ページの「ソフトウェアおよびファームウェアの設定」
Oracle System Assistant を使用したオペレーティングシステムおよびドライバの設定	81 ページの「オペレーティングシステムおよびドライバの設定」

関連情報

- [9 ページの「設置手順の概要」](#)
- [59 ページの「サーバーへのデータケーブルと電源コードの接続」](#)
- 『管理』、「Oracle System Assistant を使用したサーバーの設定」

▼ ソフトウェアおよびファームウェアの設定

1. サーバーがスタンバイ電源モードになっていることを確認します。
サーバーがスタンバイ電源モードの場合は、フロントパネルの電源/OK LED がゆっくり点滅します。
2. サーバーにローカル接続します。
[59 ページの「サーバーへのデータケーブルと電源コードの接続」](#)のケーブル接続手順に従って作業します。



注記

Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) のリモートコンソール機能を使用して、Oracle System Assistant にアクセスすることもできます。Oracle ILOM への接続およびリモートコンソール機能の使用については、63 ページの「[Oracle ILOM への接続](#)」を参照してください。

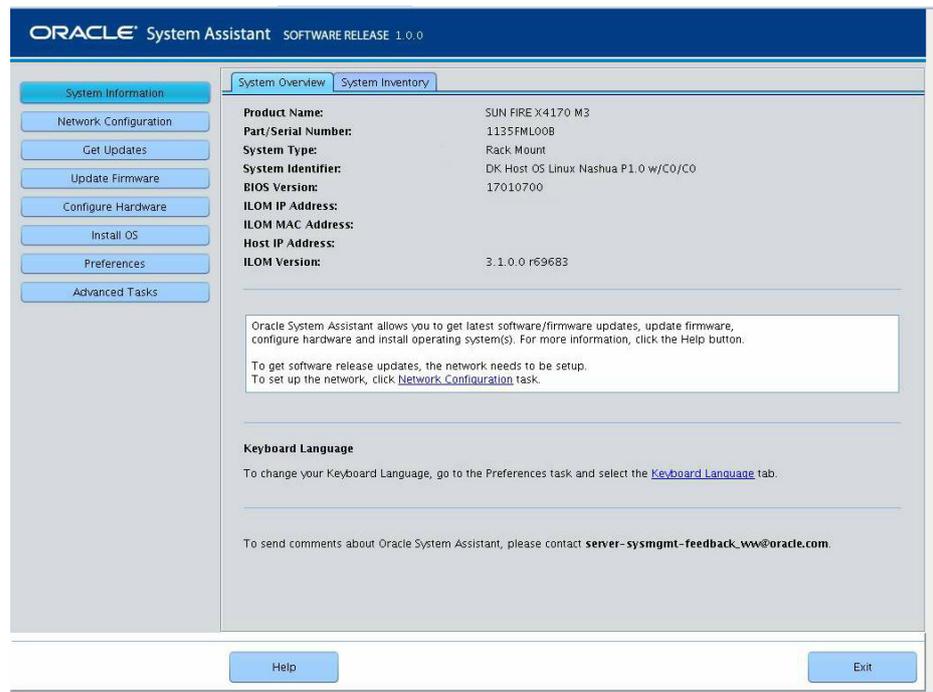
-
3. サーバーのフロントパネルの電源ボタンを押して、サーバーに全電力を投入します。
サーバーがブートし、電源投入時自己診断 (POST) メッセージとブートメッセージがモニターに表示されます。
サーバーのそばを離れないようにしてください。ブートプロセスに割り込む必要があります。
BIOS 画面が表示されます。



注記

次のイベントがすぐに発生するため、次の手順では集中する必要があります。画面に表示される時間が短いため、これらのメッセージを注意して観察してください。

-
4. F9 キーを押すように求めるプロンプトが表示されるまで画面を注視し、表示されたら F9 を押します。
Oracle System Assistant アプリケーションが起動し、「System Overview」画面が表示されます。



5. Oracle System Assistant を使用して、次の表に示したタスクを実行します。

タスク	Oracle System Assistant 画面
1 システム情報とシステムインベントリを確認します。	System Information
2 ネットワーク接続を設定します。	Network Configuration
3 最新のソフトウェアリリースと製品ドキュメントの更新情報を入手します。	Get Updates
4 Oracle ILOM、BIOS、ディスクエクспан ダ、HBA ファームウェアを必要に応じて更新 します。	Update Firmware
5 Oracle ILOM を構成する。	「Configure Hardware」 > 「Service Processor Configuration」
6 RAID を構成する。	「Configure Hardware」 > 「RAID Configuration」
7 Linux、Windows、または Oracle VM オペ レーティングシステムまたはドライバをインス トールします。	Install OS 詳細は、 81 ページの「オペレーティングシステムおよびド ライバの設定」 、またはインストールする OS のインストール ガイドを参照してください。

オペレーティングシステムおよびドライバの設定

インストール済みのオペレーティングシステム (OS) を構成したり、サーバーでサポートされている OS をインストールしたりできます。次の表に、OS のインストールと構成に関する情報の取得方法を示します。

実行するタスク	構成またはインストールする OS	使用するツールまたはドキュメント
インストール済みの OS を構成する	インストール済みの Oracle Solaris OS	109 ページの「インストール済みの Oracle Solaris 11 オペレーティングシステムの構成」

実行するタスク	構成またはインストールする OS	使用するツールまたはドキュメント
OS をインストールする	インストール済みの Oracle Linux	117 ページの「インストール済みの Oracle Linux オペレーティングシステムの構成」
	インストール済みの Oracle VM	123 ページの「インストール済みの Oracle VM 3.x ソフトウェアの構成」
OS ドライバをインストールする	Linux OS、Windows OS、または Oracle VM	Oracle System Assistant または OS のインストールガイド
	Oracle Solaris OS または VMware ESXi	OS のインストールガイド

関連情報

- [109 ページの「インストール済みの Oracle Solaris 11 オペレーティングシステムの構成」](#)
- [117 ページの「インストール済みの Oracle Linux オペレーティングシステムの構成」](#)
- [123 ページの「インストール済みの Oracle VM 3.x ソフトウェアの構成」](#)
- [79 ページの「ソフトウェアおよびファームウェアの設定」](#)

・・・第 8 章

OS インストール用のサーバードライブの構成

このセクションでは、サーバーストレージドライブから RAID (Redundant Array of Independent Disks) ボリュームを構成する手順について説明します。

説明	リンク
RAID 構成ツールについて学習します。	83 ページの「RAID 構成ツール」
RAID 構成オプションについて学習します。	84 ページの「RAID 構成の要件」
Oracle System Assistant を使用してサーバーの複数のストレージドライブで RAID ボリュームを構成します。	85 ページの「Oracle System Assistant を使用した複数のストレージドライブによる RAID ボリュームの構成」
BIOS RAID 構成ユーティリティを使用してサーバーの複数のストレージドライブで RAID ボリュームを構成します。	97 ページの「BIOS RAID 構成ユーティリティを使用した RAID の構成」

関連情報

- ・ [9 ページの「設置手順の概要」](#)
- ・ ホストバスアダプタ (HBA) ドキュメントコレクション (<http://www.oracle.com/technetwork/documentation/oracle-storage-networking-190061.html>)

RAID 構成ツール

サーバーは、次の 2 つのホストバスアダプタ (HBA) をサポートしています。

- ・ Sun Storage 6Gb SAS PCIe 内蔵 HBA (SGX-SAS6-INT-Z)
- ・ Sun Storage 6 Gb SAS PCIe RAID 内蔵 HBA (SGX-SAS6-R-INT-Z)

RAID の構成に使用する手順は、どちらの HBA がサーバーに取り付けられているか、UEFI またはレガシー BIOS のどちらのサーバー BIOS モードが選択されているかに応じて異なります。どちらの HBA でも、Oracle System Assistant (推奨) または BIOS RAID 構成ユーティリティのどちらかを使用して RAID を構成できます。次の表に、それぞれの構成ツールとそれぞれの BIOS モードの RAID 構成手順へのリンクを示します。

RAID 構成ツール	サポートされている HBA	サポートされている BIOS モード	RAID 構成手順
Oracle System Assistant	・ Sun Storage 6Gb SAS PCIe 内蔵 HBA (SGX-SAS6-INT-Z)	UEFI およびレガシー BIOS	・ 86 ページの「Sun Storage 6 Gb SAS PCIe 内蔵 HBA を使用したストレージドライブ上での RAID の構成」

RAID 構成ツール	サポートされている HBA	サポートされている BIOS モード	RAID 構成手順
	<ul style="list-style-type: none"> Sun Storage 6 Gb SAS PCIe RAID 内蔵 HBA (SGX-SAS6-R-INT-Z) 		<ul style="list-style-type: none"> 91 ページの「Sun Storage 6 Gb SAS PCIe RAID 内蔵 HBA を使用したストレージドライブ上での RAID の構成」
BIOS 構成ユーティリティ	<ul style="list-style-type: none"> Sun Storage 6Gb SAS PCIe 内蔵 HBA (SGX-SAS6-INT-Z) Sun Storage 6 Gb SAS PCIe RAID 内蔵 HBA (SGX-SAS6-R-INT-Z) 	<ul style="list-style-type: none"> UEFI レガシー BIOS UEFI レガシー BIOS 	<ul style="list-style-type: none"> 98 ページの「Sun Storage 6 Gb SAS PCIe 内蔵 HBA を使用した UEFI ブートモードでの RAID の構成」 100 ページの「Sun Storage 6 Gb SAS PCIe 内蔵 HBA を使用したレガシー BIOS ブートモードでの RAID の構成」 101 ページの「Sun Storage 6 Gb SAS PCIe RAID 内蔵 HBA を使用した UEFI ブートモードでの RAID の構成」 105 ページの「Sun Storage 6 Gb PCIe RAID 内蔵 HBA を使用したレガシー BIOS ブートモードでの RAID の構成」

RAID 構成の要件

ストレージドライブを RAID ボリュームとして構成するタスクはオプションです。Oracle System Assistant を使用してサーバー上に RAID を構成することをお勧めします。サーバーに Oracle System Assistant がインストールされていない場合は、BIOS 構成ユーティリティを使用して、サーバー上に RAID を構成できます。

RAID に関して次のオプションがあります。

- **オプション 1** – インストール済みのオペレーティングシステムは RAID 構成をサポートしていないため、インストール済みバージョンのオペレーティングシステムまたは仮想マシンソフトウェアを使用する場合は、サーバーのストレージドライブで RAID を構成することはできません。

このオプションの場合は、このセクションをスキップして、次のいずれかのセクションに進みます。

- 109 ページの「インストール済みの Oracle Solaris 11 オペレーティングシステムの構成」
- 117 ページの「インストール済みの Oracle Linux オペレーティングシステムの構成」
- 123 ページの「インストール済みの Oracle VM 3.x ソフトウェアの構成」
- **オプション 2** – OS を新規インストールする場合で、複数のサーバーストレージドライブを使用して 1 つ以上の RAID ボリュームを構成するときは、オペレーティングシステムをインストールする前にサーバーのストレージドライブで RAID ボリュームを構成する必要があります。
 - サーバーに Oracle System Assistant が組み込まれている場合は、85 ページの「Oracle System Assistant を使用した複数のストレージドライブによる RAID ボリュームの構成」に進んで、サーバーに取り付けられている内蔵 HBA に合わせてタスクを選択してください。
 - サーバーに Oracle System Assistant が組み込まれていない場合は、97 ページの「BIOS RAID 構成ユーティリティを使用した RAID の構成」に進んでください。

- **オプション 3** – サーバーに Sun Storage 6 Gb SAS PCIe RAID 内蔵 HBA (SGX-SAS6-R-INT-Z) が取り付けられており、OS の新規インストールを行うが、複数のストレージドライブで RAID ボリュームを構成しません。

このオプションでは、単一のストレージドライブ上に RAID ボリュームを構成して、そのボリュームをブート可能にする必要があります。

- サーバーに Oracle System Assistant が組み込まれている場合は、[91 ページの「Sun Storage 6 Gb SAS PCIe RAID 内蔵 HBA を使用したストレージドライブ上での RAID の構成」](#)に進んで、単一ストレージドライブ上に RAID を構成します。
- サーバーに Oracle System Assistant が組み込まれていない場合は、[97 ページの「BIOS RAID 構成ユーティリティを使用した RAID の構成」](#)に進んで、単一ストレージドライブ上に RAID を構成します。



注記

オプション 3 を選択する場合は、単一のストレージドライブで RAID ボリュームを構成して、そのボリュームをブート可能にする必要があります。そうしないと、内蔵 HBA がインストールに使用するストレージドライブを特定できなくなります。

- **オプション 4** – サーバーに Sun Storage 6 Gb SAS PCIe 内蔵 HBA (SGX-SAS6-INT-Z) が取り付けられており、OS の新規インストールを行うが、サーバーのストレージドライブで RAID ボリュームを構成しません。

インストールするオペレーティングシステムのインストールガイドを参照してください。

- 『Oracle Solaris インストール』の「Oracle Solaris オペレーティングシステムのインストール」
- 『Linux インストール』の「Linux オペレーティングシステムのインストール」
- 『Oracle VM インストール』の「Oracle VM のインストール」
- 『Windows インストール』の「Windows Server 2008 のインストール」
- 『VMware ESXi インストール』の「VMware ESXi のインストール」

オペレーティングシステムのインストール後に RAID ボリュームを作成する手順については、[Oracle x86 X4 シリーズサーバー用管理ガイド](http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs) (<http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs>) を参照してください。

関連情報

- [85 ページの「Oracle System Assistant を使用した複数のストレージドライブによる RAID ボリュームの構成」](#)
- [97 ページの「BIOS RAID 構成ユーティリティを使用した RAID の構成」](#)

Oracle System Assistant を使用した複数のストレージドライブによる RAID ボリュームの構成

Oracle System Assistant を使用してサーバー上に RAID を構成することをお勧めします。サーバーに Oracle System Assistant がインストールされていない場合は、BIOS ユーティリティを使用して RAID を構成できます。

次の手順を参照してください。

- 79 ページの「[Oracle System Assistant を使用したソフトウェアおよびファームウェアの設定](#)」
- 86 ページの「[Sun Storage 6 Gb SAS PCIe 内蔵 HBA を使用したストレージドライブ上での RAID の構成](#)」
- 91 ページの「[Sun Storage 6 Gb SAS PCIe RAID 内蔵 HBA を使用したストレージドライブ上での RAID の構成](#)」

関連情報

- 84 ページの「[RAID 構成の要件](#)」
- 97 ページの「[BIOS RAID 構成ユーティリティを使用した RAID の構成](#)」

▼ Sun Storage 6 Gb SAS PCIe 内蔵 HBA を使用したストレージドライブ上での RAID の構成

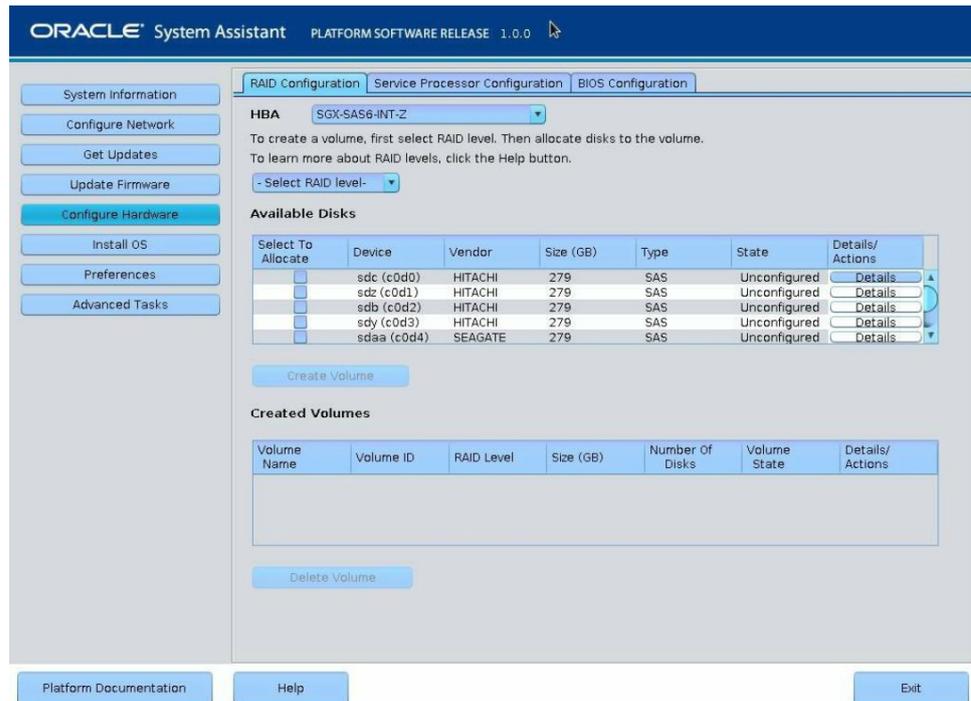
1. Oracle System Assistant を起動します。
[79 ページの「Oracle System Assistant を使用したソフトウェアおよびファームウェアの設定](#)」を参照してください。
「Oracle System Assistant System Overview」画面が表示されます。
2. 「System Overview」画面で、BIOS モードが、オペレーティングシステムをインストールするときに使用する予定のブートモード (UEFI またはレガシー BIOS) に設定されていることを確認します。



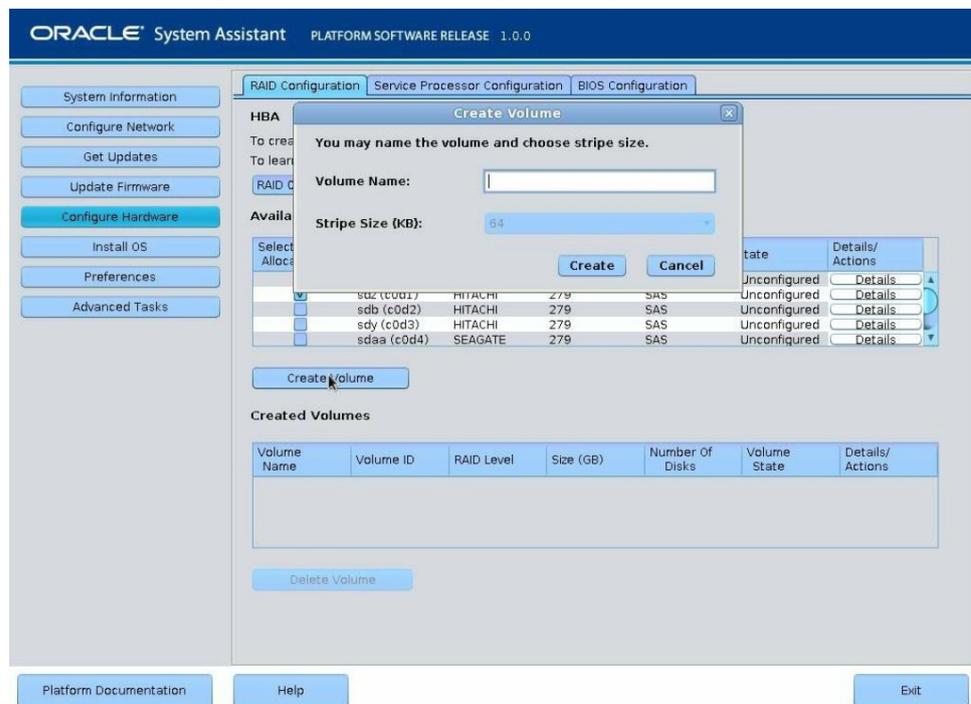
注記

RAID 構成に使用される BIOS モードは、オペレーティングシステムをインストールするときに使用するモードに一致している必要があります。一致していないと、RAID 構成を表示することも使用することもできません。BIOS モードを UEFI からレガシー BIOS へ、またはその反対に切り替える手順については、[Oracle x86 X4 シリーズサーバー用管理ガイド](http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs) (<http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs>) を参照してください。また、サポート対象のすべてのオペレーティングシステムが UEFI モードをサポートしているわけではありません。UEFI モードをサポートしているオペレーティングシステムのリストについては、[20 ページの「UEFI BIOS ブートモード](#)」を参照してください。

-
3. 「Configure Hardware」ボタンをクリックして、「RAID Configuration」タブを選択します。
「RAID Configuration」画面が表示されます。



4. 「HBA」リストボックスで「SGX-SAS6-INT-Z HBA」を選択します。
これは、Sun Storage 6 Gb SAS PCIe 内蔵 HBA です。
5. 「Select RAID Level」リストボックスで、目的の RAID レベルを選択します。
Oracle System Assistant は、RAID-0、RAID-1、および RAID-10 のみをサポートしています。
6. 「Available Disks」表で、RAID ボリュームに追加するストレージドライブを選択して、「Create Volume」ボタンをクリックします。
「Create Volume」ダイアログボックスが表示されます。



7. 「Create Volume」ダイアログボックスで、次の手順を実行します。

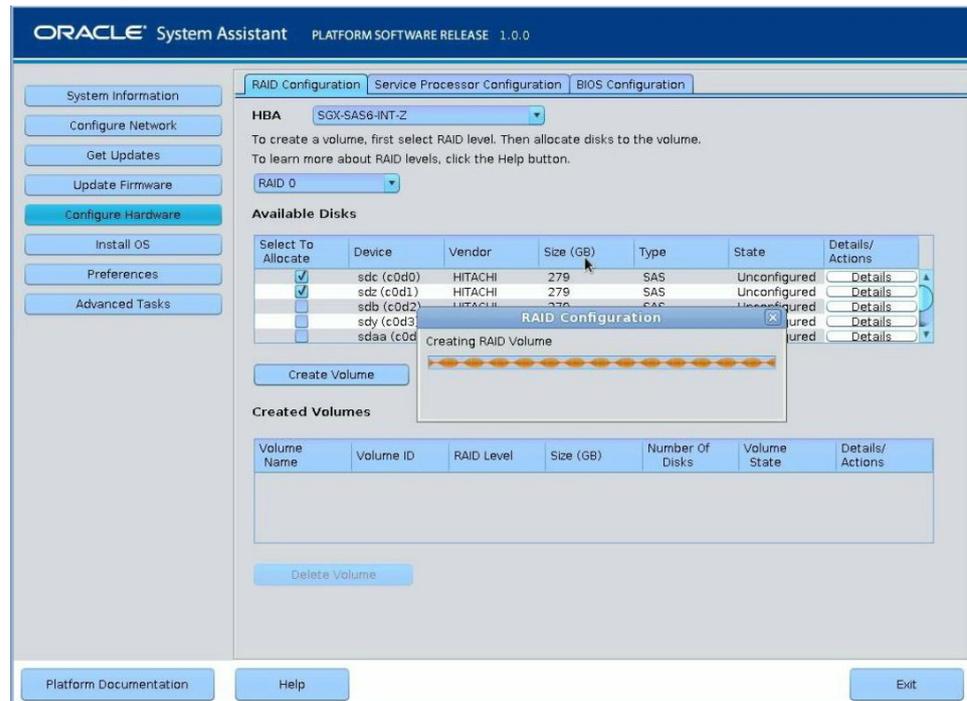
a. (オプション) ボリューム名を入力します。

ボリューム名の入力はおプションです。ボリュームに名前を付けない場合、Oracle System Assistant は名前のないボリュームを作成します。

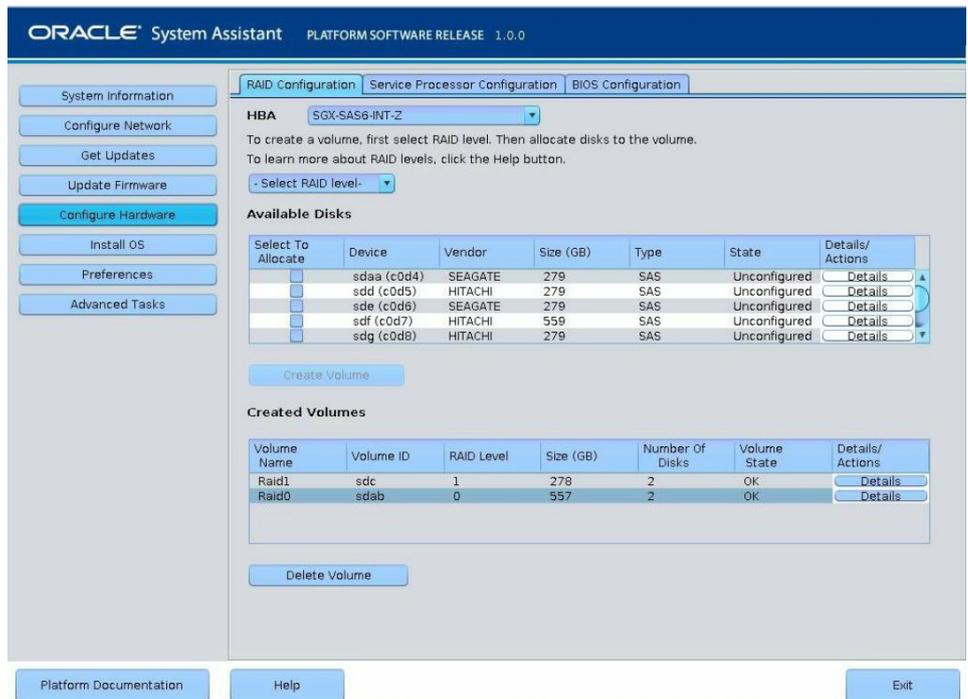
b. ボリュームのストライプサイズを選択します。

c. 「Create」をクリックします。

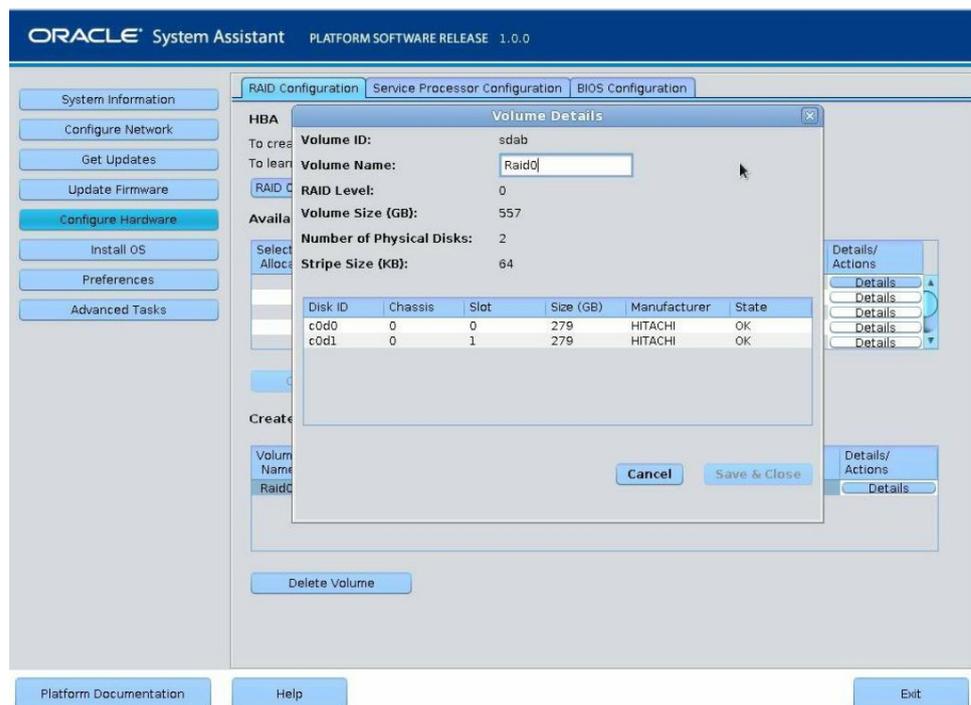
「Creating RAID Volume」情報ボックスが表示されます。



ボリュームは、作成後、「Created Volumes」表に表示されます。



8. 「Created Volumes」表の「Details/Action」列で「Details」ボタンをクリックします。「Volume Details」ダイアログボックスが表示されます。



9. 「Volume Details」ダイアログボックスで、次の手順を実行します。
 - a. ボリュームの詳細を確認します。
 - b. (オプション) 「Volume Name」フィールドで、ボリューム名を入力するか、削除するか、変更します。

以前にボリューム名を入力していない場合は、「Volume Details」ダイアログボックスでもう一度入力する機会が得られます。以前にボリューム名を入力している場合は、ここで変更または削除できます。



注記

ボリューム名を付けるかはオプションです。ボリュームに名前を付けない場合、Oracle System Assistant は名前のないボリュームを作成します。さらに、「Created Volumes」表の「Details」ボタンをクリックして、いつでもボリューム名を変更または削除できます。

- c. ボリュームの作成を確認するには、「Save & Close」をクリックします。

「RAID Configuration」画面が開き、RAID 構成の結果が表示されます。

The screenshot shows the Oracle System Assistant RAID Configuration interface. The HBA is set to SGX-SAS6-INT-Z. The RAID level is set to RAID 0. The available disks table is as follows:

Select To Allocate	Device	Vendor	Size (GB)	Type	State	Details/Actions
<input type="checkbox"/>	sdaa (c0d4)	SEAGATE	279	SAS	Unconfigured	Details
<input type="checkbox"/>	sdd (c0d5)	HITACHI	279	SAS	Unconfigured	Details
<input type="checkbox"/>	sde (c0d6)	SEAGATE	279	SAS	Unconfigured	Details
<input type="checkbox"/>	sdf (c0d7)	HITACHI	559	SAS	Unconfigured	Details
<input type="checkbox"/>	sdg (c0d8)	HITACHI	279	SAS	Unconfigured	Details

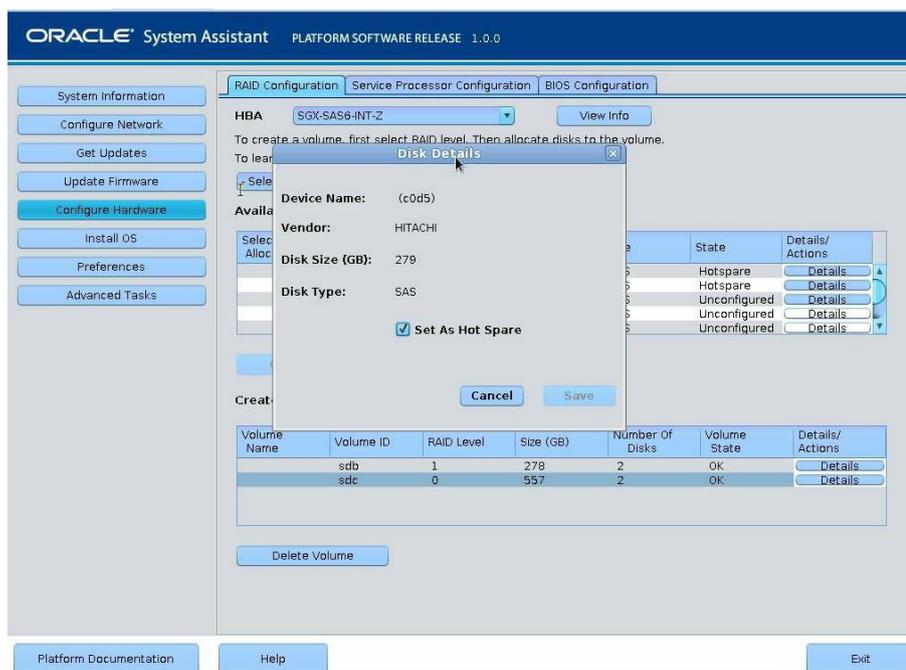
The created volumes table is as follows:

Volume Name	Volume ID	RAID Level	Size (GB)	Number Of Disks	Volume State	Details/Actions
Raid1	sdc	1	278	2	OK	Details
Raid0	sdab	0	557	2	OK	Details

10. 作成したボリュームをグローバルホットスペアとして指定する場合は、次の手順を実行します。指定しない場合は、91 ページのステップ 11に進みます。

- a. 「Details/Actions」列で「Details」ボタンをクリックします。

「Disk Details」ダイアログボックスが表示されます。



- b. 「Set as Hot Spar」ボックスにチェックマークを付けます。



注記

Sun Storage 6 Gb SAS PCIe 内蔵 HBA では、最大 2 つのホットスペアを作成できます。

- c. 「Save」をクリックします。

「Disk Details」ダイアログボックスが閉じます。

11. ボリュームを削除する場合は、そのボリュームを選択してから「Delete Volume」ボタンをクリックします。

これで RAID 構成タスクが完了します。

12. 次のいずれかを実行します。

- 他の Oracle System Assistant タスクを選択するには、左側のパネルメニューの対応するボタンをクリックします。たとえば RAID の構成後、「Install OS」タスクを選択して、オペレーティングシステムのインストールを実行できます。
- Oracle System Assistant の「System Overview」画面に戻るには、左側のメニューパネルで「System Information」をクリックします。
- Oracle System Assistant を終了するには、「Exit」をクリックします。

▼ Sun Storage 6 Gb SAS PCIe RAID 内蔵 HBA を使用したストレージドライブ上での RAID の構成

1. Oracle System Assistant を起動します。
[79 ページの「Oracle System Assistant を使用したソフトウェアおよびファームウェアの設定」](#)を参照してください。
「Oracle System Assistant System Overview」画面が表示されます。

- 「System Overview」画面で、BIOS モードが、オペレーティングシステムをインストールするとき使用する予定のブートモード (UEFI またはレガシー BIOS) に設定されていることを確認します。



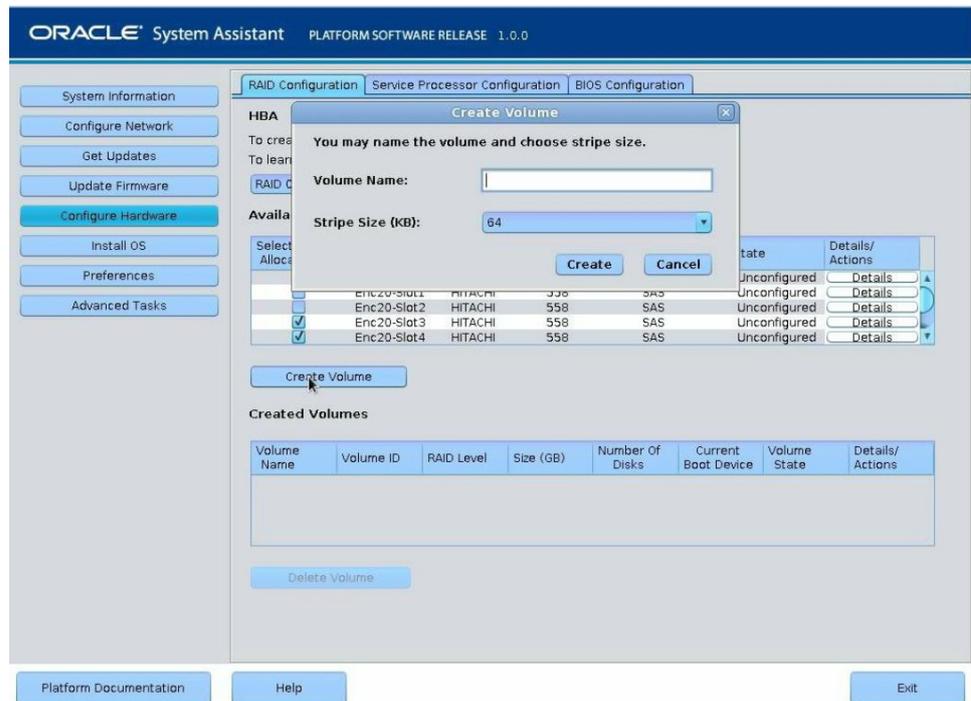
注記

RAID 構成に使用される BIOS モードは、オペレーティングシステムをインストールするとき使用するモードに一致している必要があります。一致していないと、RAID 構成を表示することも使用することもできません。BIOS モードを UEFI からレガシー BIOS へ、またはその反対に切り替える手順については、*Oracle x86 X4 シリーズサーバー用管理ガイド* (<http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs>) を参照してください。また、サポート対象のすべてのオペレーティングシステムが UEFI モードをサポートしているわけではありません。UEFI モードをサポートしているオペレーティングシステムのリストについては、[20 ページの「UEFI BIOS ブートモード」](#)を参照してください。

- 「Configure Hardware」ボタンをクリックして、「RAID Configuration」タブを選択します。「RAID Configuration」画面が表示されます。

Select To Allocate	Device	Vendor	Size (GB)	Type	State	Details/Actions
<input type="checkbox"/>	Enc20-Slot0	HITACHI	558	SAS	Unconfigured	Details
<input type="checkbox"/>	Enc20-Slot1	HITACHI	558	SAS	Unconfigured	Details
<input type="checkbox"/>	Enc20-Slot2	HITACHI	558	SAS	Unconfigured	Details
<input type="checkbox"/>	Enc20-Slot3	HITACHI	558	SAS	Unconfigured	Details
<input type="checkbox"/>	Enc20-Slot4	HITACHI	558	SAS	Unconfigured	Details

- 「HBA」リストボックスで「SGX-SAS6-R-INT-Z HBA」を選択します。これは、Sun Storage 6 Gb SAS PCIe RAID 内蔵 HBA です。
- 「Select RAID Level」リストボックスで、目的の RAID レベルを選択します。Oracle System Assistant は、RAID-0、RAID-1、および RAID-10 をサポートしています。
- 「Available Disks」表で、RAID ボリュームに追加するストレージドライブを選択して、「Create Volume」ボタンをクリックします。「Create Volume」ダイアログボックスが表示されます。



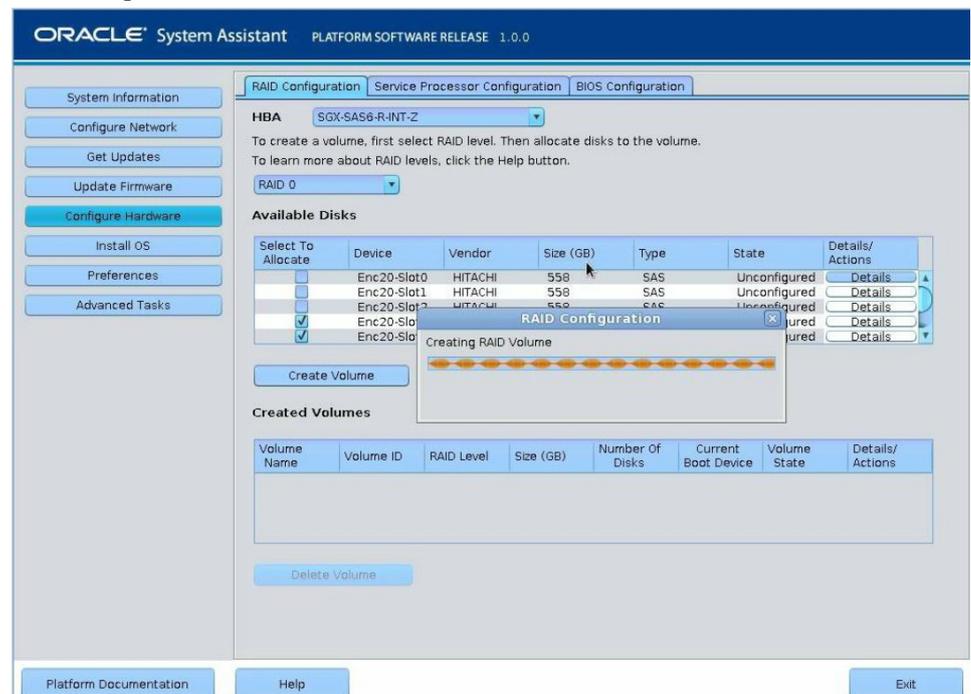
7. 「Create Volume」ダイアログボックスで、次の手順を実行します。

- a. (オプション) ボリューム名を入力します。

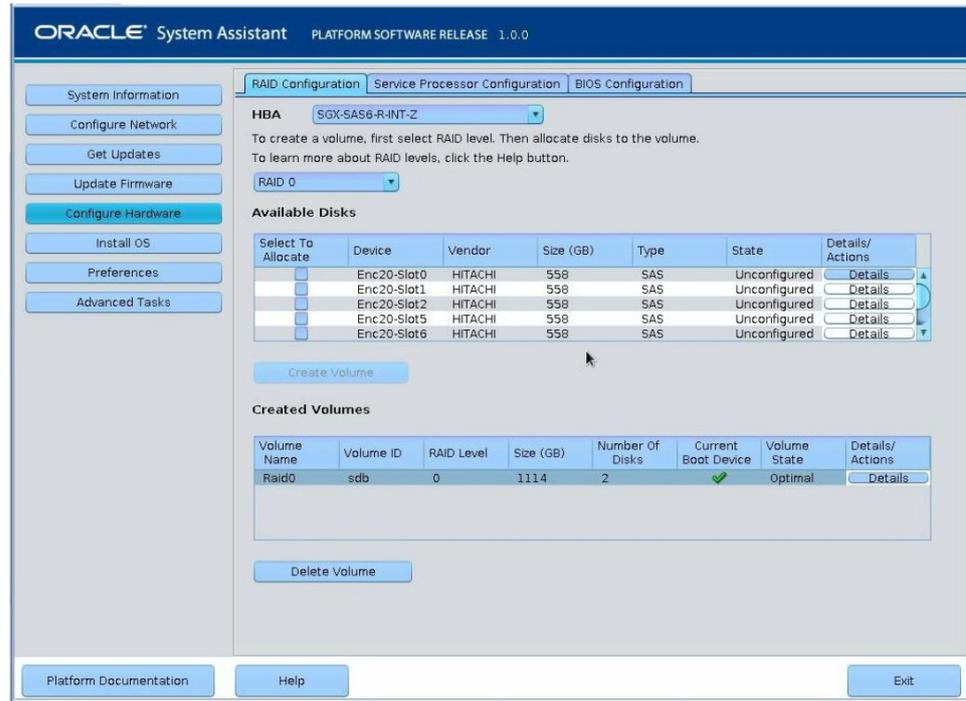
ボリューム名の入力はオプションです。ボリュームに名前を付けない場合、Oracle System Assistant は名前のないボリュームを作成します。

- b. ボリュームのストライプサイズを選択します。
- c. 「Create」をクリックします。

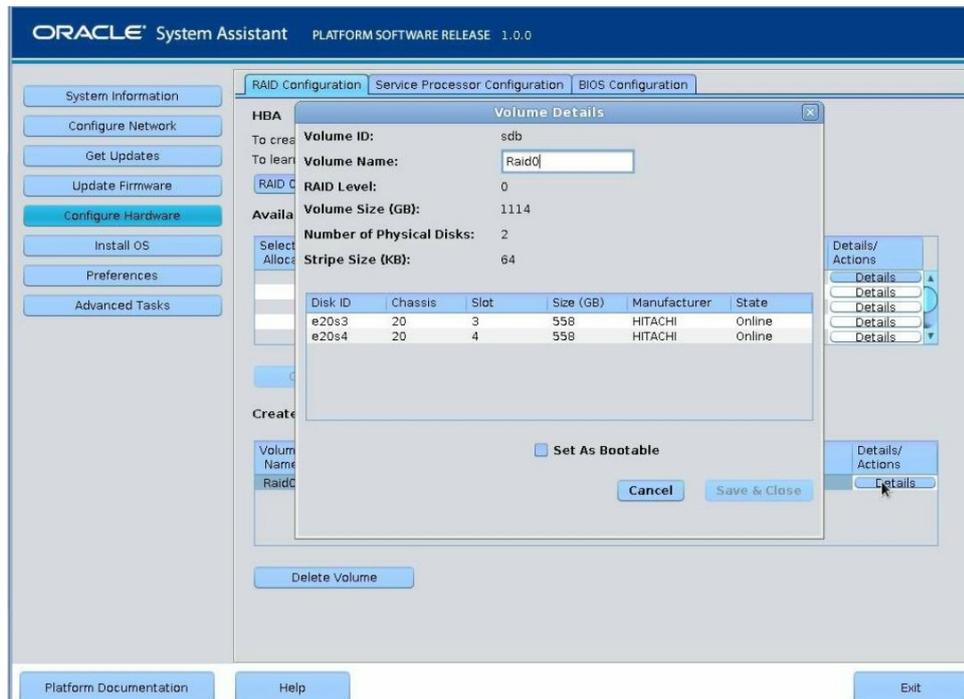
「Creating RAID Volume」情報ボックスが表示されます。



ボリュームは、作成後、「Created Volumes」表に表示されます。



8. 「Created Volumes」表の「Details/Action」列で「Details」ボタンをクリックします。「Volume Details」ダイアログボックスが表示されます。



9. 「Volume Details」ダイアログボックスで、次の手順を実行します。
 - a. ボリュームの詳細を確認します。
 - b. (オプション) 「Volume Name」フィールドで、ボリューム名を入力するか、変更します。

以前にボリューム名を入力していない場合は、「Volume Details」ダイアログボックスでもう一度入力する機会が得られます。以前にボリューム名を入力している場合はここで変更できますが、名前を完全に削除することはできません。

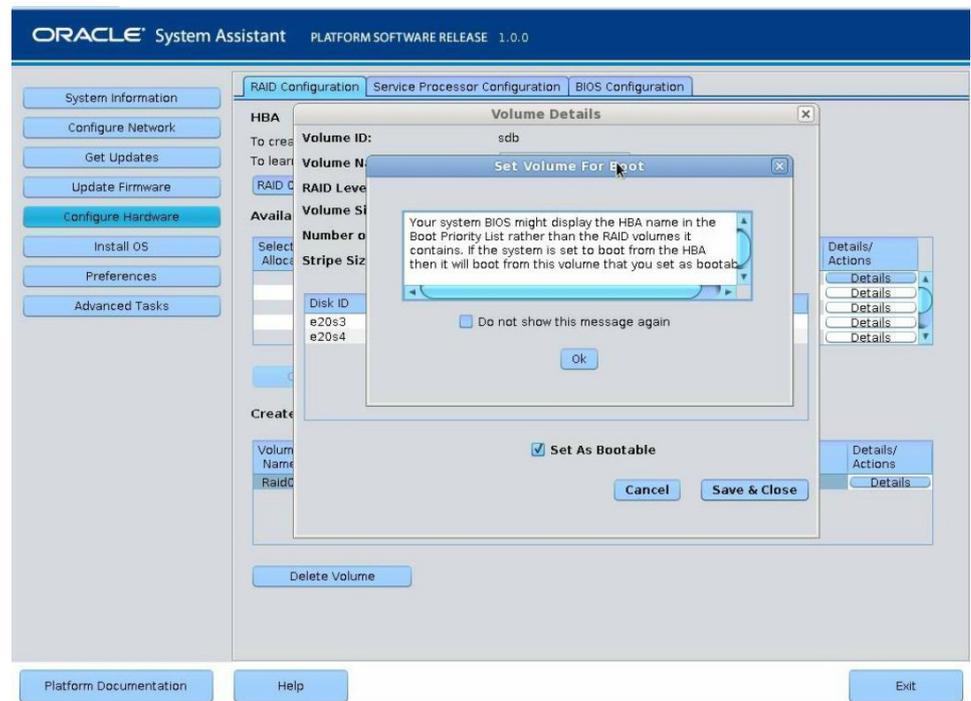


注記

ボリューム名を付けるかはオプションです。ボリュームに名前を付けない場合、Oracle System Assistant は名前のないボリュームを作成します。さらに、「Created Volumes」表の「Details」ボタンをクリックしていつでもボリューム名を変更できますが、ボリューム名をいったん割り当てたあとで削除することはできません。

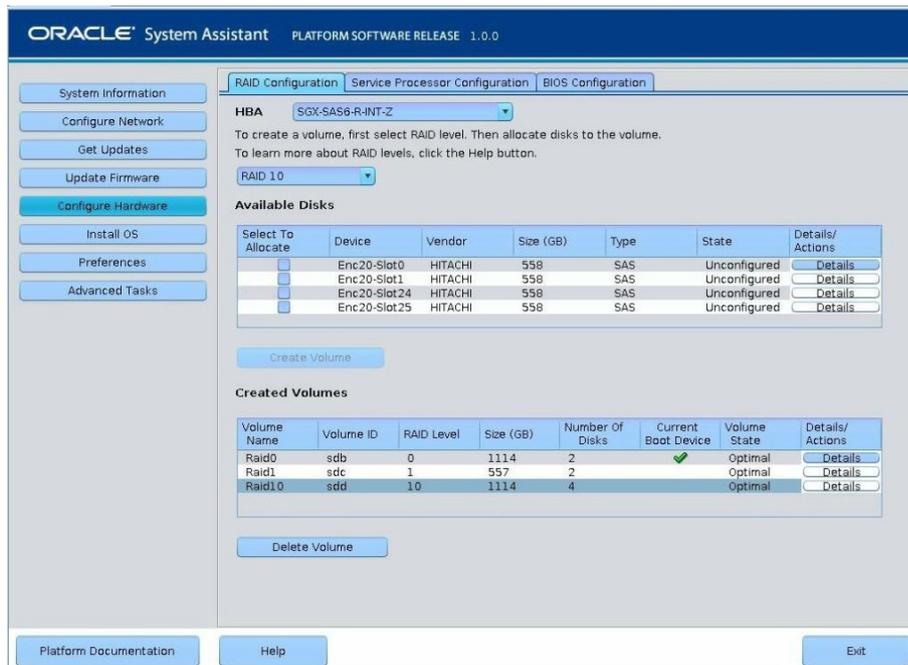
- c. 「Set As Bootable」ボックスにチェックマークを付けます。
- d. 「Save & Close」をクリックします。

「Set Volume For Boot」確認ダイアログが表示されます。



- 10. 「OK」をクリックします。

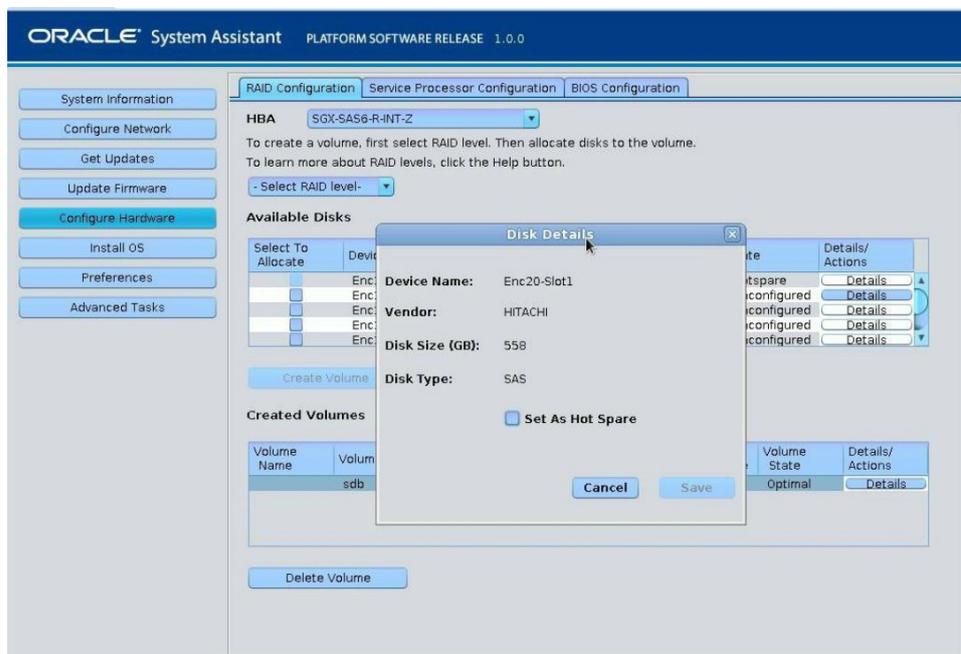
「RAID Configuration」画面が開き、現在のブートデバイスとして RAID ボリュームが一覧表示されます。



11. 作成したボリュームをグローバルホットスペアとして指定する場合は、次の手順を実行します。指定しない場合は、97 ページのステップ 12に進みます。

a. 「Details/Actions」列で「Details」ボタンをクリックします。

「Disk Details」ダイアログボックスが表示されます。



b. 「Set as Hot Spar」ボックスにチェックマークを付けます。



注記

Sun Storage 6 Gb SAS PCIe 内蔵 HBA では、最大 256 のホットスペアを作成できます。

- c. 「Save」をクリックします。

「Disk Details」ダイアログボックスが閉じます。
12. ボリュームを削除する場合は、そのボリュームを選択してから「Delete Volume」ボタンをクリックします。

これで RAID 構成タスクが完了します。
13. 次のいずれかを実行します。
 - 他の Oracle System Assistant タスクを選択するには、左側のパネルメニューの対応するボタンをクリックします。たとえば RAID の構成後、「Install OS」タスクを選択して、オペレーティングシステムのインストールを実行できます。
 - Oracle System Assistant の「System Overview」画面に戻るには、左側のメニューパネルで「System Information」をクリックします。
 - Oracle System Assistant を終了するには、「Exit」をクリックします。

BIOS RAID 構成ユーティリティを使用した RAID の構成

Oracle System Assistant を使用して RAID を構成できますが、Oracle System Assistant を使用できない場合は、HBA ファームウェアに組み込まれている BIOS RAID 構成ユーティリティを使用できます。RAID を構成する手順は、サーバーに取り付けられている HBA の種類によって異なります。

これらのユーティリティの使用方法については、次のセクションを参照してください。

- [97 ページの「Sun Storage 6 Gb SAS PCIe 内蔵 HBA を使用した RAID の構成」](#)
- [100 ページの「Sun Storage 6 Gb SAS PCIe RAID 内蔵 HBA を使用した UEFI ブートモードでの RAID の構成」](#)
- [105 ページの「Sun Storage 6 Gb PCIe RAID 内蔵 HBA を使用したレガシー BIOS ブートモードでの RAID の構成」](#)

関連情報

- [84 ページの「RAID 構成の要件」](#)
- [85 ページの「Oracle System Assistant を使用した複数のストレージドライブによる RAID ボリュームの構成」](#)

Sun Storage 6 Gb SAS PCIe 内蔵 HBA を使用した RAID の構成

BIOS RAID 構成ユーティリティは、UEFI ブートモードとレガシー BIOS ブートモードに設定したサーバーでの RAID 構成をサポートします。ブートモードごとに別々のユーティリティが用意されています。



注記

オペレーティングシステムと仮想マシンソフトウェアの中には、レガシー BIOS ブートモードしかサポートしていないものがあります。UEFI ブートモードをサポートしていないオペレーティングシステムおよび仮想マシンソフトウェアのリストについては、[20 ページの「UEFI BIOS ブートモード」](#)を参照してください。

- [98 ページの「Sun Storage 6 Gb SAS PCIe 内蔵 HBA を使用した UEFI ブートモードでの RAID の構成」](#)
- [100 ページの「Sun Storage 6 Gb SAS PCIe 内蔵 HBA を使用したレガシー BIOS ブートモードでの RAID の構成」](#)

▼ Sun Storage 6 Gb SAS PCIe 内蔵 HBA を使用した UEFI ブートモードでの RAID の構成

1. サーバーの電源を入れるか、リセットします。
たとえば、サーバーをリセットするには、次の手順を実行します。
 - ローカルサーバーのフロントパネルにある電源ボタンを (約 1 秒間) 押してサーバーの電源を切り、もう一度電源ボタンを押してサーバーの電源を入れます。
 - **Oracle ILOM Web** インタフェースから「Host Management」 > 「Power Control」を選択し、次に「Select Action」リストボックスから「Reset」を選択します。
 - **Oracle ILOM CLI** で次のように入力します: `reset /System`
BIOS 画面が表示されます。
2. BIOS 画面でプロンプトが表示されたら、F2 を押して BIOS 設定ユーティリティーにアクセスします。
しばらくすると、BIOS 設定ユーティリティーが表示されます。
3. 右矢印キーを使用して UEFI の「Driver Control」メニューに移動します。
UEFI の「Driver Control」メニューが表示されます。



4. 上矢印キーと下矢印キーを使用して、「LSI SAS2 MPT Controller」メニューオプションに移動して、Enter キーを押します。

「LSI SAS MPT Controller」メニューが表示されます。



注記

「LSI MPT SAS Controller」メニューは、サーバーの構成によって異なります。

5. BIOS 構成ユーティリティを使用して、サーバー上に RAID を構成します。
BIOS 構成ユーティリティを使用して UEFI ブートモードで RAID を構成する方法については、「Sun Storage 6 Gb SAS PCIe 内蔵 HBA 設置ガイド (HBA モデル SGX-SAS6-INT-Z および SG-SAS6-INT-Z 対応)」(<http://docs.oracle.com/cd/E19337-01/index.html>) で、x86/64 システムでのブート可能ドライブの作成手順を参照してください。

▼ Sun Storage 6 Gb SAS PCIe 内蔵 HBA を使用したレガシー BIOS ブートモードでの RAID の構成

1. サーバーの電源を入れるか、リセットします。
たとえば、サーバーをリセットするには、次の手順を実行します。
 - ・ ローカルサーバーのフロントパネルにある電源ボタンを (約 1 秒間) 押してサーバーの電源を切り、もう一度電源ボタンを押してサーバーの電源を入れます。
 - ・ **Oracle ILOM Web** インタフェースから「Host Management」>「Power Control」を選択し、次に「Select Action」リストボックスから「Reset」を選択します。
 - ・ **Oracle ILOM CLI** で次のように入力します: `reset /System`
2. ブートプロセス中に、システム内の、検出された SAS アダプタと、検出された HBA に接続されているデバイスに関する情報が BIOS の初期化バナーに一覧表示されます。
3. 「Press Ctrl-C to start LSI Corp Configuration Utility...」というプロンプトが表示されたら、すぐに Ctrl+C キーを押して LSI Corp Config Utility にアクセスします。
「LSI Corp Config Utility」メニューが表示されます。



```
LSI Corp Config Utility      v7.21.04.00 (2011.12.27)
Adapter List: Global Properties
Adapter      PCI      PCI      PCI      PCI      FW Revision      Status      Boot
              Bus      Dev      Fnc      Slot
SGX-SAS6-INT-Z  50      00      00      04      11.05.02.00-IR  Enabled      0

Esc = Exit Menu      F1/Shift+1 = Help
Alt+M = Global Properties  -/+ = Alter Boot Order  Ins/Del = Alter Boot List
```

4. LSI Corp Config Utility を使用して、サーバー上に RAID を構成します。
BIOS 構成ユーティリティを使用してレガシー BIOS ブートモードで RAID を構成する方法については、「Sun Storage 6 Gb SAS PCIe 内蔵 HBA 設置ガイド (HBA モデル SGX-SAS6-INT-Z および SG-SAS6-INT-Z 対応)」(<http://docs.oracle.com/cd/E19337-01/index.html>) で、x86/64 システムでのブート可能ドライブの作成手順を参照してください。

Sun Storage 6 Gb SAS PCIe RAID 内蔵 HBA を使用した UEFI ブートモードでの RAID の構成

BIOS RAID 構成ユーティリティは、UEFI ブートモードに設定したサーバーでの RAID 構成をサポートします。



注記

オペレーティングシステムと仮想マシンソフトウェアの中には、レガシー BIOS ブートモードしかサポートしていないものがあります。UEFI ブートモードをサポートしていないオペレーティングシステムおよび仮想マシンソフトウェアのリストについては、[20 ページの「UEFI BIOS ブートモード」](#)を参照してください。

- [101 ページの「Sun Storage 6 Gb SAS PCIe RAID 内蔵 HBA を使用した UEFI ブートモードでの RAID の構成」](#)

▼ Sun Storage 6 Gb SAS PCIe RAID 内蔵 HBA を使用した UEFI ブートモードでの RAID の構成

1. サーバーの電源を入れるか、リセットします。
たとえば、サーバーをリセットするには、次の手順を実行します。
 - ローカルサーバーのフロントパネルにある電源ボタンを (約 1 秒間) 押してサーバーの電源を切り、もう一度電源ボタンを押してサーバーの電源を入れます。
 - **Oracle ILOM Web** インタフェースから「Host Management」>「Power Control」を選択し、次に「Select Action」リストボックスから「Reset」を選択します。
 - **Oracle ILOM CLI** で次のように入力します: `reset /System`
BIOS 画面が表示されます。
2. BIOS 画面でプロンプトが表示されたら、F2 を押して BIOS 設定ユーティリティにアクセスします。
しばらくすると、BIOS 設定ユーティリティが表示されます。
3. 右矢印キーを使用して UEFI の「Driver Control」メニューに移動します。
UEFI の「Driver Control」メニューが表示されます。

```
Aprio Setup Utility - Copyright (C) 2012 American Megatrends, Inc.
Main Advanced IO Boot UEFI Driver Control Save & Exit

▶ iSCSI Configuration
▶ Intel(R) Ethernet Controller X540-AT2 - 00:10:E0:0D:55:B6
▶ Intel(R) Ethernet Controller X540-AT2 - 00:10:E0:0D:55:B7
▶ LSI MegaRAID <LSI MegaRAID SAS 9261-8i> Configuration Utility - 01.33.00
▶ Intel(R) Ethernet Controller X540-AT2 - 00:10:E0:0D:55:B8
▶ Intel(R) Ethernet Controller X540-AT2 - 00:10:E0:0D:55:B9

Manage RAID Controller Configurations.

**+: Select Screen
↑↓: Select Item
Enter: Select
+/-: Change Opt.
F1: General Help (CTRL+Q from serial keyboard)
Q: Scroll Help Pane Up
A: Scroll Help Pane Down
ESC: Exit

Version 2.15.1229, Copyright (C) 2012 American Megatrends, Inc.
AB
```

4. 上矢印キーと下矢印キーを使用して、「LSI MegaRAID Configuration Utility」メニューオプションに移動して、Enter キーを押します。

「LSI MegaRAID Configuration Utility」メニューが表示されます。



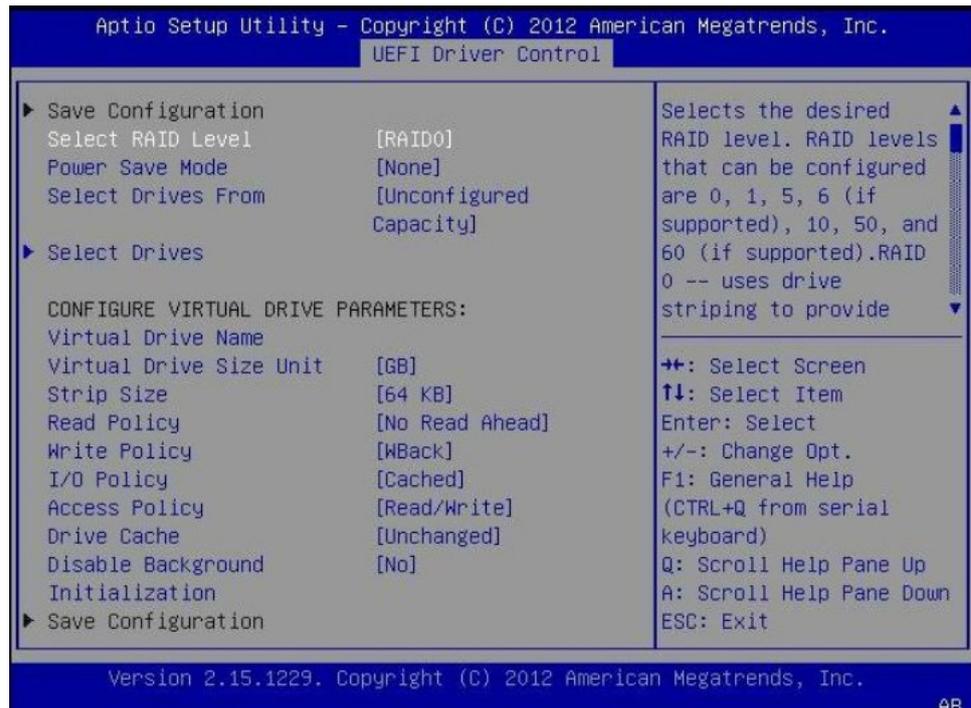
5. 上矢印キーと下矢印キーを使用して、「Virtual Drive Management」オプションを選択し、Enter キーを押します。

「Virtual Drive Management」メニュー画面が表示されます。



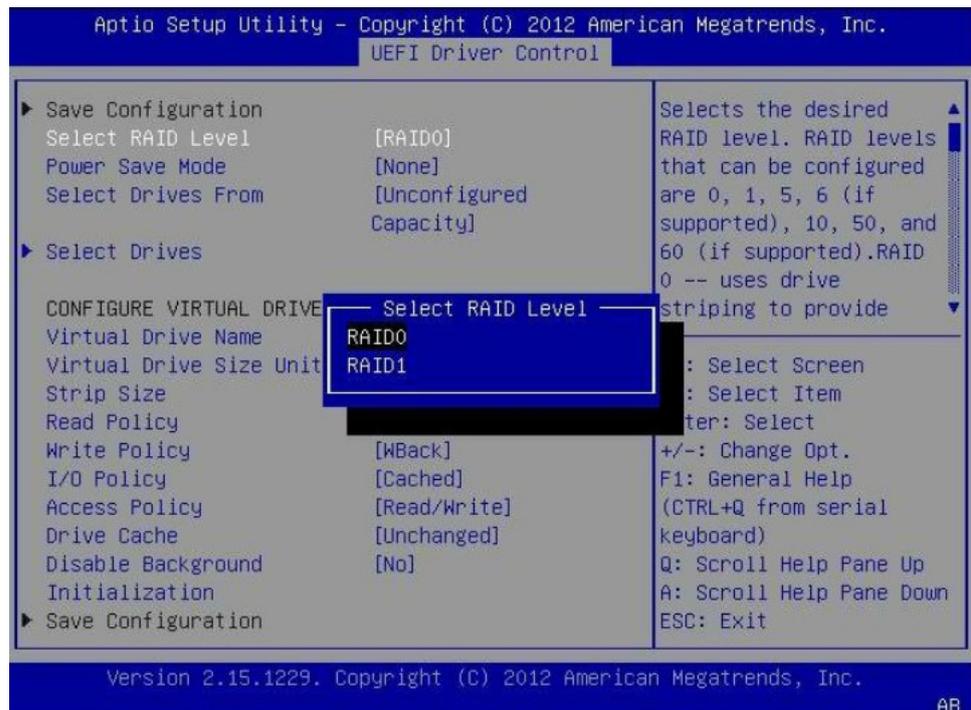
6. 上矢印キーと下矢印キーを使用して、「Create Configuration」オプションを選択し、Enter キーを押します。

「Create Configuration」メニュー画面が表示されます。

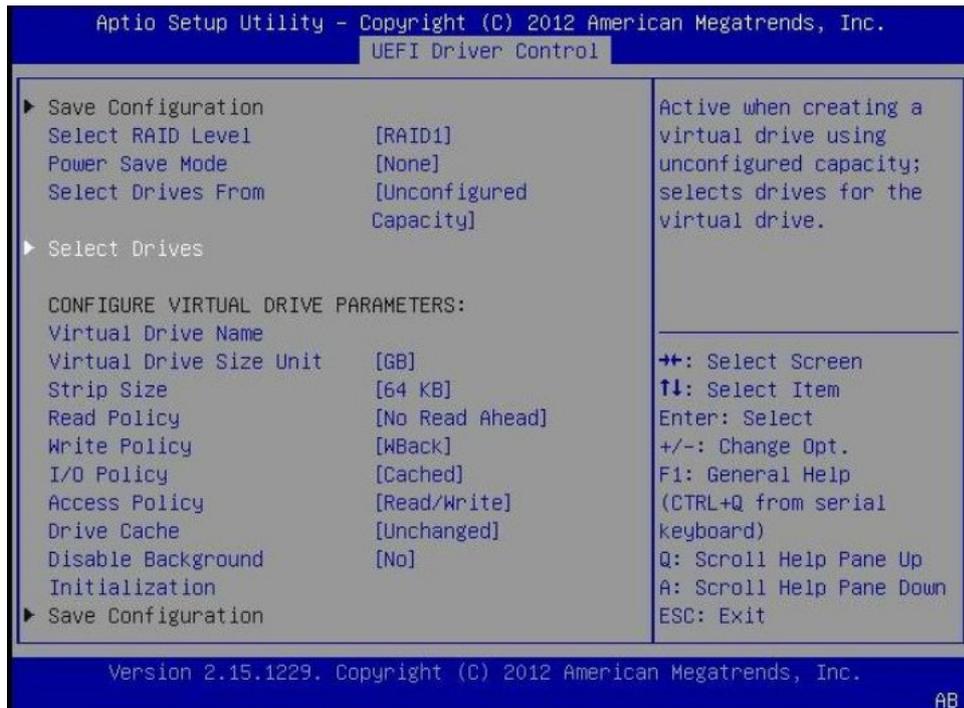


7. 上矢印キーと下矢印キーを使用して、「Select RAID Level」オプションを選択し、Enter キーを押します。

「Select RAID Level」ダイアログボックスが表示されます。

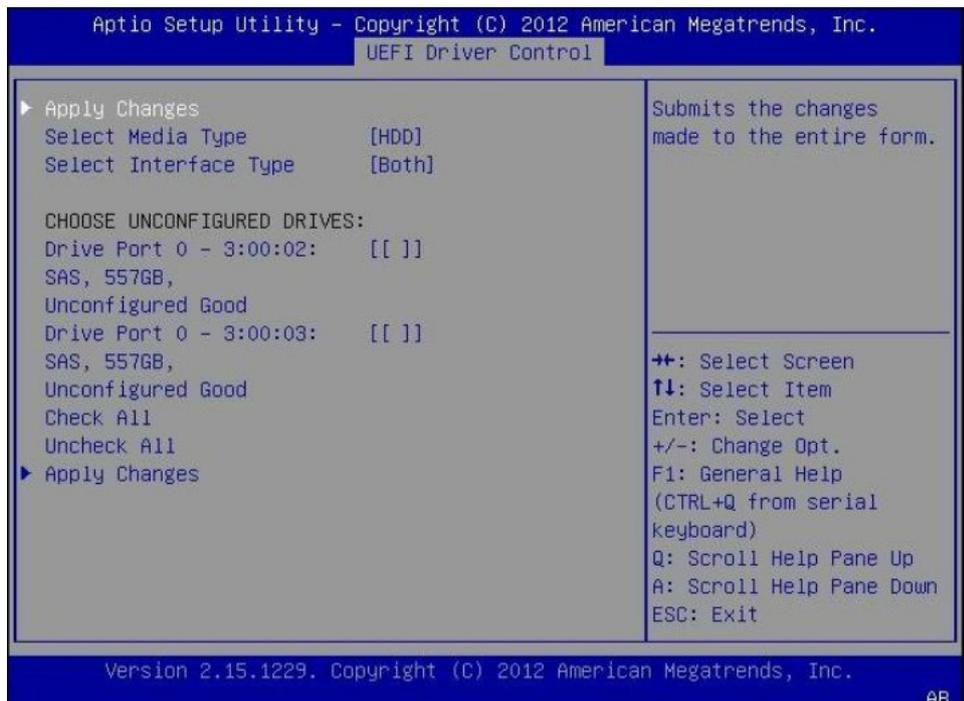


8. 上矢印キーと下矢印キーを使用して、目的の RAID レベルを選択し、Enter キーを押します。「Create Configuration」メニュー画面が表示されます。

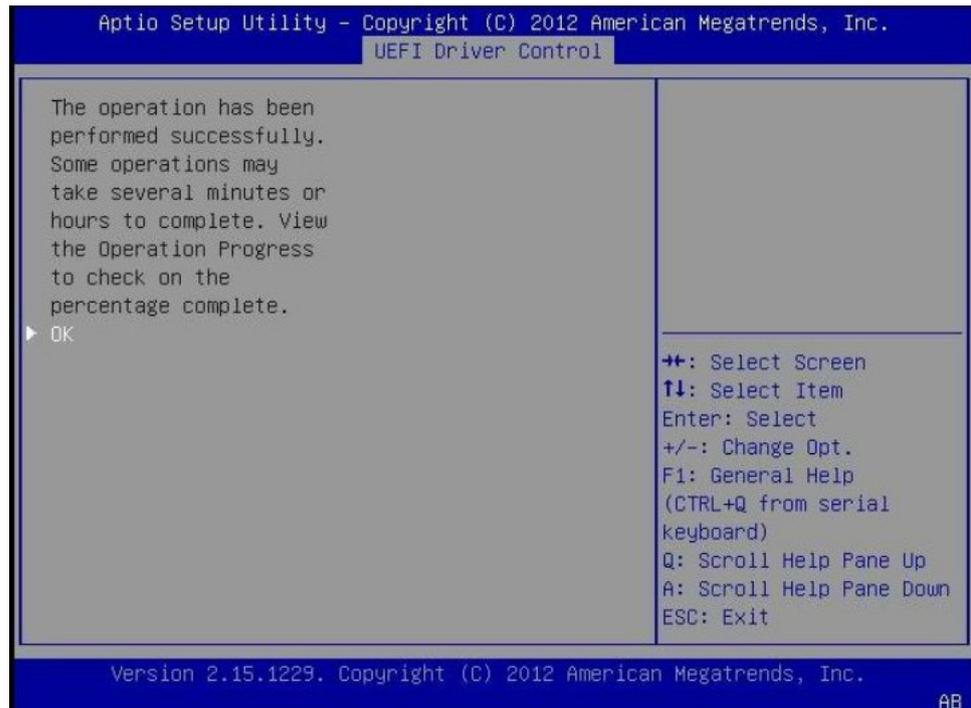


9. 上矢印キーと下矢印キーを使用して、「Select Drives」オプションを選択し、Enter キーを押します。

「Drive Selection」画面が表示されます。



10. 「Drive Selection」画面で、メディアタイプ、インタフェースタイプ、RAID 構成に含めるドライブを選択し、「Apply Changes」オプションを選択して、Enter キーを押します。RAID の「Configuration Confirmation」画面が表示されます。



11. 「OK」を選択し、Enter キーを押して、RAID の確認を承諾します。
これにより、RAID の構成が完了します。

Sun Storage 6 Gb PCIe RAID 内蔵 HBA を使用したレガシー BIOS ブートモードでの RAID の構成

RAID ボリュームの作成と RAID レベルの設定には、Oracle System Assistant アプリケーションの RAID 構成タスクを使用できます。Oracle System Assistant が使用できない場合は、HBA ファームウェアに組み込まれている BIOS RAID 構成ユーティリティを使用できます。

これらのユーティリティの使用方法については、次のセクションを参照してください。

- [105 ページの「BIOS RAID 構成ユーティリティを使用したレガシー BIOS ブートモードでの RAID ボリュームの構成」](#)
- [106 ページの「LSI WebBIOS 構成ユーティリティを使用して RAID ボリュームをブート可能にする」](#)



注記

サーバーに Sun Storage 6 Gb SAS PCIe 内蔵 HBA (SGX-SAS6-INT-Z) が取り付けられている場合は、RAID ボリュームをブート可能に設定する必要はありません。

▼ BIOS RAID 構成ユーティリティを使用したレガシー BIOS ブートモードでの RAID ボリュームの構成

BIOS RAID 構成ユーティリティは HBA ファームウェアにあります。この手順は、次のいずれかに該当する場合に使用します。

-
- 特定の OS インストール先ハードドライブ上に RAID を構成する場合で、サーバーに Oracle System Assistant が組み込まれていないか、使用しない場合。
 - オペレーティングシステムをインストールする予定のストレージドライブを使用して、RAID ボリュームレベル 5、6、50、60 を作成する場合。



注記

Oracle System Assistant は、SGX-SAS6-R-INT-Z HBA に関しては、RAID 0、RAID 1、および RAID 10 しかサポートしていません。

-
- RAID ボリュームを作成しないが、OS をインストールする目的のハードドライブが初期化されていない場合。
 1. 1 つ以上の RAID ボリューム (仮想ドライブ) を作成します。
MegaRAID SAS ソフトウェアのユーザーガイド(http://www.lsi.com/sep/Pages/oracle/sg_x_sas6-r-rem-z.aspx) に記載された手順を参照してください。
 2. 2 つ以上の仮想ドライブを作成した場合は、1 つの仮想ドライブをブート可能にします。
手順については、[106 ページの「LSI WebBIOS 構成ユーティリティを使用して RAID ボリュームをブート可能にする」](#)を参照してください。



注記

『*MegaRAID SAS Software User's Guide*』には、仮想ドライブをブート可能にするための手順は記載されていません。

▼ LSI WebBIOS 構成ユーティリティを使用して RAID ボリュームをブート可能にする

この手順は、複数の RAID ボリューム (仮想ドライブ) を作成した場合に、Sun Storage 6 Gb SAS PCIe RAID 内蔵 HBA (SGX-SAS6-R-INT-Z) が取り付けられているサーバーで BIOS 構成ユーティリティを使用して、1 つの RAID ボリュームをブート可能にするときに実行します。

次のいずれかに該当する場合、この手順を実行する必要は *ありません*。

- Oracle System Assistant を使用してボリュームを作成し、そのボリュームをブート可能にしてある場合。
- サーバーに Sun Storage 6 Gb SAS PCIe 内蔵 HBA (SGX-SAS6-INT-Z) が取り付けられている場合。
- LSI SAS2 BIOS 構成ユーティリティを使用して仮想ドライブを 1 つだけ作成してある場合。
この手順を始める前に、BIOS 構成ユーティリティを使用して Sun Storage 6 Gb SAS PCIe RAID 内蔵 HBA (SGX-SAS6-R-INT-Z) 上に最低 1 つの仮想ドライブ、すなわち RAID ボリュームを作成してください ([105 ページの「BIOS RAID 構成ユーティリティを使用したレガシー BIOS ブートモードでの RAID ボリュームの構成」](#)参照)。
 1. サーバーをリセットするか、サーバーの電源を投入します。

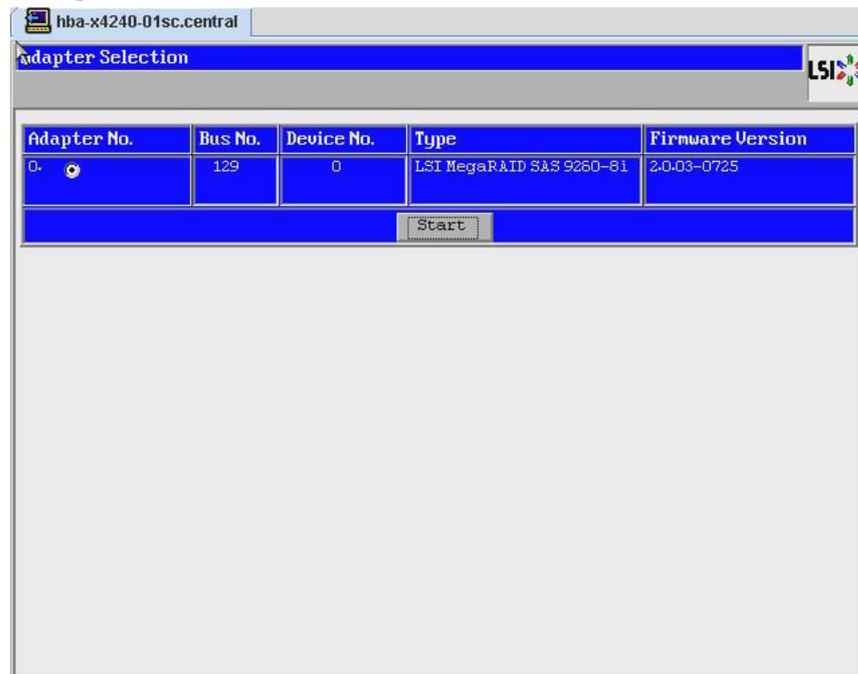
たとえば、サーバーをリセットするには、次の手順を実行します。

- ローカルサーバーのフロントパネルにある電源ボタンを (約 1 秒間) 押してサーバーの電源を切り、もう一度電源ボタンを押してサーバーの電源を入れます。
- **Oracle ILOM Web** インタフェースから「Host Management」>「Power Control」を選択し、次に「Select Action」リストボックスから「Reset」を選択します。
- **Oracle ILOM CLI** で次のように入力します: **reset /System**

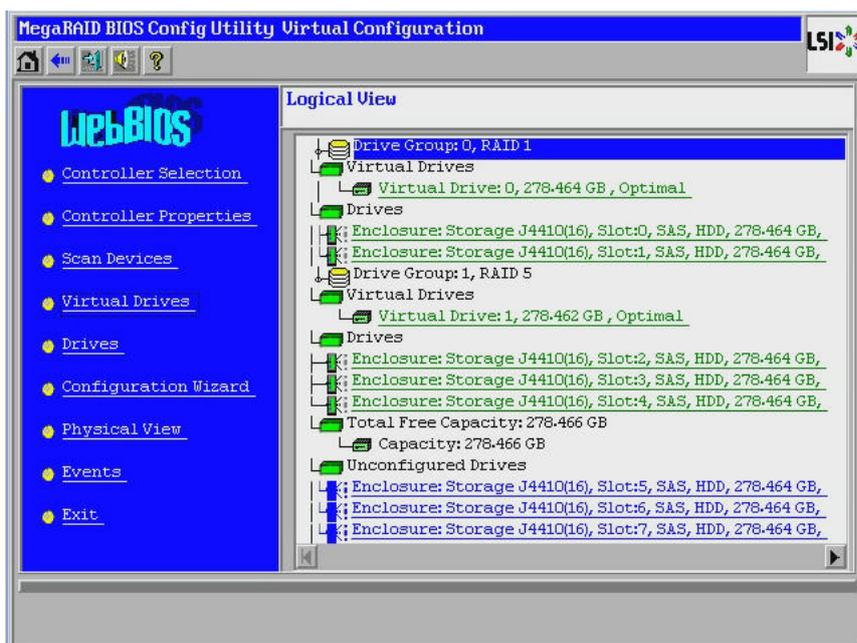
BIOS 画面が表示されます。

2. 「Press <Ctrl><H> for WebBIOS...」というプロンプトが表示されたら、すぐに Ctrl+H キーを押して LSI MegaRAID ユーティリティにアクセスします。

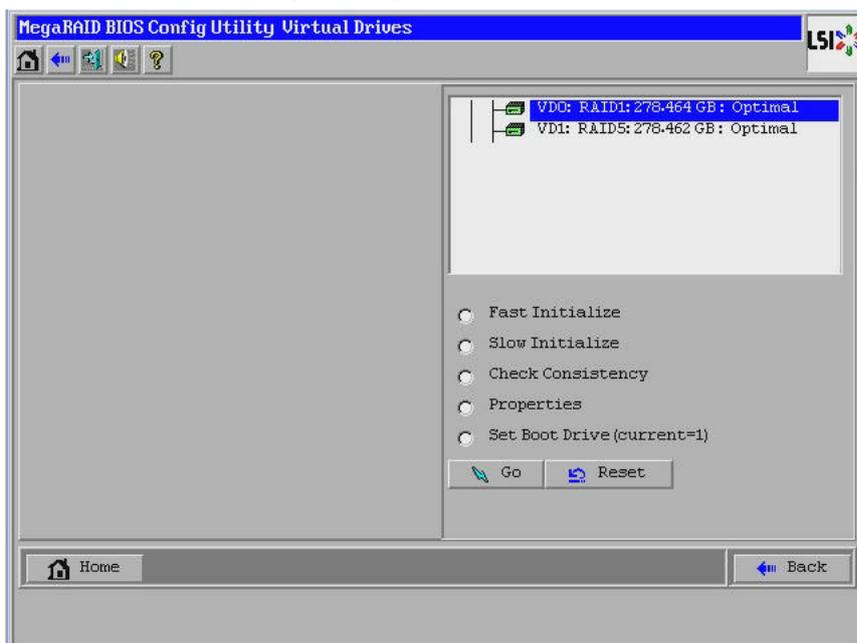
「Adapter Selection」画面が表示されます。



3. 「Adapter Selection」画面で「Start」をクリックします。
LSI MegaRAID BIOS Config ユーティリティの「Virtual Configuration」画面が表示されます。



4. 「Virtual Drives」をクリックします。
「Virtual Drives」画面が表示されます。



5. ブート可能にする仮想ドライブを選択します。
6. 「Set Boot Drive」をクリックして「Go」をクリックします。
このタスクの実行方法の詳細は、LSI のMegaRAID SAS ソフトウェアのユーザーガイド(http://www.lsi.com/sep/Pages/oracle/sg_x_sas6-r-rem-z.aspx) を参照してください。

インストール済みの Oracle Solaris 11 オペレーティングシステムの構成

これらのセクションでは、サーバーにインストール済みの Oracle Solaris 11 オペレーティングシステム (OS) の構成方法について説明します。インストール済みの OS イメージには、サーバーに必要なドライバがすべて組み込まれています。



注記

インストール済み Oracle Solaris オペレーティングシステムのサポートされているバージョンに関する最新情報については、<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=SunServerX3-2L> にある『Sun Server X3-2L プロダクトノート』を参照してください。

説明	リンク
インストール済みオペレーティングシステム上での RAID の制限を確認します。	109 ページの「インストール済みのオペレーティングシステム上での RAID の制限」
オペレーティングシステムのオプションを確認します。	110 ページの「オペレーティングシステムのオプション」
構成時に必要な情報を収集します。	110 ページの「Oracle Solaris の構成ワークシート」
インストール済みの Oracle Solaris オペレーティングシステムを構成します。	113 ページの「インストール済みの Oracle Solaris 11 オペレーティングシステムの構成」
必要に応じて、Oracle Solaris オペレーティングシステムのドキュメントを確認します。	115 ページの「Oracle Solaris 11 オペレーティングシステムのドキュメント」

関連情報

- ・ [9 ページの「設置手順の概要」](#)

インストール済みのオペレーティングシステム上での RAID の制限

サーバーでは RAID 構成を選択できます。ただし、Oracle Solaris のインストール済みイメージでは、非 RAID 構成のみ可能です。RAID 構成が必要な場合は、サーバー上で RAID を構成してから、目的の RAID 構成で Oracle Solaris OS (または他の OS) の新規インストールを実行します。

関連情報

- 11 ページの「サーバーの機能とコンポーネント」

オペレーティングシステムのオプション

サーバーでは、複数の異なるオペレーティングシステムをサポートしています。したがって、サーバー上で Oracle Solaris オペレーティングシステムのインストール済みバージョンを必ず使用する必要はありません。何らかの理由で Oracle Solaris オペレーティングシステムまたは別のオペレーティングシステム (Linux、Oracle VM、Windows、VMware ESXi など) を新規インストールまたは新しいバージョンをインストールする場合、それがサポートされているバージョンであれば、インストールできます。サポートされているオペレーティングシステムのリストについては、<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=SunServerX3-2L> にある『Sun Server X3-2L ブロダクトノート』を参照してください。

サポートされているオペレーティングシステムのインストール手順については、次を参照してください。

- Oracle Solaris の場合は、『Oracle Solaris インストール』の「Oracle Solaris オペレーティングシステムのインストール」を参照してください。
- Oracle VM の場合は、『Oracle VM インストール』の「Oracle VM のインストール」を参照してください。
- Oracle Linux、Red Hat Enterprise Linux、および SUSE Enterprise Linux Server の場合は、『Linux インストール』の「Linux オペレーティングシステムのインストール」を参照してください。
- Windows Server 2008 の場合は、『Windows インストール』の「Windows Server 2008 のインストール」を参照してください。
- VMware ESXi の場合は、『VMware ESXi インストール』の「VMware ESXi のインストール」を参照してください。

Oracle Solaris の構成ワークシート

オペレーティングシステムの構成を開始する前に、次の表に示す構成ワークシートを用いて必要な情報を収集してください。使用するシステムのアプリケーションに関連する情報のみを収集してください。

表9.1 Oracle Solaris オペレーティングシステム構成ワークシート

インストール情報	説明または例	回答: デフォルト (*)
言語	OS で使用可能な言語のリストから選択します。	英語*
ロケール	使用可能なロケールのリストから地理的地域を選択します。	
端末	使用可能な端末タイプのリストから、使用している端末のタイプを選択します。	
ネットワーク接続	システムはネットワークに接続されていますか?	• ネットワークに接続されている

インストール情報	説明または例	回答: デフォルト (*)
DHCP	ネットワークインタフェースの構成に、動的ホスト構成プロトコル (DHCP) を使用できますか？	<ul style="list-style-type: none"> • ネットワークに接続されていない* • はい • いいえ*
DHCP を使用しない場合は、ネットワークアドレスを記入します。	<p data-bbox="400 461 523 495">IP アドレス</p> <p data-bbox="608 461 1082 528">DHCP を使用しない場合は、システムの IP アドレスを入力します。</p> <p data-bbox="608 562 826 595">例: 192.168.100.1</p>	
サブネット	<p data-bbox="608 613 1082 680">DHCP を使用しない場合、システムはサブネットの一部ですか？</p> <p data-bbox="608 714 1082 781">システムがサブネットの一部である場合は、サブネットのネットマスクを入力します。</p> <p data-bbox="608 815 842 848">例: 10.255.255.255</p>	
IPv6	このマシンで IPv6 を有効にしますか？	<ul style="list-style-type: none"> • はい • いいえ*
ホスト名	システムのホスト名を選択します。	
Kerberos	<p data-bbox="608 1016 1082 1084">このマシンで Kerberos セキュリティを構成しますか？</p> <p data-bbox="608 1117 1038 1151">有効にする場合、この情報を収集します。</p> <p data-bbox="608 1184 794 1218">デフォルトレルム:</p> <p data-bbox="608 1252 756 1285">管理サーバー:</p> <p data-bbox="608 1319 732 1352">第 1 KDC:</p> <p data-bbox="608 1386 879 1420">(省略可能) 追加のKDC:</p>	<ul style="list-style-type: none"> • はい • いいえ*
ネームサービス	<p data-bbox="400 1420 560 1453">ネームサービス</p> <p data-bbox="608 1420 1082 1487">該当する場合は、このシステムで使うネームサービスを入力してください。</p>	<ul style="list-style-type: none"> • NIS+ • NIS • DNS • LDAP • なし*
ドメイン名	システムが含まれているドメインの名前を入力します。	DNS または NIS
NIS+ および NIS	NIS+ または NIS を選択した場合、ネームサーバーを指定しますか？ または、インストールプログラムに自動検出させますか？	<ul style="list-style-type: none"> • 指定する • 自動的に指定* <p data-bbox="1110 1852 1342 1886">NIS を選択した場合:</p> <ul style="list-style-type: none"> • NIS ドメインを指定する

インストール情報	説明または例	回答: デフォルト (*)
DNS	<p><i>DNS</i> を選択した場合、DNS サーバーの IP アドレスを入力します。少なくとも 1 つ以上の IP アドレスを入力する必要があります。最大で 3 つのアドレスを入力できます。</p> <p>また、DNS クエリーを行う際に検索する DNS ドメインのリストを入力することもできます。</p> <p>検索ドメイン:</p> <p>検索ドメイン:</p> <p>検索ドメイン:</p>	<ul style="list-style-type: none"> • NIS サーバーを指定するか検索するかを指定する
LDAP	<p><i>LDAP</i> を選択した場合、LDAP プロファイルに関する次の情報を入力します。</p> <p>プロファイル名:</p> <p>プロファイルサーバー:</p> <p>LDAP プロファイルにプロキシ認証レベルを指定する場合、次の情報を収集します。</p> <p>プロキシバインド識別名:</p> <p>プロキシバインドパスワード:</p>	
デフォルトルート	<p>デフォルトルート IP アドレスを指定しますか? または、OS インストールプログラムに自動検出させますか?</p> <p>デフォルトルートは、2 つの物理ネットワーク間でトラフィックを転送するブリッジを提供します。IP アドレスは、ネットワーク上の各ホストを識別する一意の数字です。</p> <p>この場合、次のいずれかを選択できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • IP アドレスを指定することができます。指定された IP アドレスを使用して、<code>/etc/defaultrouter</code> ファイルが作成されます。システムのリブート時に、指定した IP アドレスがデフォルトのルートになります。 • OS インストールプログラムに IP アドレスを自動検出させることができます。ただし、その場合は、システムがルーターのあるサブネット上に存在していなければなりません。 	<ul style="list-style-type: none"> • 指定する • 検出する • なし*

インストール情報	説明または例	回答: デフォルト (*)
	<p>このルーターは、ルーター発見プロトコルであるインターネット制御メッセージプロトコル (Internet Control Message Protocol, ICMP) を使用して自身を通知します。コマンド行インタフェースを使用する場合は、システムのブート時に IP アドレスが自動的に検出されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ルーターを使用していないか、現時点ではソフトウェアに IP アドレスを検出させたくない場合には、「None」を選択することもできます。ソフトウェアは、リブート時に IP アドレスを自動的に検出しようとします。 	
タイムゾーン	デフォルトのタイムゾーンを指定する方法を指定します。	<ul style="list-style-type: none"> 地理的地域* GM からの時差 タイムゾーンファイル
root パスワード	システムの root パスワードを選択します。	

関連情報

- 113 ページの「インストール済みの Oracle Solaris 11 オペレーティングシステムの構成」
- 115 ページの「Oracle Solaris 11 オペレーティングシステムのドキュメント」

▼ インストール済みの Oracle Solaris 11 オペレーティングシステムの構成

構成ワークシートを完成したら、次の手順に従って、インストール済みの Oracle Solaris 11 オペレーティングシステムを構成します。

- Oracle ILOM にログインしていない場合は、シリアル接続を介してローカルにログインするか、または Ethernet 接続を介してリモートからログインします。
[63 ページの「Oracle ILOM への接続」](#)を参照してください。
- 以下の手順に従って、サーバーの電源を再投入するか、サーバーを再起動します。

- サーバーの電源を入れるには、次のいずれかの方法を使用します:
 - Oracle ILOM Web** インタフェースの「**System Informaion**」 > 「**Summary**」ページで、「Actions」パネルの「Power Off」および「Turn On」ボタンを使用して、サーバーの電源状態のオフとオンを切り替えます。
 - Oracle ILOM CLI** で、プロンプトに次のコマンドを入力します。

```
-> start /System
```

プロンプトが表示されたら、「y」と入力して確定します。

```
Are you sure you want to start /System (y/n)? y
```

```
Starting /System
```

- サーバーを再起動するには、次のいずれかの方法を使用します:

-
- **Oracle ILOM Web** インタフェースで、「Host Management」>「Power Control」をクリックし、「Select Action」リストボックスで「Reset」をクリックします。
 - **Oracle ILOM CLI** で、プロンプトに次のコマンドを入力します。

```
-> reset /System
```

プロンプトが表示されたら、「y」と入力して確定します。

```
Are you sure you want to reset /System (y/n)? y
```

```
Performing hard reset on /System
```

サーバーがブートプロセスを開始します。

3. Oracle ILOM CLI からホストコンソールを起動するには、CLI プロンプトに次のコマンドを入力します。

```
-> start /HOST/console
```

```
Are you sure you want to start /HOST/console (y/n)? y
```

```
Serial console started.
```

サーバーがブートし、「GRUB」メニューが表示されます。

```
GNU GRUB Version 0.97 (607K lower / 2087168K)
```

```
s11_2011.11_a - Serial Port (ttya)
```

```
s11_2011.11_a - Graphics Adapter
```

上下の矢印キーを使用して、エントリを選択して強調表示された状態にします。選択した OS をブートするには Enter キーを、ブート前にコマンドを編集するには「e」を、コマンド行を開始するには「c」を押します。「GRUB」メニューで、表示の出力先を引き続きシリアルポートにするかどうか、または表示の出力先をビデオポートに接続されたデバイスにするかどうかを選択できます。



注記

デフォルトでは、システムは出力をシリアルポートに出力します。「GRUB」メニューでオプションを選択しないと、10 秒後に「GRUB」メニューが使用できなくなり、システムは出力先をシリアルポートにしたまま処理を続行します。

-
4. 上下の矢印キーを使用して、表示オプションを選択します。Enter キーを押すと、選択した OS がブートします。

- 出力をシリアルポートに表示するには、次のオプションを選択します:

```
s11_2011.11_a - Serial Port (tty)
```

- 出力をビデオポートに表示するには、次のオプションを選択します。

```
s11_2011.11_a - Graphics Adapter
```

表示をビデオポートに出力することを選択した場合、デバイスをサーバーの VGA コネクタに接続し、入力デバイス (USB キーボードまたはマウス) に接続してから、そのデバ

イスから構成を完了する必要があります。デバイスとサーバーの接続についての詳細は、57 ページの「サーバーの配線」を参照してください。

5. Oracle Solaris 11 インストーラの画面に表示されるプロンプトに従い、ソフトウェアを構成します。
プロンプトに従ってシステムとネットワークの情報を入力するには、110 ページの「Oracle Solaris の構成ワークシート」で収集した情報を使用してください。
サーバーへのネットワーク情報の割り当てに選択した方法 (DHCP または静的 IP アドレス) によって、表示される画面が異なります。
システム構成情報を入力すると、サーバーのブートプロセスが完了し、Oracle Solaris ログインプロンプトが表示されます。

関連情報

- 63 ページの「Oracle ILOM への接続」
- 57 ページの「サーバーの配線」
- 110 ページの「Oracle Solaris の構成ワークシート」

Oracle Solaris 11 オペレーティングシステムのドキュメント

Oracle Solaris 11 オペレーティングシステムのドキュメントは、Oracle ドキュメント Web サイト (http://docs.oracle.com/cd/E23824_01/index.html) で入手できます。

Oracle Solaris 11 Information Library で次のドキュメントを見つけます。このドキュメントに記載されている x86 システムに固有の手順に従ってください。

- インストール情報については、これらのドキュメントを参照してください。
 - 『Oracle Solaris 11 システムのインストール』
 - 『カスタム Oracle Solaris 11 インストールイメージの作成』
- システムのアップグレードについては、『Oracle Solaris 11 ソフトウェアパッケージの追加および更新』を参照してください。

特にサーバーに適用される Oracle Solaris 11 に関するパッチおよびその他の最新情報については、<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=SunServerX3-2L> にある『Sun Server X3-2L プロダクトノート』を参照してください。

Oracle Solaris 11 のパッチおよび手順については、次の場所にある My Oracle Support の Web サイトにアクセスし、該当するページを参照してください: <http://support.oracle.com>

Oracle Solaris 11 のドキュメントは、Oracle Solaris オペレーティングシステムソフトウェアに同梱の Oracle Solaris Documentation DVD にも収録されています。

関連情報

- 110 ページの「Oracle Solaris の構成ワークシート」
- 113 ページの「インストール済みの Oracle Solaris 11 オペレーティングシステムの構成」

インストール済みの Oracle Linux オペレーティングシステムの構成

これらのセクションでは、サーバーにインストール済みの Oracle Linux オペレーティングシステム (OS) の構成方法について説明します (注文済みの場合)。インストール済みの OS イメージには、サーバーに必要なドライバがすべて組み込まれています。



注記

インストール済み Oracle Linux オペレーティングシステムの使用可能なバージョンに関する最新情報については、<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=SunServerX3-2L> にある『Sun Server X3-2L プロダクトノート』を参照してください。

説明	リンク
使用しているサーバー環境の Oracle Linux 構成ワークシートに記入します。	117 ページの「Oracle Linux 構成ワークシート」
インストール済みの Oracle Linux OS を構成します。	118 ページの「インストール済みの Oracle Linux オペレーティングシステムの構成」
Oracle Linux OS を更新し登録します。	120 ページの「Linux OS の登録と更新」

関連情報

- ・ [9 ページの「設置手順の概要」](#)

Oracle Linux 構成ワークシート

次の情報を収集し、構成プロセスを始めるためのために準備します。自分の組織とネットワーク環境に当てはまる情報だけを収集する必要があります。

表10.1 Oracle Linux オペレーティングシステム構成ワークシート

必要なインストール情報	説明	回答
Oracle Linux の root パスワード	使用する root パスワードを選択して出荷時デフォルトのパスワードを置き換えます。文字および長さには制限はありません。	

必要なインストール情報	説明	回答
ネットワークインターフェース	ネットワークに接続するサーバー (eth#) のインタフェースを選択します。(Linux を稼働させたら、 ifconfig -a コマンドを使用してサーバーのネットワークポートを識別しやすくなります。)	
ネットワーク構成 (DHCP を使用しない場合)	サーバーの IP アドレスを入力します。 例: 172.16.9.1 サーバーがサブネットの一部である場合は、サブネットのネットマスクを入力します。 例: 255.255.0.0 サーバーにゲートウェイを介してアクセスする場合は、ゲートウェイの IP アドレスを指定します。 ドメイン名サーバー (DNS) の IP アドレスを指定します。必要な DNS は 1 つだけです。	

関連情報

- [118 ページの「インストール済みの Oracle Linux オペレーティングシステムの構成」](#)

▼ インストール済みの Oracle Linux オペレーティングシステムの構成

構成ワークシートを完成したら、次の手順に従って、インストール済みの Oracle Linux 11 オペレーティングシステムを構成します。

1. Oracle ILOM にログインしていない場合は、シリアル接続を介してローカルにログインするか、または Ethernet 接続を介してリモートからログインします。
[63 ページの「Oracle ILOM への接続」](#)を参照してください。
2. 以下の手順に従って、サーバーの電源を再投入するか、サーバーを再起動します。

- サーバーの電源を入れるには、次のいずれかを実行します。
 - **Oracle ILOM Web** インタフェースの「**System Informaion**」 > 「**Summary**」ページで、「Actions」パネルの「Power Off」および「Turn On」ボタンを使用して、サーバーの電源状態のオフとオンを切り替えます。
 - **Oracle ILOM CLI** で、プロンプトに次のコマンドを入力します。

```
-> start /System
```

プロンプトが表示されたら、「y」と入力して確定します。

```
Are you sure you want to start /System (y/n)? y
```

```
Starting /System
```

- サーバーを再起動するには、次のいずれかを実行します。
 - **Oracle ILOM Web** インタフェースで、「Host Management」 > 「Power Control」をクリックし、「Select Action」リストボックスで「Reset」をクリックします。

- **Oracle ILOM CLI** で、プロンプトに次のコマンドを入力します。

```
-> reset /System
```

プロンプトが表示されたら、「y」と入力して確定します。

```
Are you sure you want to reset /System (y/n)? y
```

```
Performing hard reset on /System
```

サーバーがブートプロセスを開始します。

3. 次のいずれかの方法を使用してホストコンソールを起動します。
Oracle ILOM Web インタフェースで、「Remote Control」>「Launch Remote Console」をクリックします。
Oracle ILOM CLI で、CLI プロンプトに次のコマンドを入力します。
-> **start /HOST/console**
プロンプトが表示されたら、「y」と入力して確定します。
Are you sure you want to start /HOST/console (y/n)? y
Serial console started.
4. サーバーがホストのブートプロセスを開始します。サーバーがブートすると、「GRUB」メニューが表示されます (下の例を参照)。一時停止するには Enter 以外のキーを押し、そうしない場合は 5 秒後に強調表示された選択が使用されます。

```
GNU GRUB Version 0.97 (607K lower / 2082932K)
Oracle Linux Server-uek (2.6.39-200.24.1.el6uek.x86_64)
Oracle Linux Server (2.6.32-279.el6.x86_64)
```

上下の矢印キーを使用して、表示オプションを選択します。選択した OS をブートするには Enter を、ブート前にコマンドを編集するには「e」を、ブート前にカーネル引数を変更するには「a」を、コマンド行を開始するには「c」を押しします。
強調表示されたエントリが 5 秒後に自動的にブートされます。

5. 「GRUB」メニューで、上下の矢印キーを使用してインストールオプションを選択してから、Enter を押しします。次のオプションがあります。
 - Oracle Unbreakable Enterprise Kernel。例:

```
Oracle Linux Server-uek (2.6.39-200.24.1.el6uek.x86_64)
```
 - Red Hat 互換カーネル。例:

```
Oracle Linux Server-uek (2.6.32-279.el6.x86_64)
```



注記

Oracle では、すべてのエンタープライズアプリケーションで、Oracle Linux と Unbreakable Enterprise Kernel を使用することをお勧めします。

6. インストールオプションを選択したあと、Oracle Linux が起動し、Linux システムのログインが表示されます。例:

systemname login:

初回ログインの場合は、**root** アカウントと出荷時デフォルトのパスワード (**root**) を使用します。

ログインしたあと、標準の Linux ツールを使用してサーバーの構成を完了します。次のタスクが含まれます。

- セキュリティーのため、**root** の出荷時デフォルトのパスワードを変更します
 - ネットワークのサーバーを構成します (DHCP を使用しない場合)。117 ページの「Oracle Linux 構成ワークシート」を参照してください。
 - 必要に応じて、インターネットアクセス用のプロキシを構成します。
 - サーバーを登録し更新します。120 ページの「Linux OS の登録と更新」を参照してください。
 - 目的のパッケージをインストールします。
7. 構成が完了したら、次のいずれかの方法を使用してコンソールセッションを終了します。
- Oracle ILOM Web インタフェースで「Remote Console」ウィンドウを閉じて、Oracle ILOM からログアウトします。
 - Oracle ILOM CLI で、Esc (Shift + 9) を押してシリアルリダイレクトセッションを終了し、Oracle ILOM からログアウトします。

▼ Linux OS の登録と更新

Unbreakable Linux Network (ULN) は、Oracle Linux サポートのサブスクリプションのための包括的なリソースであり、Linux ソフトウェアのパッチ、更新、および修正と、更新およびサポートポリシーに関する情報へのアクセスを提供します。アクティブな Oracle Linux サポートのサブスクリプションを持つ、Oracle のライセンス所有のお客様の場合は、Oracle Linux カスタムサポート ID (CSI) 番号を受け取ります。この番号を使用して、サーバーを ULN に登録します。登録には CSI 番号と有効な電子メールアドレスが必要です。

1. まだアカウントがない場合は、ULN アカウントを作成します。電子メールアドレスと CSI を使用し、パスワードを作成する必要があります。今後は、電子メールアドレスとパスワードを使用するだけで ULN にログインできます。

<http://linux.oracle.com/register>

2. ULN アカウントを作成したら、端末ウィンドウまたはコマンド行で、root ユーザーとしてサーバーで下のコマンドを実行します。

uln_register

`uln_register` ウィザードがマシン情報を収集して Oracle にアップロードします。

上のコマンドを実行すると、デフォルトのチャンネル `ol6_<arch>_latest` が選択されます。`_latest` チャンネルは、ディストリビューションのすべてのパッケージの最新の使用可能な RPM を提供します (`_patch ch` チャンネルでも提供される訂正を含む)。登録後に、Web インタフェースを使用してほかのチャンネルにサブスクリプションすることができます。

関連情報

- 登録プロセスの詳細については、次を参照してください。

<http://www.oracle.com/technetwork/topics/linux/yum-repository-setup-085606.html>

- Oracle Unbreakable Linux Network の詳細については、次を参照してください。

<http://linux.oracle.com/>

Oracle Linux オペレーティングシステムのドキュメント

Oracle Linux オペレーティングシステムのドキュメントは、http://docs.oracle.com/cd/E37670_01/index.html の Oracle ドキュメント Web サイトから入手できます。

インストール済みの Oracle VM 3.x ソフトウェアの構成

これらのセクションでは、注文済みの場合、サーバーにインストール済みの Oracle VM ソフトウェアの構成方法について説明します。インストール済みイメージには、サーバーに必要なドライバがすべて組み込まれています。



注記

インストール済み Oracle VM のサポートされているバージョンに関する最新情報については、<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=SunServerX3-2L> にある『Sun Server X3-2L プロダクトノート』を参照してください。

説明	リンク
インストール済み Oracle VM Server と Oracle VM Manager の互換性要件について学習します。	123 ページの「インストール済みの Oracle VM Server と Oracle VM Manager の互換性要件」
必要な構成情報を収集します。	124 ページの「Oracle VM Server 構成ワークシート」
インストール済みの Oracle VM ソフトウェアを構成します。	124 ページの「インストール済み Oracle VM の構成」
Oracle VM の使用を開始します。	128 ページの「Oracle VM のドキュメント」

関連情報

- ・ [9 ページの「設置手順の概要」](#)

インストール済みの Oracle VM Server と Oracle VM Manager の互換性要件

システムにインストール済みの Oracle VM を使用する場合は、Oracle VM インフラストラクチャの管理に使用する Oracle VM Manager のバージョンと互換性があることを確認する必要があります。互換性を確保する必要がある場合は、使用している Oracle VM Server または Oracle VM Manager をアップグレードして、両者のバージョンを一致させてください。

Oracle VM Manager ソフトウェアのアップグレードについては、『Oracle VM Installation and Upgrade Guide』を参照してください。Oracle VM のドキュメントは次の Web サイトで入手できます: <http://www.oracle.com/technetwork/documentation/vm-096300.html>

Oracle VM Server 構成ワークシート

Oracle VM ソフトウェアの構成を開始する前に、このセクションのワークシートを使用して、インストール済みの Oracle VM ソフトウェアの Oracle VM Server 部分を構成するために必要な情報を収集してください。

表11.1 Oracle VM Server 構成用ワークシート

構成情報	説明または例	回答
Oracle VM Server パスワード	root	root パスワードを選択します。文字および長さに制限はありません。
	Oracle VM エージェント	Oracle VM エージェントのパスワードを選択します。パスワードは 6 文字以上である必要があります。
ネットワークインターフェース	サーバーの管理に使用するインターフェースを入力します。	
ネットワーク構成	静的 IP アドレス	サーバーの IP アドレスを入力します。静的 IP アドレスは必須です。 例: 172.16.9.1
	ネットマスク	サーバーがサブネットの一部である場合は、サブネットのネットマスクを入力します。 例: 19.255.255.0
	ゲートウェイ	サーバーにゲートウェイを通じてアクセスする場合は、ゲートウェイの IP アドレスを指定します。
	DNS サーバー	ドメイン名サーバー (DNS) の IP アドレスを指定します。(ちょうど) 1 つの DNS が必要です。
ホスト名	サーバーの完全修飾ドメイン名を入力します。 例: myhost.us.example.com	

▼ インストール済み Oracle VM の構成

これらの手順では、サーバーにインストール済みの Oracle VM Server を構成する方法についてのみ説明します。



注記

Oracle VM には、Oracle VM Manager など、別のコンポーネントもあり、仮想マシン環境をサポートするには、これらのコンポーネントがインストールされているか、すでに稼働している必要があります。

-
1. ILOM にログインしていない場合は、ローカルでシリアル接続を介してログインするか、リモートで Ethernet 接続を使用してログインします。
を参照してください。

2. 以下の手順に従って、サーバーの電源を再投入するか、サーバーを再起動します。

- サーバーの電源を入れるには、次のいずれかを実行します。
 - **Oracle ILOM Web** インタフェースの「**System Information**」 > 「**Summary**」ページで、「Power State」 > 「Turn On」をクリックします。
 - **Oracle ILOM CLI** で、プロンプトから次のコマンドを入力します。

```
-> start /System
```

次のプロンプトが表示されたら、「y」と入力して確定します。

```
Are you sure you want to start /System (y/n)? y
```

```
Starting /System
```

- サーバーを再起動するには、次のいずれかを実行します。
 - **Oracle ILOM Web** インタフェースで、「Host Management」 > 「Power Control」をクリックし、「Select Action」リストボックスで「Reset」をクリックします。
 - **Oracle ILOM CLI** で、プロンプトから次のコマンドを入力します。

```
-> reset /System
```

次のプロンプトが表示されたら、「y」と入力して確定します。

```
Are you sure you want to reset /System (y/n)? y
```

```
Performing hard reset on /System
```

サーバーがブートプロセスを開始します。

3. 次のいずれかの方法を使用してリモートコンソールアプリケーションを起動します。
Oracle ILOM Web インタフェースで、「Remote Control」 > 「Launch Remote Console」をクリックします。

Oracle ILOM CLI で、CLI プロンプトに次のコマンドを入力します。

```
-> start /HOST/console
```

プロンプトが表示されたら、「y」と入力して確定します。

```
Are you sure you want to start /HOST/console (y/n)? y
```

```
Serial console started.
```

サーバーがブートし、「GRUB」メニューが表示されます。

「GRUB」メニューで、表示の出力先を引き続きシリアルポートにするかどうか、または表示の出力先をビデオポートに接続されたデバイスにするかどうかを選択できます。

```
GNU GRUB version 0.97 (613K lower / 2087424K upper memory)

Oracle VM Server-ovs (xen-4.0.0 2.6.32.21-41ovs)
Oracle VM Server-ovs serial console (xen-4.0.0 2.6.32.21-41ovs)

Use the ↑ and ↓ keys to select which entry is highlighted.
Press enter to boot the selected OS, 'e' to edit the
commands before booting, 'a' to modify the kernel arguments
before booting, or 'c' for a command-line.
```



注記

「GRUB」メニューで一時停止するには、Enter 以外の任意のキーを押します。次に、使用するオプションを選択し、Enter キーを押して続行します。

4. 「GRUB」メニューで、上下の矢印キーを使用して表示オプションを選択してから、Enter を押します。次のオプションがあります。



注記

メニューに 2 つの選択肢、つまり、通常ブートとシリアルコンソール対応のブートが表示されます。

- ・ デフォルトのオプションを表示するには、リストの最初のオプションを選択し、Enter を押します。

```
Oracle VM Server - ovs (xen-4.0.0 2.6.32.21-41ovs)
```

- ・ 出力をシリアルポートに表示するには、リストの 2 番目のオプションを選択し、Enter を押します。

```
Oracle VM Server - ovs serial console (xen-4.0.0 2.6.32.21-41ovs)
```

5. 構成プロセスが進み、次の画面が表示されます。

```
Starting OVM console server: [ OK ]
Starting OVM ovmwatch services: [ OK ]
Starting ovs-agent: Starting ovs-agent services:
OK ]
Configuring Oracle VM...
Enter new root password:
Confirm password:
Enter new Oracle VM Agent password:
Confirm password:
Configuring network.
```

- 画面をスクロールダウンして、**root** のパスワードと **Oracle VM Agent** のパスワードを設定および確認します。



注記

root および **Oracle VM Agent** のパスワードの入力を求めるプロンプトは、Oracle VM Server を最初にブートしたときだけ表示されます。

- プロンプトに従ってオンボードのネットワークインタフェースコントローラ (NIC) を選択し、ネットワークに関する他の必須情報を構成および入力します。

```
This tool is used to select the NIC used by the OVM Manager.
You can exit at any time by pressing CTRL-C.

Here's the list of current available network interfaces.
eth0 eth1 eth2 eth3

Please select interface(s) to be used for OVM management.
These interfaces will be configured for redundancy.
eth1
```



注記

ネットワークインタフェース eth2 および eth3 は Ethernet ポート NET2 および NET3 に対応しています。これらは、シングルプロセッサシステムでは機能しません。

- すべての構成内容が正しければ、「**y**」と入力し、Enter キーを押して設定を保存します。

```
Are these settings correct?(Y/n)
```

- すべての設定を入力して保存すると、システムが Oracle VM Server コンソールセッションをロードします。
Oracle VM Server コンソールは、仮想オペレーティングシステムを作成するときに使用します。

```
Oracle VM Server 3.0.2 Console [Alt-F2 for login console]

Local hostname      : lynxp-ovm.us.oracle.com
Manager UUID       : 0004fb0000010000a060c639d1075957
Hostname           : None
Server IP          : None
Server Pool        : None
Clustered          : No
Server Pool Virtual IP : None
Cluster state      : Offline
Master Server      : No
Cluster type       : None
Cluster storage    : None

OVS Agent          : Running
VMs running        : 0
System memory      : 4087
Free memory        : 2439
Uptime             : 0 days, 4 hours, 33 minutes_
```

- これで、インストール済み Oracle VM Server の構成が完了します。

関連情報

-
- [128 ページの「Oracle VM のドキュメント」](#)

Oracle VM のドキュメント

Oracle VM の使用に関する詳細については、<http://www.oracle.com/technetwork/documentation/vm-096300.html> で入手できる Oracle VM ドキュメントを参照してください。

12

システムの電源の制御とインストール問題のトラブルシューティング

このセクションでは、サーバーの電源を入れ直す方法を説明し、トラブルシューティング情報を提供し、技術サポートワークシートを作成します。

説明	リンク
異常が発生したらサーバーの電源を切ります。	129 ページの「サーバーの電源切断による正常停止」
	130 ページの「サーバーの電源切断による即時停止」
サーバーをリセットします。	132 ページの「サーバーのリセット」
よくある問題の解決策を確認します。	132 ページの「インストールのトラブルシューティング」
情報を収集し、技術サポートに連絡します。	134 ページの「技術サポート情報ワークシート」
システムのシリアル番号を確認します。	134 ページの「システムのシリアル番号の確認」

関連情報

- ・ [9 ページの「設置手順の概要」](#)

サーバーの電源切断による正常停止

サーバーを正常停止させるには、次のいずれかのセクションの手順を実行します。これらの手順では、ACPI 対応のオペレーティングシステムによるオペレーティングシステムの正常停止を実行します。ACPI 対応の OS を実行していないサーバーは、シャットダウン後即座にスタンバイ電源モードに移行します。



注意

サーバーの電源を完全に切断するには、サーバーの背面パネルから電源コードを取り外す必要があります。

- ・ [130 ページの「電源ボタンを使用した正常な停止」](#)
- ・ [130 ページの「Oracle ILOM コマンド行インタフェースを使用した正常な停止」](#)
- ・ [130 ページの「Oracle ILOM Web インタフェースを使用した正常な停止」](#)

▼ 電源ボタンを使用した正常な停止

- ・ サーバーのフロントパネルにある電源ボタンを押してすぐに離します。
サーバーが正常な停止を実行して、スタンバイ電源モードに移行します。

関連情報

- ・ [14 ページの「フロントパネルのステータスインジケータ、コネクタ、ドライブ」](#)
- ・ [130 ページの「Oracle ILOM コマンド行インタフェースを使用した正常な停止」](#)
- ・ [130 ページの「Oracle ILOM Web インタフェースを使用した正常な停止」](#)
- ・ [131 ページの「電源ボタンを使用した即時停止」](#)

▼ Oracle ILOM コマンド行インタフェースを使用した正常な停止

1. 管理者アカウントを使用して、Oracle ILOM SP のコマンド行インタフェース (CLI) にログインします。
Oracle ILOM に正常にログインしたことを示すデフォルトのコマンドプロンプト (->) が表示されます。
2. CLI プロンプトで、次のコマンドを入力してサーバーの正常な電源停止を実行します:
-> **stop /System**
サーバーが正常な停止を実行して、スタンバイ電源モードに移行します。

関連情報

- ・ [130 ページの「電源ボタンを使用した正常な停止」](#)
- ・ [130 ページの「Oracle ILOM Web インタフェースを使用した正常な停止」](#)
- ・ [131 ページの「電源ボタンを使用した即時停止」](#)

▼ Oracle ILOM Web インタフェースを使用した正常な停止

1. 管理者アカウントを使用して、Oracle ILOM SP の Web インタフェースにログインします。
Oracle ILOM SP Web インタフェースの「System Information」 > 「Summary」ページが表示されます。
2. 左側のペインで、「Host Management」 > 「Power Control」をクリックし、「Select Action」リストボックスから「Graceful Shutdown and Power Off」を選択します。
3. 「Save」、「OK」の順にクリックします。
ホストサーバーが正常な停止を実行して、スタンバイ電源モードに移行します。

関連情報

- ・ [130 ページの「電源ボタンを使用した正常な停止」](#)
- ・ [130 ページの「Oracle ILOM コマンド行インタフェースを使用した正常な停止」](#)
- ・ [131 ページの「電源ボタンを使用した即時停止」](#)

サーバーの電源切断による即時停止

即時停止を実行するには、次のいずれかのセクションの手順を使用します。この方法を実行すると、サーバー上の保存されていないデータが失われます。



注意

サーバーの電源を完全に切断するには、サーバーの背面パネルから電源コードを取り外す必要があります。

- [131 ページの「電源ボタンを使用した即時停止」](#)
- [131 ページの「Oracle ILOM コマンド行インタフェースを使用した即時停止」](#)
- [131 ページの「Oracle ILOM Web インタフェースを使用した即時停止」](#)

▼ 電源ボタンを使用した即時停止

- 電源ボタンを少なくとも 4 秒間押し続けて、主電源を強制的にオフにします。これにより、サーバーがスタンバイ電源モードに移行します。
主電源がオフになると、フロントパネルにある電源/OK LED が点滅を開始し、サーバーがスタンバイ電源モードになっていることを示します。

関連情報

- [14 ページの「フロントパネルのステータスインジケータ、コネクタ、ドライブ」](#)
- [131 ページの「Oracle ILOM コマンド行インタフェースを使用した即時停止」](#)
- [131 ページの「Oracle ILOM Web インタフェースを使用した即時停止」](#)

▼ Oracle ILOM コマンド行インタフェースを使用した即時停止

1. 管理者アカウントを使用して、Oracle ILOM SP のコマンド行インタフェース (CLI) にログインします。
Oracle ILOM に正常にログインしたことを示すデフォルトのコマンドプロンプト (->) が表示されます。
2. CLI プロンプトで次のコマンドを入力します。
`-> stop -f /System`
サーバーが即座に停止して、スタンバイ電源モードに移行します。

関連情報

- [131 ページの「電源ボタンを使用した即時停止」](#)
- [131 ページの「Oracle ILOM Web インタフェースを使用した即時停止」](#)

▼ Oracle ILOM Web インタフェースを使用した即時停止

1. 管理者アカウントを使用して、Oracle ILOM SP の Web インタフェースにログインします。
Oracle ILOM SP Web インタフェースの「System Information」の「Summary」ページが表示されます。
2. 左側のペインで、「Host Management」>「Power Control」をクリックし、「Select Action」リストボックスから「Immediate Power Off」を選択します。
3. 「Save」、「OK」の順にクリックします。
サーバーが即座に停止して、スタンバイ電源モードに移行します。

関連情報

- [131 ページの「Oracle ILOM コマンド行インタフェースを使用した即時停止」](#)
- [131 ページの「電源ボタンを使用した即時停止」](#)

サーバーのリセット

サーバーをリセットするだけなら、サーバーの電源を入れ直す必要はありません。以下のいずれかのセクションの手順に従ってサーバーをリセットします。



注意

この方法を実行すると、サーバー上の保存されていないデータが失われます。このため、たとえば、サーバーのファイルシステムが破壊される可能性があります。

-
- [132 ページの「Oracle ILOM コマンド行インタフェースを使用したサーバーのリセット」](#)
 - [132 ページの「Oracle ILOM Web インタフェースを使用したサーバーのリセット」](#)

▼ Oracle ILOM コマンド行インタフェースを使用したサーバーのリセット

1. 管理者アカウントを使用して、Oracle ILOM SP のコマンド行インタフェース (CLI) にログインします。
Oracle ILOM に正常にログインしたことを示すデフォルトのコマンドプロンプト (->) が表示されます。
2. CLI プロンプトで次のコマンドを入力してサーバーをリセットします。
-> **reset /System**
サーバーがリセットされます。

関連情報

- [132 ページの「Oracle ILOM Web インタフェースを使用したサーバーのリセット」](#)

▼ Oracle ILOM Web インタフェースを使用したサーバーのリセット

1. 管理者アカウントを使用して、Oracle ILOM SP の Web インタフェースにログインします。
Oracle ILOM SP Web インタフェースの「System Information」 > 「Summary」ページが表示されます。
2. 左側のペインで、「Host Management」 > 「Power Control」をクリックし、「Select Action」リストボックスから「Reset」を選択します。
3. 「Save」、「OK」の順にクリックします。
ホストサーバーがリセットされます。

関連情報

- [132 ページの「Oracle ILOM コマンド行インタフェースを使用したサーバーのリセット」](#)

インストールのトラブルシューティング

サーバーの設定中に問題が発生したら、次の表のトラブルシューティング情報を参照してください。



注記

詳細なトラブルシューティング情報については、『サービス』の「サーバーのトラブルシューティング」を参照してください。

問題	可能な対処方法
サーバーの電源がオンなのに、モニターの電源がオンになりません。	<ul style="list-style-type: none"> ・ モニターの電源ボタンがオンになっていることを確認してください。 ・ モニターの電源コードが電源コンセントに接続されていることを確認してください。 ・ モニターの電源コードがモニターに接続されていることを確認してください。 ・ 電源コンセントに電力が供給されていることを確認してください。確認するには、別のデバイスを差し込んでテストしてください。
取り出しボタンを押しても DVD をメディアトレイから取り出せません。	<ul style="list-style-type: none"> ・ マウスを動かすか、キーボード上のいずれかのキーを押してください。ドライブが低消費電力モードになっている可能性があります。 ・ サーバーにインストールされているユーティリティソフトウェアを使用して、DVD を取り出してください。 ・ デバイス内のメディアが使用されておらず、オペレーティングシステムによってマウントされていないことを確認してください。
モニター画面にビデオが表示されません。	<ul style="list-style-type: none"> ・ モニターケーブルがビデオコネクタに接続されていることを確認してください。 ・ モニターを別のシステムに接続した場合に動作することを確認してください。 ・ 別のモニターがある場合は、そのモニターを元のシステムに接続して動作するかどうかを確認してください。 ・ POST および BIOS の完了後に、モニターにビデオ出力が表示されなくなり、点滅するカーソルのみが表示される場合は、オペレーティングシステムの構成を確認して、シリアル回線上で排他的に出力をリダイレクトするように構成されているかどうかを調べてください。
フロントパネルにある電源ボタンを押しても、サーバーの電源がオンになりません。	<p>Oracle サービス担当者に連絡する必要がある場合は、次の状況を書き留めておいてください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ システムのフロントパネルにある電源/OK LED が点灯していることを確認してください。(電源コードが、システムおよび接地電源コンセントに接続されていることを確認してください)。 ・ 電源コンセントに電力が供給されていることを確認してください。確認するには、別のデバイスを差し込んでテストしてください。 ・ 電源の投入後、5 分以内にモニターが同期することを確認してください。(モニターの緑色の LED が点滅を停止し、点灯状態になります)。 ・ Oracle ILOM の障害管理設定をチェックして、障害のあるコンポーネントや間違った電源管理設定によってシステムの電源が入らない状態になっていないか確認してください。
キーボードまたはマウスが操作に反応しません。	<ul style="list-style-type: none"> ・ マウスおよびキーボードのケーブルが、サーバー上のオンボード USB 2.0 コネクタに接続されていることを確認してください。 ・ サーバーの電源がオンで、前面の電源/OK LED が点灯していることを確認してください。
サーバーがハングアップしたり、動かなくなったりします。マウスやキーボード、またはアプリケーションから応答がありません。	<p>ネットワーク上の別のサーバーからシステムにアクセスしてください。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 別のシステム上で、「ping IP-address-of-server」と入力します。 2. 応答が返されたら、telnet、ssh、または rlogin のいずれかを使用してサーバーにログインします。 3. 正常にログインしたら、ps コマンドを使用して、実行中のプロセスを一覧表示します。 4. kill process-ID コマンドを使用して、応答していないプロセスや実行されるべきでないプロセスを終了します。

問題	可能な対処方法
	5. プロセスを 1 つ終了するたびに、サーバーの応答性を確認します。
	この手順を使用して問題を解決できない場合は、サーバーの電源を再投入します。
	1. 電源ボタンを押してサーバーの電源をオフにしてから、20 から 30 秒間待機します。
	2. もう一度電源ボタンを押して、システムの電源を再投入します。

関連情報

- [9 ページの「設置手順の概要」](#)
- [11 ページの「サーバーの機能とコンポーネント」](#)
- 『サービス』の「システムコンポーネントについて」

技術サポート情報ワークシート

トラブルシューティング情報を参照しても問題が解決しない場合は、次の表を用いて Oracle サポート担当者に伝える必要がある情報を収集してください。

必要なシステム構成情報	お客様の情報
サービス契約番号	
システムモデル	
オペレーティングシステム	
システムシリアル番号 (シリアル番号の表示位置については、 134 ページの「システムのシリアル番号の確認」 を参照してください。)	
システムに接続されている周辺装置	
お客様の電子メールアドレスと電話番号、および代理の連絡先	
システムの設置場所の住所	
スーパーユーザーのパスワード	
問題の概要と、問題が発生したときに実行した操作内容	
IP アドレス	
サーバー名 (システムのホスト名)	
ネットワークまたはインターネットのドメイン名	
プロキシサーバー構成	

関連情報

- 『サービス』の「システムコンポーネントについて」
- <http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs> にある『Oracle x86 サーバー診断、アプリケーション、およびユーティリティガイド Oracle ILOM 3.1 を使用するサーバー向け』

システムのシリアル番号の確認

システムの保守を依頼するときに、使用しているサーバーのシリアル番号が必要になることがあります。あとで使用するときのために、この番号を記録しておいてください。次のいずれかの方法を使用して、サーバーのシリアル番号を確認します。

-
- サーバーのフロントパネルで、シャーシの左側とステータス LED の下を確認します。
 - サーバーのパッケージに付属している黄色い Customer Information Sheet (CIS) を確認します。このシートにシリアル番号が記載されています。
 - Oracle ILOM Web インタフェースから、Oracle ILOM ブラウザインタフェースの「System Information」>「Summary」ページに移動します。
 - Oracle ILOM CLI で「**show /System**」と入力します。

13

サーバーファームウェアとソフトウェアの入手

このセクションでは、サーバーのファームウェアとソフトウェアにアクセスするためのオプションについて説明します。

説明	リンク
サーバーファームウェアとソフトウェアのアップデートについて学びます。	137 ページの「ファームウェアとソフトウェアのアップデート」
ファームウェアとソフトウェアへのアクセスオプションについて学びます。	138 ページの「ファームウェアとソフトウェアへのアクセスオプション」
使用可能なファームウェアとソフトウェアパッケージを確認します。	138 ページの「ソフトウェアリリース」
Oracle System Assistant, My Oracle Support、または物理メディアのリクエストにより、ファームウェアおよびソフトウェアパッケージにアクセスします。	139 ページの「ファームウェアとソフトウェアへのアクセス」
ファームウェアとソフトウェアのアップデートをインストールします。	142 ページの「その他の方法によるアップデートのインストール」

ファームウェアとソフトウェアのアップデート

サーバー用のハードウェアドライバやツールなどのファームウェアおよびソフトウェアは、定期的に更新されます。これらは、ソフトウェアリリースとして入手可能になります。ソフトウェアリリースは、サーバー用の使用可能なファームウェア、ハードウェアドライバ、ユーティリティをすべて含んだ一連のダウンロード (パッチ) です。これらすべては、まとめてテスト済みです。ダウンロードに含まれる ReadMe ドキュメントには、以前のソフトウェアリリースからの変更点および変更されていない点について説明されています。

サーバーのファームウェアとソフトウェアは、ソフトウェアリリースが入手可能になり次第、更新してください。ソフトウェアリリースには、多くの場合はバグの修正が含まれており、サーバーを更新することで、サーバーファームウェアおよびソフトウェアが最新であることが保証されます。

ダウンロードパッケージ内の ReadMe ファイルには、ダウンロードパッケージ内の更新されたファイル、および現在のリリースで修正されたバグに関する情報が含まれます。プロダクトノートには、サポートされるサーバーソフトウェアのバージョンに関する情報も含まれます。

ファームウェアとソフトウェアへのアクセスオプション

次のオプションのいずれかを使用して、使用するサーバー用の最新ファームウェアおよびソフトウェアセットを入手します。

- **Oracle System Assistant** – Oracle System Assistant は、出荷時にインストールされている、Oracle サーバー用の新しいオプションであり、サーバーのファームウェアおよびソフトウェアを簡単にダウンロードおよびインストールできるようにします。

Oracle System Assistant の使用方法の詳細は、『管理』、「Oracle System Assistant を使用したソフトウェアおよびファームウェアの設定」を参照してください。

- **My Oracle Support** – すべてのシステムファームおよびソフトウェアは、<http://support.oracle.com> の My Oracle Support から入手できます。

My Oracle Support Web サイトで入手可能な情報については、[138 ページの「ソフトウェアリリース」](#)を参照してください。

My Oracle Support からソフトウェアリリースをダウンロードする手順については、[139 ページの「My Oracle Support を使用したファームウェアとソフトウェアのダウンロード」](#)を参照してください。

- **物理メディアのリクエスト (PMR)** – My Oracle Support から入手可能なダウンロード (パッチ) を含む DVD をリクエストできます。

詳細は、[141 ページの「物理メディアのリクエスト \(オンライン\)」](#)を参照してください。

ソフトウェアリリース

My Oracle Support でのソフトウェアリリースは、製品ファミリ、続いて製品、さらにソフトウェアリリースバージョンでグループ化されます。バージョンには 1 つ以上のダウンロード (パッチ) が含まれます。

サーバーとブレードの場合、パターンは似ています。製品はサーバーです。サーバーごとにリリースセットが含まれます。これらのリリースは、実際のソフトウェア製品リリースではなく、サーバーの更新リリースのことです。これらの更新はソフトウェアリリースと呼ばれ、まとめてテスト済みの複数のダウンロードで構成されます。各ダウンロードには、ファームウェア、ドライバ、またはユーティリティが含まれます。

My Oracle Support では、次の表に示されているような、このサーバーファミリ用の一連のソフトウェアリリースが提供されています。これらも、物理メディアのリクエスト (PMR) を行なって依頼できます。Oracle System Assistant を使用しても、同じファームウェアおよびソフトウェアをダウンロードできます。

パッケージ名	説明	このパッケージをダウンロードするタイミング
X3-2L (X4270 M3) <i>SWversion</i> – Firmware Pack	Oracle ILOM、BIOS、およびオプションカードファームウェアを含む、すべてのシステムファームウェア。	最新のファームウェアが必要です。
X3-2L (X4270 M3) <i>SWversion</i> – OS Pack	OS Pack は、サポートされるオペレーティングシステムのバージョンごとに入	OS 固有のドライバ、ツール、またはユーティリティを更新する必要があります。

パッケージ名	説明	このパッケージをダウンロードするタイミング
	手できます。各 OS Pack には、その OS バージョン用のツール、ドライバ、およびユーティリティのパッケージすべてが含まれます。	
	ソフトウェアには、Oracle Hardware Management Pack および LSI MegaRAID ソフトウェアが含まれます。	
	Windows OS の場合、この OS Pack には Intel Network Teaming and Install Pack も含まれます。	
X3-2L (X4270 M3) SWversion - All Packs	Firmware Pack、すべての OS Pack、およびすべてのドキュメントを含みます。 このパックには、Oracle VTS や Oracle System Assistant イメージは含まれません。	システムファームウェアと OS 固有のソフトウェアの組み合わせを更新する必要があります。
X3-2L (X4270 M3) SWversion - Diagnostics	Oracle VTS 診断イメージ。	Oracle VTS 診断イメージが必要です。
X3-2L (X4270 M3) SWversion - Oracle System Assistant	Oracle System Assistant 復旧および ISO アップデートイメージ。	Oracle System Assistant を手動で復旧および更新する必要があります。

各ダウンロードは zip ファイルで、ReadMe ファイル、およびファームウェアやソフトウェアファイルを含むサブディレクトリセットが格納されています。ReadMe ファイルには、前回のソフトウェアリリース以降に変更されたコンポーネントおよび修正されたバグの詳細が記載されています。

ファームウェアとソフトウェアへのアクセス

このセクションでは、ソフトウェアリリースファイルをダウンロードまたはリクエストする方法について説明します。

Oracle System Assistant を使用して、最新のソフトウェアリリースを簡単にダウンロードして使用できます。詳細は、『[管理](#)』、「[Oracle System Assistant を使用したソフトウェアおよびファームウェアの設定](#)」を参照してください。

更新されたファームウェアおよびソフトウェアを入手する方法は、ほかにも My Oracle Support を使用する方法と、物理メディアをリクエストする方法の 2 つがあります。参照先:

- [139 ページの「My Oracle Support を使用したファームウェアとソフトウェアのダウンロード」](#)
- [140 ページの「物理メディアのリクエスト」](#)

▼ My Oracle Support を使用したファームウェアとソフトウェアのダウンロード

1. 次の Web サイトにアクセスします: <http://support.oracle.com>。
2. My Oracle Support にサインインします。
3. ページの上部にある「パッチと更新版」タブをクリックします。
画面右に「パッチ検索」ペインが表示されます。
4. 「検索」タブ領域内で、「製品またはファミリ (拡張検索)」をクリックします。
検索フィールドを含む「検索」タブ領域が表示されます。

5. 「製品」フィールドで、ドロップダウンリストから製品を選択します。
あるいは、目的の製品が表示されるまで製品名のすべてまたは一部を入力します。たとえば、Sun Server X3-2L (旧 Sun Fire X4270 M3) です。
6. 「リリース」フィールドで、ドロップダウンリストからソフトウェアリリースを選択します。
7. 「検索」をクリックします。
「パッチの詳細検索結果」画面が表示され、ソフトウェアリリースのパッチが一覧表示されます。
入手可能なダウンロードについては、[138 ページの「ソフトウェアリリース」](#)を参照してください。
8. ソフトウェアリリースのパッチを選択するには、ソフトウェアリリースバージョンの横のパッチ番号をクリックします (shift キーを使用して複数のパッチを選択できます)。
アクションパネルがポップアップ表示されます。ポップアップパネルには、「README」、「計画に追加」および「ダウンロード」オプションを含め、いくつかのアクションオプションがあります。「計画に追加」オプションの詳細は、関連するドロップダウンボタンをクリックして、「なぜ計画を使用するのですか。」を選択してください。
9. パッチの ReadMe ファイルを確認するには、「README」をクリックします。
10. パッチをダウンロードするには、「ダウンロード」をクリックします。
「ファイル・ダウンロード」ダイアログボックスが表示されます。
11. 「ファイル・ダウンロード」ダイアログボックスで、パッチの zip ファイル名をクリックします。
ソフトウェアリリースのパッチがダウンロードされます。

物理メディアのリクエスト

Oracle Web サイトからダウンロードできない場合は、物理メディアのリクエスト (PMR) で最新のソフトウェアリリースを入手できます。

次の表に、物理メディアをリクエストするためのハイレベルタスク、および詳細情報の入手先のリンクを示します。

説明	リンク
リクエストに必要な情報を収集します。	140 ページの「物理メディアのリクエスト用の情報を収集する」
オンラインまたは Oracle サポートに電話して物理メディアをリクエストします。	141 ページの「物理メディアのリクエスト (オンライン)」 142 ページの「物理メディアのリクエスト (電話)」

物理メディアのリクエスト用の情報を収集する

物理メディアのリクエスト (PMR) を行うには、サーバーの保証またはサポート契約が必要です。

PMR を実行する前に、次の情報を収集します。

- 製品名、ソフトウェアリリースのバージョン、および必須パッチを入手します。最新のソフトウェアリリースおよびリクエストしているダウンロードパッケージ (パッチ) の名前を知っていると、リクエストを実行しやすくなります。
- *My Oracle Support* へのアクセス権をお持ちの場合 - [139 ページの「My Oracle Support を使用したファームウェアとソフトウェアのダウンロード」](#)に記載されている手順に従って、最新のソフトウェアリリースを確認し、入手可能なダウンロード (パッチ) を表示します。パッチのリス

トを表示したあと、ダウンロード手順を続行しない場合は「パッチの詳細検索結果」ページからほかのページに移動できます。

- My Oracle Support へのアクセス権をお持ちでない場合 - 138 ページの「ソフトウェアリリース」に記載されている情報を使用して、必要なパッケージを確認し、それらのパッケージをリクエストして最新のソフトウェアリリースを入手します。
- 出荷情報を手元に用意します。リクエストの際に、連絡先、電話番号、電子メールアドレス、会社名、および出荷先住所を入力する必要があります。

▼ 物理メディアのリクエスト (オンライン)

140 ページの「物理メディアのリクエスト用の情報を収集する」に記載されている情報を収集してから、リクエストを行います。

1. 次の Web サイトにアクセスします: <http://support.oracle.com>。
2. My Oracle Support にサインインします。
3. ページの右上の「問合せ先」リンクをクリックします。
「サービス・リクエストの作成」の「問題」画面が表示されます。
4. 「リクエストの説明」セクションに、次の情報を入力します。
 - a. 「問題のサマリー」フィールドに、「Sun Server X3-2L」の最新ソフトウェアリリースの **PMR** と入力します。
 - b. 「問題タイプ」ドロップダウンメニューで、次を選択します。

ソフトウェアおよび OS メディアリクエスト
 - c. 「サポート ID」フィールドに、サポート契約に関連付けられたカスタマサポート ID を入力します。
5. 「サービス・リクエストの作成」の「選択」画面をスキップするため、画面右上隅の「次へ」ボタンを 2 回クリックします。
「サービス・リクエストの作成」の「詳細」画面が表示されます。
6. 「追加情報」セクションで、次の表に示した質問に答えます。

質問	回答
メディアの入手をご希望ですか。	はい
どちらの製品ラインのメディアをご希望でしょうか。	Sun 製品
パッチをダウンロードするためのパスワードに関する問い合わせでしょうか。	いいえ
CD や DVD でパッチをご希望ですか。	はい
パッチを CD や DVD でご希望の場合、パッチの番号、OS とプラットフォームをお知らせください。	希望するソフトウェアリリースのダウンロードごとに、パッチ番号を入力してください。
ご希望の製品名とバージョンをお知らせください。	製品名: Sun Server X3-2L。 バージョン: 最新のソフトウェアリリース番号。
希望されているメディアの OS とプラットフォームをお知らせください。	OS 固有のダウンロードをリクエストする場合は、ここで OS を指定します。システムファームウェアのみをリクエストする場合は、「一般」と入力します。
メディアに言語は必要ですか。	いいえ

7. 送付先/連絡先情報 (連絡先の名前、電話番号、電子メールアドレス、会社名、送付先住所など) を入力します。

8. 「次へ」をクリックします。
「サービス・リクエストの作成」の「重大度/連絡先」画面が表示されます。
9. 連絡先電話番号と好みの連絡手段を入力します。
10. 送信ボタンをクリックします。
これで、物理メディアのリクエストが完了します。物理メディアを受け取るまで、最大 7 営業日かかる可能性があります。

▼ 物理メディアのリクエスト (電話)

140 ページの「物理メディアのリクエスト用の情報を収集する」に記載されている情報を収集してから、リクエストを行います。

1. 次の Oracle Global Customer Support Contacts Directory にある該当する番号を使用して、Oracle サポートに電話をかけます。
<http://www.oracle.com/us/support/contact-068555.html>
2. Sun Server X3-2L の物理メディアのリクエスト (PMR) を行いたい旨を Oracle サポートに伝えます。
 - My Oracle Support から特定のソフトウェアリリースおよびパッチ番号の情報にアクセスできる場合は、この情報をサポート担当者に伝えます。
 - ソフトウェアのリリース情報にアクセスできない場合は、Sun Server X3-2L の最新のソフトウェアリリースをリクエストします。

その他の方法によるアップデートのインストール

Oracle System Assistant と My Oracle Support を使用する以外に、次のいずれかの方法を使用して、更新されたファームウェアおよびソフトウェアをインストールできます。

- **Oracle Enterprise Manager Ops Center** – Ops Center Enterprise Controller で最新のファームウェアを Oracle から自動的にダウンロードすることも、Enterprise Controller に手動でロードすることもできます。どちらの場合も、Ops Center でファームウェアを 1 つ以上のサーバー、ブレード、またはブレードシャーシにインストールできます。

詳細は、<http://www.oracle.com/technetwork/oem/ops-center/index.html> を参照してください。

- **Oracle Hardware Management Pack** – Oracle Hardware Management Pack 内の **fwupdate** CLI ツールを使用して、システム内部のファームウェアを更新できます。

詳細は、<http://www.oracle.com/goto/OHMP/docs> で Oracle Hardware Management Pack ドキュメントライブラリを参照してください。

- **Oracle ILOM** – Oracle ILOM および BIOS ファームウェアは、Oracle ILOM Web インタフェースまたはコマンド行インタフェースを使用して更新可能な唯一のファームウェアです。

詳細は、<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=ilom31> の Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.1 ドキュメントライブラリを参照してください。

索引

シンボル

ESD に関する注意事項, 25
Ethernet 接続、Oracle ILOM へのログイン, 66, 68
Ethernet ポート, 58

あ

インストール済みオペレーティングシステム
Oracle Solaris, 117
Oracle Solaris、構成, 110
Oracle VM、構成, 123
オプションのコンポーネント、取り付け, 24
オペレーティングシステム
Oracle Solaris OS
インストール済みソフトウェアの構成, 110, 117
ユーザードキュメントの場所, 115
Oracle VM
インストール済みソフトウェアの構成, 123
ユーザードキュメントの場所, 128

か

緊急停止, 130, 131
ケーブル管理アーム (CMA)
サーバーへの取り付け, 37, 50
動作の確認, 53
取り外し, 46
ケーブルハンガー、サーバーへの取り付け, 52
工具不要スライドレール構成部品、取り付け, 33
固定部品、取り付け, 31

さ

サーバー、電源のリセット, 98, 100, 101, 107
サーバーのインストール
トラブルシューティング, 132
サーバーの重量, 25
サーバーの設置
ESD に関する注意事項, 25
オプションのコンポーネント, 24
サーバーの設置、設置に必要な工具, 24
サーバーのラックへの設置, 27
サーバーのリセット, 132
サポート用ワークシート, 134
シャーシ、位置決め用ピン, 31
出荷用キットの内容, 23
シリアル管理 (SER MGT) ポート
位置, 58
スライドレール
動作の確認, 53
正常な停止, 129

た

停止
正常な停止, 129

電源切断
即時停止, 130
電源投入時自己診断 (POST), 133
電源ボタン
緊急電源切断, 131
正常な停止, 130
トラブルシューティング, 132

な

ネットワーク管理 (NET MGT) ポート、位置, 58

は

配線
必要なケーブル接続, 57
ビデオポート、位置, 59

ら

ラックへの設置, 27
ラックマウント
CMA スライドレールコネクタ, 51
キット, 27
ケーブルハンガー、サーバーへの取り付け, 52
サーバーへのケーブルの取り付け, 52
ラックの固定, 30, 44, 47, 54
レール構成部品, 27
レール構成部品, 27

わ

ワークシート、サポート, 134
